

昭和44年度

地力保全基本調査成績書

〔士別地域・士別市〕

北海道立上川農業試験場

(98)

序

現状における土地生産力は諸種の土壤的阻害要因によつて充分にその地力を発揚できない場合が少くないのみならず、一方では剥脱要因もあつてその地力は消耗低下しつつある。従つてこれら阻害要因を排除して合理的かつ適切な地力保全の対策を推進し、もつて当面の農業構造改善の基礎整備に資するため、昭和34年より農林省農政局の助成を得て基本的土壤調査分類を実施している。

本調査成績書は昭和44年度に行なつた12地域16市町村をとりまとめたもので、ここにこれを公表し當農安定の資に供する次第である。

現地調査の遂行に際して御協力を得た関係市町村、農業協同組合ならびに農業改良普及所の関係各位に対して、深く感謝の意を表する。

昭和45年3月

北海道立中央農業試験場

場長 和田忠雄

調査並びに取まとめ方法

本調査は、凡そ 100 ha 以上の集団になつてゐる農耕地および付帯地を調査対象とし、調査および取まとめに當つては、天々下記の資料に基づいた。

1. 土壌断面調査および現地での當農状況は地力保全対策資料第 6 号（昭和 36 年 9 月、農林省振興局農産課）によつた。
2. 土壌統および区の設定並びに土壌生産力可能性等級基準は、地力保全対策資料第 12 号（昭和 40 年 3 月、農林省農政局農産課）及び水田土壤統設定第 1 次案（昭和 38 年 12 月、農技研化学部土壤第 3 科）による。
3. 土壌統および上壤区の設定に當つては、北海道農業試験場農芸化学部土壤肥料第 1 研究室の土性図を参照した。

化 学 部 部 長 森 哲 郎

土壌改良科 科 長 後 藤 計 二

第 1 係長 小 林 庄 司

研究職員 水 元 秀 彰

“ 伊 藤 輝 行

“ 木 村 清

“ 松 原 一 実

第 2 係長 山 口 正 宋

研究職員 小 林 茂

“ 宮 脇 忠

“ 山 本 晴 雄

“ 高 橋 市十郎

“ 上 坂 晶 司

十勝農試 “ 菊 地 晃 二

“ 関 谷 長 詔

“ 横 井 義 雄

北見農試 “ 秋 山 審三郎

上川農試 “ 野 崎 輝 義

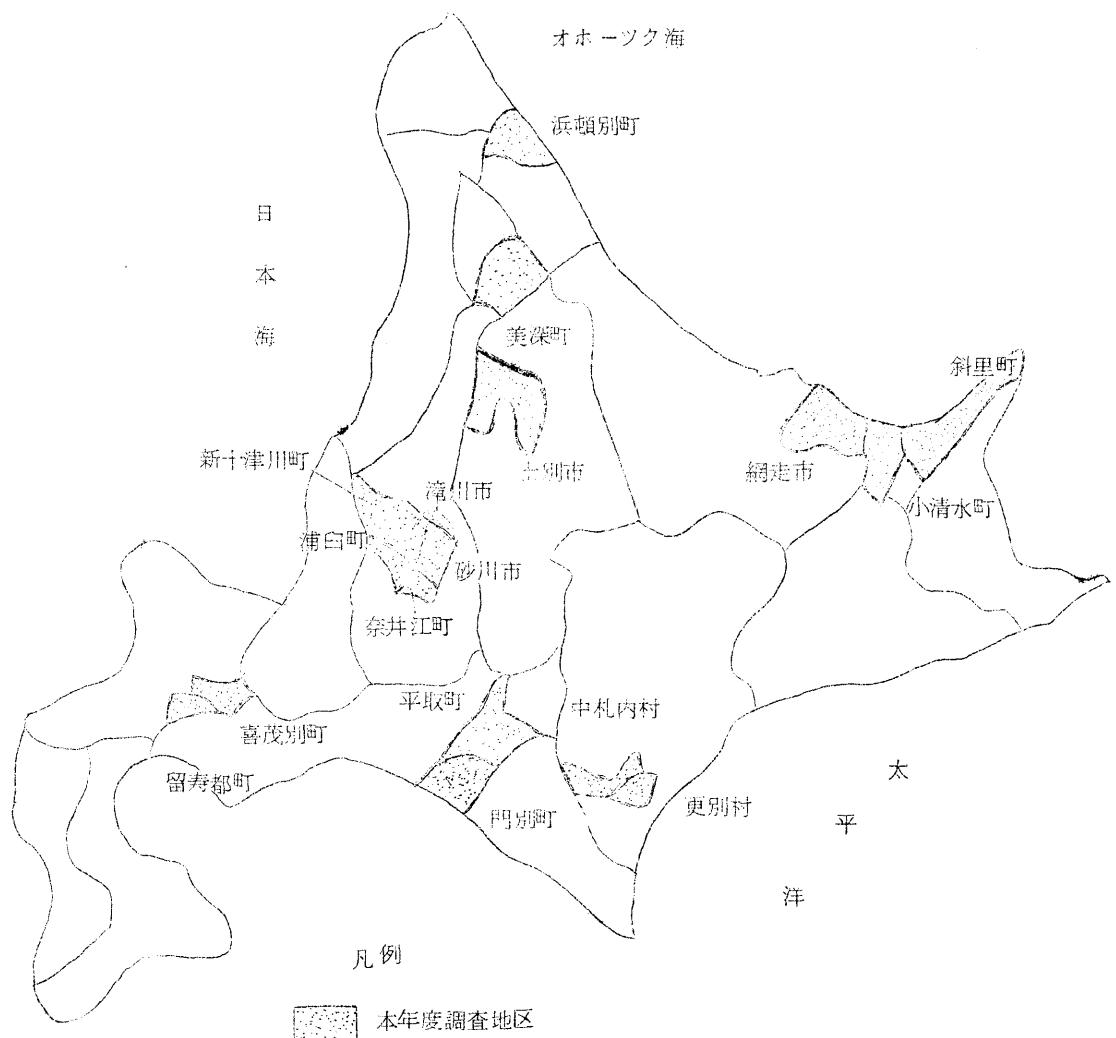
“ 土 居 晃 郎

天北農試 “ 関 口 久 雄

1 調査地域一覧

調査地域名	該当市町村名	農地面積 (調査対象面積) (ha)		既調査面積 (ha)		本年度調査面積 (ha)	
		水田	畠	水田	畠	水田	畠
樺戸	新十津川町	4,949	1,256	0	256	4,949	1,000
石狩川下流	浦臼町	2,002	1,141	0	141	2,002	1,000
空知中部	奈井江町	2,216	492	0	492	2,216	0
	砂川市	1,344	1,036	44	36	1,300	1,000
羊蹄山麓	留寿都村	60	2,675	60	75	0	2,600
	喜茂別町	232	2,003	232	3	0	2,000
日高北部内陸	平取町	1,244	2,364	244	364	1,000	2,000
日高沿海	門別町	1,162	3,183	162	183	1,000	3,000
斜里	斜里町	2	9,920	2	720	0	9,200
	小清水町	0	8,852	0	852	0	8,000
網走湖畔	網走市	37	13,794	87	3,794	0	10,000
士別	士別市	7,212	7,009	3,212	4,009	4,000	3,000
上川北部	美深町	1,016	4,535	16	535	1,000	4,000
日高山脈東山麓	更別村	0	9,180	0	180	0	9,000
	中札内村	0	6,428	0	428	0	6,000
頓別	浜頓別町	0	1,292	0	0	0	1,292
計12地域	16市町村	21,526	75,160	4,059	12,058	17,467	63,092

調査地区位置図



1 地域の概況

1) 位置及び調査面積

(1) 位置 北海道士別市

(2) 調査面積(ha)

都市町村名	農地総面積				調査対象面積			
	水田	普通畑	樹園地	計	水田	普通畑	樹園地	計
士別市	8,450	5,670	—	14,100	8,450	5,670	—	14,100

都市町村名	過年度調査面積				本年度調査面積			
	水田	普通畑	樹園地	計	水田	普通畑	樹園地	計
士別市	4,238	3,800	—	8,038	4,212	0	—	4,212

都市町村名	次年度以降調査計画面積				備考
	水田	普通畑	樹園地	計	
士別市	0	1,870	—	1,870	

2) 気象

本道の内陸部に位置し、大陸性気候を呈し気温の較差が著しく、春季は稍乾燥し、夏は高温寡雨であるが、秋季急激に冷涼となり、多雨寡照を示すのが特徴である。

士別市にある北海道立上川農業試験場畠作科観測によると次の如くである(10ヶ年平均)

項目	月別	4	5	6	7	8	9	10	11
平均気温(℃)		4.3	11.4	15.8	19.5	20.4	15.4	8.8	1.2
最高気温(℃)		8.9	17.5	21.3	24.3	24.9	20.4	13.6	4.7
最低気温(℃)		-0.8	5.4	10.3	14.6	15.8	10.5	3.6	-2.5
平均降水量(mm)		17.3	24.4	31.1	40.5	38.5	56.8	29.8	40.8
平均日照時間(h)		71.2	75.5	70.7	64.9	58.1	50.4	47.0	25.4
平均降水日数(日)		3.4	3.3	3.9	4.2	4.3	5.3	4.7	6.7

3) 土地条件

本地区の主要農耕地帯は、本市の中央部を貫流する天塩川と、これに合流する劍淵川、丈牛別川の流域に沿つて帶状に分布している。地形は天塩川流域の平坦な沖積地帯と、山から押出された扇状堆

積土が存在する他に支流域の平地、段丘、丘陵性地が大部分を占めている。昔は天塩川が蛇行し、時々洪水があつたが、最近は河川の切替、護岸工事によつて洪水は減少している。

4) 土地利用及び営農状況

(1) 士別市全体の状況は次の通りである。

A. 経営面積(ha)

総面積	水田	普通畑	樹園地	其他
14,103	8,450	5,670	—	565

B. 作付面積(ha)

作物	水稻	小麥	えん麦	馬鈴薯	えんどう	大豆	小豆	てん菜	いんげん豆
面積	7,880	22	322	1,810	53	36	723	233	72

C. 家畜の種類及び頭数

	馬	乳牛	豚	綿羊	鶏
飼育戸数	1,950	273	132	48	1,075
飼育頭数	1,965	1,617	645	92	25,454
1戸当たり平均飼育頭数	1.0	5.9	4.9	1.9	23.7

(2) 本年度調査地区の概況

平坦な沖積地帯及び洪積台地に存在する農家は殆んど水田農家が主で、経営は大体安定している。一方、丘陵地に存在する農家は主として畑作に依存しているが、土壤の生産力が極めて低いため経営の不安定な面がうかがわれる。家畜の飼育状況をみると、1戸平均馬1頭、乳牛5.9頭で、徐々に混同経営になりつつある。

2 土壤類型区分及び説明

1) 土壤統一観及び土壤区一覧

(1) 土壤統一観

(水田)

土壤統名	色層序	腐植層序	礫層及び 砂礫層	酸化 沈積物	土性		泥炭	黒泥
					表土	次層		
南線	YR/G	表層腐植層	70cm以下	あり	強粘質	強粘質	なし	なし
仲線	Y/G	表層腐植層なし	"	"	"	"	"	"
犬牛別	Y/G	表層多腐植層	"	"	"	"	"	"
西士別	YR/Y	表層腐植層	"	"	"	"	"	"
南士別	Y/Y	全層腐植層	"	"	"	"	"	"
南町	Y/YR	表層腐植層	"	"	"	"	"	"
北町	Y/Y	"	"	"	"	"	"	"
上士別南	Y/Y	表層腐植層なし	"	"	"	"	"	"
川南中央	Y/Y	表層腐植層	"	"	粘質	壤質	"	"
大和	YR/YR	"	"	"	強粘質	強粘質	"	"

土壤統名	グライ	堆積様式	母材
南線	45cm以下	水積(河成)	非固結水成岩
仲線	15cm以下	洪積世堆積	"
犬牛別	75cm以下	水積(河成)	"
西士別	なし	"	"
南士別	"	"	"
南町	"	洪積世堆積	"
北町	"	水積(河成)	"
上士別南	"	洪積世堆積	非固結火成岩
川南中央	"	水積(河成)	非固結水成岩
大和	"	洪積世堆積	非固結火成岩

土壤統名	色層序	腐植層序	礫層及び 砂礫層	酸化 沈積物	土性		泥炭	黒泥
					表土	次層		
多寄	N/YR	全層多腐植層	なし	あり	強粘質	強粘質	20cm~ 69cm	なし
多寄北	N/YR	表層腐植層	"	"	"	"	なし	"
多寄東	B/B	表層腐植層なし	"	"	"	"	"	"
兼内	B/Y	"	"	"	"	"	"	"
中士別中	N/YR	"	22cm以下	"	"	"	"	"
武徳	N/Y	表層腐植層	なし	"	"	"	"	"
日向	N/YR	"	"	"	"	"	"	"
下士別西	N/YR	"	53cm以下	"	"	"	"	"
上士別北	N/Y	"	55cm以下	"	粘質	"	"	"
下士別	N/Y	"	なし	"	強粘質	"	"	"
中士別南	N/Y	"	30cm以下	"	粘質	"	"	"

土壤統名	グライ	堆積様式	母材	施肥改善土壤類型
多寄	全層	水積集積	非固結水成岩 ヨシ・ハンの木	A.3
多寄北	"	水積(河成)	非固結水成岩	D.31
多寄東	"	洪積世堆積	"	D.30
兼内	"	水積(扇状)	"	D.33
中士別中	22cm以内	水積(河成)	"	j.91
武徳	24cm以内	洪積世堆積	"	G.60
日向	なし	水積(河成)	"	G.60
下士別西	12cm以内	"	"	K.93
上士別北	33cm以内	水積(扇状)	"	G.52
下士別	22cm以内	水積(河成)	"	i.81
中士別南	22cm以内	"	"	i.84

(畑)

土壤統名	色層序	腐植層序	礫層及び砂礫層	酸化沈積物	土壤性		泥炭	黒泥	堆積様式	母材
					表土	次層				
大英	YR/YR	表層腐植層	なし	なし	粘質	壤質	なし	なし	残積	固結火成岩
成美	YR/YR	"	"	"	強粘質	強粘質	"	"	洪積世堆積	"
川南	YR/YR	"	"	"	"	"	"	"	残積	変成岩
川西南	YR/YR	"	"	"	"	"	"	"	"	固結火成岩
兼内南	YR/YR	表層腐植層なし	あり	"	粘質	粘質	"	"	水積(河成)	非固結水成岩
東山南	YR/YR	"	"	"	強粘質	強粘質	"	"	残積	固結水成岩
川西北	YR/YR	"	なし	"	"	"	"	"	"	"
東山	YR/YR	"	"	"	"	"	"	"	"	"
川西中央	Y/Y	"	"	あり	"	"	"	"	"	"
中士別	YR/YR	表層腐植層	あり	なし	"	"	"	"	水積(河成)	非固結水成岩
北武徳	Y/R	"	なし	"	"	"	"	"	残積	固結火成岩
東陽	YR/YR	表層腐植層なし	"	"	"	"	"	"	"	固結水成岩
東多寄	Y/Y	表層腐植層	"	あり	"	"	"	"	洪積世堆積	非固結水成岩
中武徳	YR/YR	表層腐植層なし	"	"	"	"	"	"	"	"
南武徳	YR/YR	表層腐植層	あり	なし	"	"	"	"	崩積	"

(2) 土壤区一覧

(水田)

土壤区名	簡略分級式	面積(fa)	備考
南線一南線	Ⅱd p r f n a	280	
仲線一仲線	Ⅲp r Ⅱt f n	300	
犬牛別一犬牛別	Ⅲp Ⅱf n a	500	
西士別一西士別	Ⅲp Ⅱr f n	140	
南士別一南士別	Ⅲp Ⅱr n	300	
南町一南町	Ⅲp Ⅱt r f n	200	
北町一北町	Ⅲp Ⅱr n	350	
上士別南一上士別南	Ⅲp Ⅱr f n	130	
川南中央一川南中央	Ⅲt p l r f n	550	
大和一大和	Ⅲp Ⅱr f n	500	
多寄一多寄	Ⅲr Ⅱt l f a	120	
多寄北一多寄北	Ⅲp r Ⅱt f n	420	
多寄東一多寄東	Ⅲp Ⅱt r f n	290	
兼内一兼内	Ⅲp Ⅱt r f n	40	
中士別中一中士別中	Ⅲd p Ⅱt f n	350	
武徳一武徳	Ⅲt p l f n	740	
日向一日向	Ⅲp Ⅱt f n	250	
下士別西一下士別西	Ⅲt p f n	270	
上士別北一上士別北	Ⅲt p f n	195	
下士別一下士別	Ⅲp Ⅱt l n	120	
中士別南一中士別南	Ⅲt d p f n	430	

(番)

土壤区名	簡略分級式	面積(ha)	備考
大英一 大英	Ⅲ se Ⅱ tf ni	450	
成美一 成美	Ⅲ se Ⅱ tg fn i	450	
川南一 川南	Ⅲ se Ⅱ tg pf ni	450	
川西南一 川西南～1	Ⅲ t n se Ⅱ gp fi	140	
— 川西南～2	Ⅲ pn e Ⅱ tg is	250	
兼内南一 兼内南		60	
東山南一 東山南	Ⅳ i Ⅲ tapne Ⅱ fs	110	
川西北一 川西北	Ⅲ pn se Ⅱ tg fi	250	
東山一 東山	Ⅲ pn e Ⅱ tf is	100	
川西中央一 川西中央	Ⅲ t pn e Ⅱ gw fis	90	
中士別一 中士別	Ⅲ n Ⅱ tg pf	200	
北武徳一 北武徳	Ⅲ t f n Ⅱ p se	90	
東陽一 東陽～1	Ⅲ n Ⅱ tg pf se	200	
— 東陽～2	Ⅲ n s Ⅱ tg pf e	150	
東多寄一 東多寄～1	Ⅲ w n Ⅱ tp f	310	
— 東多寄～2	Ⅲ w n Ⅱ tp f	200	
中武徳一 中武徳	Ⅲ w Ⅱ tp n	200	
南武徳一 南武徳	Ⅲ t d Ⅱ pn i	150	

南 線 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15～20cmで腐植含量5～7%、土性はL i Cを主とする。色は2.5 Yで、彩度2、明度4～5である。礫を含まず、粒質構造で細孔に富み、膜状斑鉄を含む。ち密度1.4～1.6で中である。PH(H₂O)5.5前後、下層との境界は平坦明瞭である。

第2層は厚さ25～30cmで腐植含量4～5%、土性L i C、色は10 Y R、彩度2、明度4～5である。細粒状構造で細孔を含み、膜状、糸根状斑鉄を含むから富む。ち密度2.0～2.2で中である。PH(H₂O)5.5～5.6前後、下層との境界は平坦で明瞭。

第3層は厚さ20～30cm、腐植含量4%、土性H Cを主とする。色は5 G Yで、彩度1、明度4～5、細塊状構造で細孔を含み、斑鉄なし、ち密度1.8～2.0で中である。PH(H₂O)5.5、下層との境界やや明瞭。

第4層は30～50cm以上の砂礫層である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市温根別 試坑3 田西貞光

第1層	0～17cm	腐植に富む暗灰黄(2.5 Y 5/2)のL i C、粒質構造、細孔に富む。膜状斑鉄を含む。ち密度1.5、PH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り潤。境界平坦明瞭。
第2層	17～45cm	腐植を含む灰黄褐(10 Y R 5/2)のL i C、細粒構造、細孔を含む。膜状、糸根状斑鉄を含む、ち密度2.2で中、PH(H ₂ O)5.8、調査時の湿り潤、境界平坦で明瞭。
第3層	45～70cm	腐植を含む暗オリーブ灰(5 G Y 4/1)のH C、細塊状構造、細孔を含み、ち密度1.8で中、PH(H ₂ O)5.5、調査時の湿り潤、境界やや明瞭
第4層	70cm以下	砂礫層

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重 量 %	粒 径 組 成 %				土 性	現地容 積重 g	真比重	全炭素 %
				粗 砂	細 砂	シルト	粘 土				
1	0~17	3.34		6.14	27.28	24.18	32.40	LiC			324
2	17~45	4.20		2.81	31.58	32.92	32.69	LiC			248
3	45~70	4.09		3.62	19.38	14.82	62.19	HC			232

層位	全窒素 %	炭素率	腐植 %	p H		置換酸 度 Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩基 飽和度 %
				H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O	
1	0.15	21.60	5.58	5.6	4.5	8.75	17.1	9.4	0.8	0.2	54.9
2	0.11	22.55	4.27	5.8	4.6	5.63	26.0	11.5	1.7	0.1	44.0
3	0.13	17.85	4.00	5.5	4.3	18.75	21.6	6.3	1.2	0.7	29.2

層位	磷酸吸 収係数	有効態 mg/100g		乾土 効果	30℃:NH ₄ -N 発生量 mg/100g		遊離酸 化鉄 %
		P ₂ O ₅	N		乾土	湿土	
1	470	2.20	17.24	10.78	17.24	6.46	1.08
2	950	tr	12.63	5.95	12.63	6.68	1.12
3	1,300	tr	12.31	2.77	12.31	9.54	—

A - 2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては仲線統と犬牛別統がある。

仲線統は堆積様式を異にし、犬牛別統は腐植層序を異にし下層に礫の出現がないため夫々本統と区別される。

A - 3 母 材 非固結水成岩

A - 4 堆積様式 水積(河成)

B 地 形 平坦(沢)

C 気 候 年平均気温 5.6 °C 年降水量 1,185 mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項 深耕、有機物

F 分 布 北海道士別市温根別

調査及び記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年 月 日

昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覽

土壤区名	簡略分級式
南線統一南線區	ldprfna

(2) 土壤区別説明

南線統一南線區

示性分級式(水田)

A 土壤区の特徴

この土壤区は南線続に属する。表土の厚さは、15～20cmで中庸で、有効土層は70～80cmで、表土の土性はL i Cで粘着性が強く耕起、碎土は比較的困難である。保肥力中、固定力がごく小さく、塩基状態は高い。自然肥沃度は中庸である。

養分は石灰多く、苦土、カリ、磷酸、窒素は中、地形はおおむね平坦地である。

B 植生及び利用状況

水稻が主体で一部に畑作物が栽培されている。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は比較的物理的障害性が少ないので深耕と併せて有機物の補給により地力の培養が望ましい。

D 分布 北海道士別市温根別

記載責任者 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

日付 昭和 45 年 3 月 31 日

仲 線 統

(1) 土壌統の概要

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~20cmで腐植含量5.0%前後、土性はLiC~HCが主である。色は10YR、彩度3~4、明度5~6、礫を含まず、粒質構造で細孔を含み、膜状斑鉄を含む。ち密度15~17で中である。PH(H₂O)5.0~5.2、下層との境界は平坦明瞭である。

第2層は厚さ30~40cmで腐植含量2~3%、土性HC、色は10G、彩度1、明度6~7、礫を含まず、連結状構造で、ち密度17~20で中である。PH(H₂O)5.5前後、下層との境界はやや明瞭。

第3層は厚さ50cm以上で腐植含量1~2%前後で土性はHC、色は7.5Y、彩度2、明度6~8、礫を含まず、塊状構造でち密度20前後で中、PH(H₂O)6.0前後。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市温根別北3線 試坑19 中西政信

第1層	0~15cm	腐植を含むにぶい黄橙(10YR 6/4)のLiC、粒質構造、細孔を含み、膜状斑鉄を含む。ち密度16、PH(H ₂ O)5.2、境界平坦明瞭、調査時の湿り湿。
第2層	15~55cm	腐植を含む明綠灰(10G 7/1)のHC、連結状構造、ち密度17で中、PH(H ₂ O)5.5、境界は平坦でやや明瞭、調査時の湿り湿。
第3層	55cm以下	腐植に欠く灰白(7.5Y 8/2)のHC、塊状構造、ち密度19で中、PH(H ₂ O)6.2、調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重 量 %	粒 径 組 成 %				土 性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %
				粗 砂	細 砂	シルト	粘 土				
1	0~15	4.78	/	4.67	15.35	37.68	42.30	LiC	/	/	2.87
2	15~55	3.48	/	0.19	16.57	27.15	56.09	HC	/	/	1.44
3	55~	3.89	/	1.25	10.25	38.91	49.58	HC	/	/	0.92

層位	全窒素%	炭素率	腐植%	p H		置換酸度Y ₁	塩基置換容量me/100g	置換性塩基me/100g			塩基飽和度%
				H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O	
1	0.18	15.94	4.95	5.2	4.1	2.000	2.23	1.87	2.4	0.4	83.8
2	0.09	16.00	2.48	5.5	4.1	2.500	1.86	1.46	2.4	0.5	78.4
3	0.02	46.00	1.59	6.2	4.8	11.88	1.56	1.52	4.8	0.3	97.4

層位	燃吸吸収係数	有効態mg/100g		乾土 効果	30℃:NH ₄ -N 発生量mg/100g		遊離酸化鉄%
		P ₂ O ₅	N		乾土	湿土	
1	940	1.49	20.98	10.31	20.98	10.67	1.14
2	1,150	tr	5.58	0.82	5.58	4.76	1.38
3	1,100	tr	6.87	1.50	6.87	5.37	—

A - 2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては犬牛別統がある。

犬牛別統とは堆積様式と腐植層序を異にするので本統と区別する。

A - 3 母材 非固結水成岩

A - 4 堆積様式 洪積世堆積

B 地形 やや緩波状地

C 気候 年平均気温 5.6℃ 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛昨日)

E 農業上の留意事項 深耕、有機物、排水

F 分布 北海道士別市温根別

調査及び記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
仲線統－仲線区	III p r II t f n

(2) 土壤区別説明

仲線統－仲線区

示性分級式(水田)

土壤	表土	耕作	湛水	浸透	自保	養生	障害	災害
生産力	効土	表土	作業	遊遊	保濕	固土	置換	微酸
の層	耘土	土水	土化	分離	地	然然	分換	物理
可能	土の	土土	下下	酸性	地	性性	効率	害物
性	の風	5050	透性	化性	イの水	水潤肥	加鹽塗基	冠水
厚	の透	cmcm	還化	化性	水潤肥	定塩の石	塩基	増地
深	乾粘		有鐵	化性	肥定塩の石	苦加鹽塗基	害物	ベリ
等	土の		機化	化性	塩基	土里鹽素	物理	の危
級	含難		乾	沃	灰	素	的	險
さ	着水		沃	状态	含	度	障	度
さ	土最		状态	豐含	度	無性	要	度
量	元素		度	含	度	性	害	性
易	性硬		度	度	度	性	障	性
さ	性高		度	度	度	度	度	性
さ	性一		度	度	度	否	性	性
)	密)						
t d g p	l	r	w	f	n	i	a	
Ⅱ I I Ⅲ 3 3 3 I 1 2 Ⅲ 3 2 3 - - -	1	2	3	1	2	1	1	1
簡略分級式	Ⅲ	p r	Ⅱ t f n					

A 土壤区の特徴

此の土壤区は仲線統に属する。表土の厚さは15cm前後でやや浅く、有効土層は1cm以上で深い。表土の土性はLIC～HCが主で粘着性が非常に強く、耕起、碎土は困難である。保肥力大、固定力小さく、塩基状態がやや高く、自然肥沃度は中庸、養分は石灰、苦土、カリ、窒素が多く、磷酸少、酸度は強である。地形はやや緩波状地が多い。

B 植牛及び利用状況

水稻が主で一部畑作物が栽培されている。

C 地力保全上の問題点

有機物の施用と平行して深耕が必要であろう。又暗渠排水のほか、一時的停滯水を除去し得る排水施設を要する。

D 分 布 北海道士別市溫根別

記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

犬牛別統

(1) 土壌統の概要

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20～25cmで腐植含量10～15%、土性HC、色は2.5Yで、彩度2、明度3～4である。礫を含まず粒質構造で細孔を含む。膜状斑鐵を含み、ち密度は1.2～1.5で中である。

pH(H₂O) 5.5前後、下層との層界は平坦で明瞭である。

第2層は厚さ40～60cmで腐植含量2～3%、土性HC、色は2.5Yで、彩度2、明度6～7である。礫を含まず塊状構造で細孔を含む。雲状斑鐵を含み、ち密度1.8～2.0で中、pH(H₂O) 4.5～5.0で、下層との層界は平坦でやや明瞭である。

第3層は50cm以上で腐植含量1～2%前後で、土性HC、色は5G、彩度1、明度6～7である。礫を含まず連結状構造で、ち密度1.2～1.5で中である。pH(H₂O) 4.5～5.0である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市温根別8線 試坑24 西尾哲弥

第1層	0～25cm	腐植に頗る富む黒褐(2.5Y3/2)のHC、粒質構造、細孔含む、膜状斑鐵を含み、ち密度1.4で中、pH(H ₂ O) 5.8、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第2層	25～75cm	腐植を含む灰黄(2.5Y6/2)のHC、塊状構造、細孔含む、雲状斑鐵を含み、ち密度1.8で中、pH(H ₂ O) 4.9。調査時の湿り湿、境界平坦でやや明瞭。
第3層	75cm以下	腐植を含む暗緑灰(5G7/2)のHC、連結状構造、ち密度1.2で中、pH(H ₂ O) 4.9、調査時の湿り潤

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重量 %	粒径組成%				土性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土				
1	0～25	7.99	/	1.81	5.84	37.47	54.86	HC	/	/	9.62
2	25～75	6.29	/	0.04	1.87	33.51	64.78	HC	/	/	2.01
3	75～	5.16	/	0.17	5.32	33.20	61.30	HC	/	/	1.23

層位	全窒素 %	炭素率	腐植 %	p H		置換酸 度 Y ₁	塩基置換 量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩基 飽和度 %
				H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O	
1	0.61	15.77	16.58	5.8	4.6	6.88	32.0	3.23	1.9	0.7	100.9
2	0.10	20.10	3.46	4.9	3.8	58.75	35.0	10.9	1.5	0.5	31.1
3	0.03	41.00	2.12	4.9	3.6	63.75	24.6	7.9	1.8	0.5	32.1

層位	磷酸吸 収係数	有効態 mg/100g		乾土 効果	30℃:NH ₄ -N 発生量 mg/100g		遊離磷酸化 鉄 %
		P ₂ O ₅	N		乾土	湿土	
1	1.830	1.49	16.95	5.24	16.95	11.71	1.60
2	1.600	tr	7.84	2.11	7.84	5.77	1.71
3	1.380	tr	8.08	2.35	8.08	5.73	—

A - 2 他の土壤との関係

本統に隣接する統としては南線統と仲線統がある。

仲線統とは堆積様式を異にし、南線統は下層に礫層が出現し、腐植層序を異にするので本統と区別する。

A - 3 母材 非固結水成岩

A - 4 堆積様式 水積(河成)

B 地形 平坦(沢)

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項 排水の完備

F 分布 北海道士別市温根別

調査及び記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
犬牛別統-犬牛別区	III p II f n a

(2) 土壤区別説明

犬牛別統 - 犬牛別区

示性分級式(水田)

土表有表耕の減の土の自の養の障の災の	境
壤効土表作易遊透保濕保固土置有微酸有物增地	害理冠す
生土耘土土化分離ラ地然屬分換"効"の性態量物的	害質の水の
産土の下下解酸ラ地然屬分換"効"の性態量物的	害質の水の
力の層の風透5050還化イの水水潤肥肥定塩の石苦加塩珪害質の危	害の危
可疊の枯乾cmcm還有鐵基灰土里浸素要の	害の危
能厚含難土着土の機化乾沃狀豐含素度有害危險	害の危
性深含難土着土の機化乾沃狀豐含素度有害危險	害の危
等級ささ量易こぎ性こち性量こも湿こも度こも否こも性こも性こも	無性度度
t d g p l r w f n i a	
和 1 1 1 1 3 3 3 1 1 2 1 2 1 2 - - - 1 3 1 1 1 3 2 2 1 1 1 2 1	
簡略分級式 1 p 1 f n a	

A 土壤区の特徴

この土壤区は犬牛別統に属する。表土の厚さは 20 cm 前後で、有効土壌は 1 m 以上で深い。表土の土性は L i C ~ H C が主で粘着性が強く耕起、碎土に困難である。保肥力大、固定力中、塩基状態高く、肥沃度は中庸である。養分は石灰、苦土、加里が多いが、磷酸少なく、窒素は中である。地形は平坦地と沢よりなつてゐる。

B 植生及び利用状況

水稻が主体であるが一部畑作物が栽培されている。

C 地力保全上の問題点

深耕と暗渠、明渠排水の完備

D 分布

北海道士別市温根別

記載責任者 野崎輝義 (北海道立上川農業試験場)

日付 昭和 45 年 3 月 31 日

西士別統

(1) 土壌統の概要

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20cm前後で、腐植含量5～6%、土性はHCを主とする。色は10YR、彩度4～5、明度4～5、礫を含まず粒質構造で細孔を含み、膜状斑駁にやや富み、ち密度13、PH(H₂O)5.0～5.5前後で、下層との境界は平坦で明瞭。

第2層は厚さ40～50cmで、腐植含量4%前後、土性HCで、色は5Y、彩度2、明度4～5、礫を含まず細塊状構造で細孔を含み、斑駁なし、ち密度17～20で中である。PH(H₂O)5.5前後で、下層との境界は漸変である。

第3層は50cm以上で腐植含量2%程度で、土性HC～LICからなり、色は5Y、彩度5～6、明度4～5からなる。礫を含まず、細塊状構造で細孔を含み、斑駁なし、ち密度20～23で中である。PH(H₂O)5.5～6.0である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市西士別 試坑31 沼上正雄

第1層	0～20cm	腐植に富む褐(10YR 4/4)のHC、粒質構造、細孔を含む、膜状斑駁にやや富む、ち密度13で中、PH(H ₂ O)5.2、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第2層	20～60cm	腐植を含む灰オリーブ(5Y 4/2)のHC、細塊状構造、細孔を含む、斑駁なし、ち密度17で中、PH(H ₂ O)5.5、調査時の湿り湿、境界は漸変。
第3層	60cm以下	腐植を含むオリーブ(5Y 5/6)のLIC、細塊状構造で細孔を含み、斑駁なし、ち密度23で中、PH(H ₂ O)5.8、調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重 量 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土				
1	0~20	5.17		1.35	11.91	39.73	47.01	HC			3.15
2	20~60	4.76		3.32	13.41	35.11	48.16	HC			2.36
3	60~	5.00		11.55	18.58	31.74	38.12	LiC			1.25

層位	全窒素 %	炭素率	腐植 %	pH		置換度 Y ₁	塩基置換容 量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩基 飽和度 %
				H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O	
1	0.21	15.00	5.43	5.2	4.1	2.000	18.6	10.7	1.5	0.4	57.5
2	0.19	12.42	4.07	5.5	4.2	21.86	23.8	9.8	1.6	0.2	41.2
3	0.06	20.83	2.15	5.8	4.2	22.59	25.5	9.8	3.9	0.3	38.7

層位	磷酸吸 収係数	有効態mg/100g		乾土 効果	30℃:NH ₄ -N 発生量mg/100g		基離酸 化鉄%
		P ₂ O ₅	N		乾土	湿土	
1	1,350	0.82	17.56	8.69	17.56	8.87	0.78
2	1,450	tr	15.70	8.40	15.70	7.30	1.59
3	1,640	tr	7.92	0.66	7.92	7.26	—

A - 2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としてはない。

A - 3 母材 非固結水成岩

A - 4 堆積様式 水積(河成)

B 地形 平坦(沢)

C 気候 年平均気温 5.6℃ 年降水量 1,135mm

D 植生及び利用状況 水田(1毛作庄)

E 農業上の留意事項

排水の完備、有機物施用

F 分布 北海道士別市西士別

調査及び記載責任者 野崎輝(北海道立上川農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
西士別統—西士別区	Ⅲ p Ⅱ r f n

(2) 土壤区別説明

西士別統 — 西士別区

示性分級式(水田)

土表有表耕へへへ澁へへへ土へへへ自へへへ養へへへへへへへ障へへ災へへ 壤効土表作易遊グ透保濕保固土置有微酸有物增地 生土耘土土水土化分離ラ地然層分換〃効〃〃害理冠す 産土の下下解酸性態量物的水べ 力の風透5050性化イの水水潤肥肥定塩の石苦加磷窒珪 可能の腐殖粘乾cmcm有機鐵基灰土里酸素要害質障のり 能厚含難土着水土最元物含乾沃狀豐含〃〃〃害危險論 等深性性硬性高含度性性度力力態量素度無性度度 級ささ量易ささ性ち性量ささ湿度度否否性性 密)	t d g p ℓ 度 r w f n i a (種) I I I Ⅲ 3 3 3 1 1 2 Ⅱ 2 3 1 — — — Ⅱ 2 2 1 Ⅱ 1 1 1 3 2 — — 3 1 1 1 1 2 1
簡略分級式	Ⅲ p Ⅱ r f n

A 土壤区の特徴

この土壤区は西士別統に属する。表土の厚さ 20 cm 前後で中庸である。有効土層は 1 m 以上で深く、表土の土性は H C ~ L i C からなり、粘着性が強く、耕起、碎土に困難である。保飢力中、固定力小、塩基状態高く、肥沃度は中庸である。養肥分は石灰、苦土、加里は多く、嫌少なく窒素は中である。下層も窒素、嫌酸に欠乏している。地形は沢の平坦地からなる。

B 植生及び利用状況

水稻が主体で一部に畑作物の栽培がある。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は比較的表土、有効土層が厚く、特に物理的障害は少ないが排水の悪い所では明、暗渠排水の完備と有機質の施用が望まれる。

D 分布

北海道士別市西士別

記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

南士別統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20cm前後で腐植含量5~6%、土性はHC、色は5Yで、彩度2、明度4~5である。礫を含まず、粒質構造で細孔に富み、膜状斑鉄を含む、ち密度1~1.3で中である。PH(H₂O) 5.5前後で、下層との境界は平坦で明瞭。

第2層は厚さ5.0~6.0cmからなり腐植含量6~8%で、土性はHC、色は2.5Y、彩度2、明度4~5である。礫を含まず、塊状構造で細孔を含む、雲状斑鉄を含むから富み、ち密度2.0前後で中である。PH(H₂O) 4.5~5.0で、下層との境界は平坦でやや明瞭である。

第3層は4.0~5.0cm以上で腐植含量5%前後、土性はHC、色は1.0YRで彩度2、明度3である。礫を含まず、連結状構造で斑鉄なし、ち密度1.1~1.3で中である。PH(H₂O) 4.5~5.0前後。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市南士別 試坑3-6 幕田借一

第1層	0~20cm	腐植に富む灰オリーブ(5Y4/2)のHC、粒質構造、細孔富む、膜状斑鉄含む、ち密度1.3で中、PH(H ₂ O) 5.7、調査時の湿り混、境界平坦明瞭。
第2層	20~80cm	腐植に富む暗灰黄(2.5Y4/2)のHC、塊状構造、細孔含む、雲状斑鉄に富み、ち密度2.0で中、PH(H ₂ O) 4.7。調査時の湿り混、境界平坦でやや明瞭である。
第3層	80cm以下	腐植に富む黒褐(1.0YR3/2)のHC、連結状構造で斑鉄なし、ち密度1.2で中、PH(H ₂ O) 4.9、調査時の湿り混。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重 量 %	粒径組成 %				土性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土				
1	0~20	4.76	/	16.04	16.00	21.70	46.26	HC	/	/	3.32
2	20~80	6.26	/	0.34	0.86	19.54	79.26	HC	/	/	4.93
3	80~	5.33	/	0.07	0.44	24.93	74.56	HC	/	/	3.08

層位	全窒素%	炭素率	腐植	pH		置換酸度Y ₁	塩基置換量me/100g	置換性塩基 me/100 g			塩基飽和度%
				H ₂ O	KCL			CaO	MgO	K ₂ O	
1	0.38	8.74	5.72	5.7	4.6	9.38	29.0	27.4	1.9	0.7	94.4
2	0.30	16.43	8.49	4.7	3.7	56.88	34.2	12.6	1.2	0.4	36.8
3	0.12	25.67	5.31	4.9	3.6	58.13	29.0	7.0	4.4	0.4	24.1

層位	磷酸吸収係数	有効態mg/100g		乾土 効果	30°C NH ₄ -N 発生量mg/100g		遊離酸化鉄 %
		P ₂ O ₅	N		乾土	湿土	
1	1.500	1.13	12.17	1.54	12.17	10.63	0.80
2	1.700	tr	6.08	1.53	6.08	4.55	1.53
3	1.300	tr	3.28	1.48	3.28	1.80	—

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては南町統がある。

南町統とは堆積様式並びに腐植層序を異にするので区別される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積(河成)

B 地形 平坦

C 気候 年平均気温 5.6 °C 年降水量 1,185 mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項

排水完備、深耕

F 分布 北海道士別市南士別

調査及び記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
南士別統 - 南士別区	■ p ■ r n

(2) 土壤区別説明

南士別統 - 南士別区

示性分級式(水田)

土表有表耕へへ満へへ鍛へへ土へへ自へへ養へへへへへへ障へへ災へへ	土壤効土表表作作易遊グ透保濕保固土置有微酸有物增地
生土土の土の下下化分離ラ地然層分換〃効〃害里冠す	土の土の下下化分離ラ地然層分換〃効〃害里冠す
力の層の粘乾透5050還性化イの水水潤肥肥定塩の石苦加磷塗基灰土里酸素酸要害質的害のり	力の層の粘乾透5050還性化イの水水潤肥肥定塩の石苦加磷塗基灰土里酸素酸要害質的害のり
可能の稟の風cmcm還有鐵基灰土里酸素酸要害質的害の章危の	可能の稟の風cmcm還有鐵基灰土里酸素酸要害質的害の章危の
能厚深含難土着土の水土最元物機化乾沃状豐含〃〃〃〃有害危險	能厚深含難土着土の水土最元物機化乾沃状豐含〃〃〃〃有害危險
等級ささ量易ささ性性硬性高含量度性性度力力態量素度無汎度度	等級ささ量易ささ性性硬性高含量度性性度力力態量素度無汎度度
(稻) t d g p 1 度 r w f n i a	(稻) t d g p 1 度 r w f n i a
1 1 1 3 3 3 1 1 2 2 3 1 - - - 1 1 2 1 1 1 1 3 2 - - 2 1 1 1 2 1	1 1 1 3 3 3 1 1 2 2 3 1 - - - 1 1 2 1 1 1 1 3 2 - - 2 1 1 1 2 1
簡略分級式 III p II r n	簡略分級式 III p II r n

A 土壤区の特徴

この土壤区は南士別統に属する。表土の厚さは20cmと中庸で有効土層も1m以上で深い。表土の土性はH Cで粘着性が強く耕起、碎土に困難である。保肥力が大で固定力小、塩基状態高く自然肥沃度が高い。

養肥分については石灰、苦土、加里が多く磷酸少なく、窒素中である。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

水稻が主体である。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は一般に排水が悪く地下水位を下げる事が大切である。尚深耕も必要であろう。

D 分布

北海道士別市南士別

記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

南町統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cm内外で腐植含量5~6%、土性はL i C、色は2.5 Y、彩度2、明度4~5である。礫を含まず、粒質構造で細孔に富み、膜状斑鉄を含む。ち密度は7~10で疎である。

P H (H₂ O) 5.0 ~ 5.5 前後で下層との境界は平坦明瞭。

第2層は厚さ20cm前後で腐植含量4.0~5.0%、土性はL i C、色は10 Y R、彩度2、明度3である。礫を含まず、細塊状構造で細孔を含み、斑鉄なし、ち密度15~18で中、P H (H₂ O) 5.5 ~ 6.0 で下層との境界は平坦のやや明瞭である。

第3層は厚さ20~30cmで腐植含量に欠き、土性はL i C、色は10 Y R、彩度4~5、明度4~5である。ところにより小円礫が出現するが概して少ない。細塊状構造で斑鉄なし、ち密度20~23前後で中、P H (H₂ O) 5.0 ~ 5.5 で下層との境界は漸変である。

第4層は厚さ50cm以上で腐植に欠き、土性はL i Cが主である。色は10 Y Rで、彩度5~6、明度4~5、塊状構造で雲状斑鉄を含む。ち密度20~22で中である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市南町 試坑39 重木 勇

第1層	0 ~ 15 cm	腐植に富む暗灰黃(2.5 Y 4 / 2)でL i C、粒質構造、細孔に富む。膜状斑鉄を含み、ち密度は7で疎、P H (H ₂ O) 5.4、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第2層	15 ~ 35 cm	腐植を含む灰黃褐(10 Y R 4 / 2)でL i C、細塊状構造、細孔を含む、斑鉄なし、ち密度17で中、P H (H ₂ O) 5.9、調査時の湿り湿、境界平坦やや明瞭。
第3層	35 ~ 60 cm	腐植に欠く褐(10 Y R 4 / 4)でL i C、細塊状構造、斑鉄なし、ち密度23で中、P H (H ₂ O) 5.5、調査時の湿り湿、境界は漸変である。
第4層	60 cm以下	腐植に欠く黄褐(10 Y R 5 / 6)でL i C、塊状構造で雲状斑鉄を含む、ち密度22で中、調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重 量 %	粒 径 組 成 %				土 性	現地容 積 重 g	真比重	全炭素 %
				粗 砂	細 砂	シルト	粘 土				
1	0~15	3.25		11.98	18.59	36.45	32.98	L i C			3.39
2	15~35	3.22		5.31	22.22	36.00	36.47	L i C			2.81
3	35~60	3.52		15.33	25.70	31.31	27.66	L i C			1.15

層位	全窒素 %	炭素率	腐 植 %	p H		置換酸 度 Y ₁	塩基置換 容 量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩 基 飽和度 %
				H ₂ O	K C L			C a O	M g O	K ₂ O	
1	0.22	15.41	5.84	5.4	4.3	13.75	19.3	10.3	0.8	0.3	53.3
2	0.14	20.07	4.84	5.9	4.8	7.50	20.8	16.8	1.4	0.5	80.8
3	0.02	57.50	1.98	5.5	4.2	24.38	17.9	7.6	1.6	0.2	42.4

層位	磷吸収 効率 P ₂ O ₅	有効態mg/100g N	乾 土 効 果	30°C:NH ₄ -N 発生量mg/100g		遊離酸化 鉄 %
				乾 土	湿 土	
1	800	1.95	18.59	8.60	18.59	0.90
2	1,120	tr	13.86	9.98	13.86	3.88
3	800	tr	4.75	1.52	4.75	3.23

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては南士別統と多寄統があるが共に堆積様式が異なるので区別される。

A-3 母 材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B 地 形 やや緩波状台地

C 気 候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 樹生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項

深耕、心土耕、有機質施用

F 分 布 北海道士別市南町

調査及び記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年 月 日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
南町統一南町区	III p II t r f n

(2) 土壤区別説明

南町統一南町区

示性分級式(水田)

表土有表耕へへへ湛へへ酸へへ土へへへ自へへ養へへへへへ障へへ災へへ 土壤効土表土作土易遊格透保濕保固土置有微礫有物增地 生土産土の下化水土化分離ラ地然層分換"効""害理冠す 力の層の風透5050還性化イの水水潤肥肥定塩の石苦加磷珪 可能の礫粘乾cmcm還有化基灰土里酸素酸害質障害のり 能厚含難土着土の機鐵基灰土里酸素酸害要の危 性深含難土着土の水土最元物含乾沃状豊含"有害危險 等級ささ量易ささ性性高含量度性性度力力態量素度無性度度 級ささ量易ささ性性高含量度性性度力力態量素度無性度度)密()t d g p l 度 r w f n i a 稻
II III III 3 3 3 I 1 2 II 2 2 1 —— II 2 2 1 II 1 2 2 3 2 —— II 2 I 1 1 1 1 1

A 土壤区の特徴

この土壤区は南町統に属する。表土の厚さ 15 cm 内外でやや浅いが有効土層は 1 m 以上で深い。表土の土性は L i C で粘着性が強いので耕起、碎土にやや困難である。自然肥沃度は中庸であり、養肥分は石灰多く、苦土、加里、窒素が中であり、磷酸には表土、下層土ともに欠乏している。地形はやや緩波状台地からなる。

B 植生及び利用状況

水稻が主体だが一部に畑作物の栽培がある。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は一般に表土が浅いため根の伸長を妨げていて深耕、心土耕と平行して有機物の施用が望まれる。

D 分布

北海道士別市南町

記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

日付 昭和 45 年 3 月 31 日

北町統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20cm前後で腐植含量6～8%、土性L i C、色は7.5Y、彩度2、明度2～3である。礫を含まず、粒質構造で細孔に富み、膜状斑鉄を含み、ち密度11～13で中である。PH(H₂O)5.5～5.8、下層との境界は平坦で明瞭である。

第2層は厚さ30～40cmで腐植含量5～6%、土性はH C、色は5.0Y、彩度2、明度2～3、礫を含まず、細塊状構造で細孔を含む。糸根状斑鉄を含み、ち密度18～20で中、PH(H₂O)5.5前後、下層との境界は平坦明瞭である。

第3層は厚さ20～30cmで腐植含量2～3%、土性はH C、色は5Y、彩度2、明度4～5である。礫を含まず、細塊状構造で細孔を含む、糸根状斑鉄を含み、ち密度18～20で中、PH(H₂O)5.0～5.5、下層との境界は漸変である。

第4層は厚さ40cm以上で腐植を欠くH C、色は5Y、彩度2、明度4～5である。礫を含まず、塊状構造で細孔を含み、雲状斑鉄を含む。ち密度20～22で中である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市北町 試坑48 加納正博

第1層	0～18cm	腐植に富むオリーブ黒(7.5Y3/2)のL i C、粒質構造、細孔に富む、膜状斑鉄を含み、ち密度13で中である。PH(H ₂ O)5.7、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭、
第2層	18～50cm	腐植に富むオリーブ黒(5Y3/2)のH C、細塊状構造、細孔を含む、糸根状斑鉄を含み、ち密度18で中、PH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第3層	50～73cm	腐植を含む灰オリーブ(5Y4/2)のH C、細塊状構造、細孔を含む、糸根状斑鉄を含み、ち密度18で中、PH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り湿、境界は漸変である。
第4層	73cm以下	腐植を欠く灰オリーブ(5Y5/2)のH C、塊状構造、細孔を含む、雲状斑鉄を含み、ち密度22で中である。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重 %	粒 径 組 成 %				土 性	現地容 積 重 g	真比重	全炭素 %
				粗 砂	細 砂	シルト	粘 土				
1	0~18	4.17		10.81	23.61	31.08	34.51	L i C			4.47
2	18~50	5.17		0.56	5.66	36.46	57.32	H C			3.40
3	50~73	5.08		8.18	6.62	32.99	52.21	H C			1.61

層位	全窒素 %	炭素率	腐 植 %	p H		置換度 Y ₁	塩基交換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩基 飽和度 %
				H ₂ O	K _{Cl}			CaO	MgO	K ₂ O	
1	0.28	15.96	7.70	5.7	4.5	9.38	20.1	17.2	2.2	0.3	85.6
2	0.24	14.17	5.86	5.6	4.3	20.00	29.8	13.2	1.6	0.8	44.3
3	0.11	14.64	2.77	5.4	4.2	25.63	24.6	1.7	0.2	0.6	6.9

層位	磷酸吸 収係数	有効態 mg/100g		乾 土 効 果	30℃:NH ₄ -N 発生量 mg/100g		遊離酸 化 鉄 %
		P ₂ O ₅	N		乾 土	湿 土	
1	9.40	6.18	13.86	5.40	13.86	8.46	0.43
2	1,850	1.13	5.49	0.26	5.49	5.23	0.18
3	1,500	tr	3.87	0.06	3.87	3.81	—

A-2 他の土壤との関係

本統に隣接する統としては多寄続があるが堆積様式を異にするので区別する。

A-3 母 材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積(河成)

B 地 形 平 坦

C 気 候 年平均気温 5.6℃ 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項

深耕、有機質施用

F 分 布 北海道士別市北町

調査及び記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年 月 日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
北町統一北町区	Ⅲ p Ⅱ r n

(2) 土壤区別説明

北町統一北町区

示性分級式(水田)

土表有表耕へへへ甚へへ酸へへ土へへへ自へへへ養へへへへへへ障へへ災へへ 表表表作作易遊グ透保濕保固土置有微酸有物增地 効土耘土土土化分離ラ地然屬分換へ々効々々書理冠す 生土士のの下下解鞍ラ地性態鹽石苦加磷窒珪鹽物的水べり 土のの風透5050還性化イの水水潤肥肥定塩の害質障書の危 力の層のの粘乾cmcm有鐵基灰土里磷素酸要の害危 可能礫の機化乾沃狀鹽含へへへへ有害危險 厚土着土の水土最元物含乾沃狀鹽含へへへへ有害危險 性深含難等性硬高性高含量度性性度力力態量素度無性度 級ささ量易ささ性ち性量湿度度否否否否性性 (稻) t d g p ℓ 度 r w f n i a 1 1 1 Ⅲ 3 3 2 1 1 2 Ⅱ 2 3 1 - - - [1 2 1] 1 1 2 2 2 - - 2 1 1 1 1 1 1
簡略分級式 Ⅲ p Ⅱ r n

A 土壤区の特徴

この土壤区は北町統に属する。表土の厚さ20cmで中庸、有効土層も1m以上で深い。表土の土性はL i Cで耕起、碎土はやや困難である。

保肥力大、固定力小、塩基状態高く、自然肥沃度は良い。養肥分は石灰、苦土は多く、加里、磷酸、窒素中である。地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

水稻が主体で一部畑作物が栽培されている。

C 地力保全上の問題点

比較的作土が浅いので深耕と平行して有機物の施用が望まれる。又部分的に排水の悪いところでは明、暗渠排水の完備が必要である。

D 分布

北海道士別市北町

記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

上士別南統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20cm前後で、腐植含量4～5%、土性はLiC、色は2.5Y、彩度3～4、明度3～4で、礫を含まず、粒質構造で細孔に富み、膜状斑鐵を含む、ち密度1.0以内で疎である。PH(H₂O)5.5前後、下層との境界は平坦明瞭である。

第2層は厚さ20cm前後で、腐植含量4～5%、土性LiC、色は2.5Y、彩度2明度4～5、礫を含まず、細塊状構造で細孔を含み、斑鐵なし、ち密度1.5～1.7で中である。PH(H₂O)5.0～5.5、下層との境界は漸変である。

第3層は50cm以上で、腐植含量2%程度、土性CL、色は2.5Y、彩度4～5、明度5～6、礫を含まず、連結状構造で細孔を含み、斑鐵なし、ち密度1.7～2.0で中である。PH(H₂O)5.0～5.5である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市上士別12区 試坑65 斎藤定雄

第1層	0～20cm	腐植を含むオリーブ褐(2.5Y 4/4)のLiC、粒質構造、細孔に富む。膜状斑鐵を含む、ち密度は1.0で疎、PH(H ₂ O)5.5、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第2層	20～40cm	腐植を含む暗灰黃(2.5Y 4/2)のLiC、細塊状構造、細孔を含み、斑鐵なし、ち密度1.5で中、PH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り湿、境界漸変。
第3層	40cm以下	腐植を欠くにぶい黃(2.5Y 6/4)のCL、連結状構造、細孔を含み、斑鐵なし、ち密度1.7で中、PH(H ₂ O)5.3、調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重 量 %	粒径組成 %				土性	現地容積 g	真比重	全炭素 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土				
1	0～20	5.76	/	3.61	25.32	26.41	44.66	LiC	/	/	2.63
2	20～40	5.91	/	2.37	12.45	41.28	43.90	LiC	/	/	2.87
3	40～	5.27	/	20.39	25.84	30.53	23.25	CL	/	/	1.15

層位	全窒素%	炭素率	腐植%	pH		置換酸度Y ₁	塩基置換容量me/100g	置換性塩基me/100g			塩基飽和度%
				H ₂ O	KC			CaO	MgO	K ₂ O	
1	0.19	13.84	4.53	5.5	4.4	15.00	26.0	14.4	1.8	0.3	55.3
2	0.17	16.88	4.95	5.4	4.3	18.13	31.3	8.1	0.9	0.2	25.9
3	0.04	29.00	2.00	5.3	4.3	18.75	22.3	2.7	0.3	0.2	12.1

層位	phosphate absorption coefficient	Effective mg/100g		Soil effect	30°C: NH ₄ -N production mg/100g		Free acidified iron%
		P ₂ O ₅	N		乾土	湿土	
1	1.830	3.82	16.83	11.96	16.83	4.87	0.60
2	1.860	tr	4.11	0.20	4.11	3.91	1.27
3	1.580	tr	4.55	2.01	4.55	2.54	—

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては川南中央統があるが堆積様式を異にするので区別される。

A-3 母材 非固結火成岩

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B 地形 平坦だがやや波状

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項

排水完備

F 分布 北海道士別市上士別

調査及び記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
上士別南統一上士別南区	Ⅲ p II r f n

② 土壤区別説明

上士別南統 一 上士別南区

示性分級式(水田)

土表有表耕	湛	酸	土	自	養	障	災																																
壤	表	作	遊	透	保	固	微																																
効	表	易	グ	保	固	土	酸																																
土	土	土	化	離	置	有	有																																
生	耘	土	下	ラ	層	微	增																																
土	土	水	下	地	分	酸	地																																
産	土	土	化	解	換	有	冠																																
士	の	の	の	接	效	物	す																																
の	の	の	の	の	性	害																																	
力	風	50	還	性	態	理																																	
可	透	cm	化	イ	量	物																																	
能	乾	cm	有	水	鹽	害																																	
の	の	の	化	潤	石苦加磷塗珪	質的																																	
性	礫	土	機	肥	基	灰土里浸素酸	り																																
厚	粘	土	鐵	定	豐	要	害の																																
等	深	の	化	沃	含	有	の障																																
級	含	難	乾	狀	含	害	危																																
さ	量	着	沃	豐	含	険	険																																
さ	易	水	最	度	度	素	度																																
量	さ	土	元	度	度	無	度																																
性	性	性	物	性	力	性	度																																
等	硬	高	含	度	態	量	度																																
級	級	性	度	度	量	素	度																																
さ	さ	さ	性	湿	否	性	性																																
さ	量	性	性	度	否	性	性																																
密)))))))																																
t d g p	ℓ	r	w	f	n	i	a																																
稻	I	I	III	3	3	2	I	1	2	II	2	3	1	- - -	II	2	3	1	II	1	1	1	2	2	- -	2	I	1	1	I	1	1							
簡略分級式								III	p	II	r	f	n																										

A 土壌区の特徴

この土壌区は上士別南統に属する。表土の厚さは20cmで中庸で有効土層も1m以上で深く、表土の土性はL i Cで粘着性が強く耕起、碎土に困難である。

保肥力中、固定力小で自然肥沃度は中庸である。養肥分については石灰、苦土、加里は多いが、磷酸塩素がやや少ない。又酸度も比較的強い。地形は概ね平坦である。

B 植生及び利用状況

水稻が主体である。

C 地力保全上の問題点

この土壌区は比較的表土、有効土層ともに深く、特に物理的、障害は少ないが深耕と併せて有機物の補給により積極的に地力の培養が望ましい。

尚部分的に排水不良なところがあるがこれの排水に努められたい。

D 分布

北海道士別市上士別

記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

川南中央統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15～17cmで腐植含量8～10%、土性はSCL、色は2.5Y、彩度2、明度4～5である。礫を含まず、粒質構造で細孔に富み、膜状、糸根状斑鉄を含む。ち密度11～12で中である。PH(H₂O)5.0～5.5、下層との境界は平坦で明瞭である。

第2層は厚さ5～6cmで腐植含量5～8%、土性はSCL、色は2.5Y、彩度2、明度4～5である。礫を含まず、連結状構造で細孔を含み、糸根状斑鉄を含む。ち密度15～20で中である。PH(H₂O)5.5～5.8、下層との境界は平坦明瞭である。

第3層は厚さ3.0cm前後で腐植含量2～3%、土性SL、色は2.5Y、彩度4～5、明度5～6である。礫含まず、単粒構造で細孔に富み、雲状、糸根状斑鉄を含む。ち密度15前後で、PH(H₂O)5.5～5.8、下層との境界は平坦明瞭である。

第4層は厚さ15～20cmで腐植2%以内、土性CL、色は5.0Y、彩度2、明度6、細塊状構造で細孔に富み、雲状斑鉄を含み、ち密度20前後で中、境界平坦明瞭。

第5層は4.0cm以上で腐植1～2%のSL～S(農学会法触感)単粒構造で細孔を含み、ち密度11.6～18で、色は2.5Y、彩度2、明度5～6である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市上士別13区 試坑60 安田 正芳

第1層	0～15cm	腐植に富む暗灰黄(2.5Y4/2)のSCL、粒質構造、細孔に富む。膜、糸根状斑鉄を含み、ち密度は12で中、PH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第2層	15～20cm	腐植に富む暗灰黄(2.5Y4/2)のSCL、連結状構造、細孔を含む、糸根状斑鉄を含み、ち密度19で中、PH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第3層	20～50cm	腐植を含む黄褐(2.5Y5/4)のSL、単粒構造、細孔に富む。雲、糸根状斑鉄を含む。ち密度15で中、PH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第4層	50～65cm	腐植を欠く灰オリーブ(5Y6/2)のCL、細塊状構造、細孔に富み、

		雲状斑鐵を含む。ち密度 2.0 で中、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第 5 層	6.5 cm 以下	腐植を欠く灰黄(2.5 Y 6/2)の S L (農学会法触感)、単粒構造、細孔を含む、ち密度 1.6 で中、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重 量 %	粒径組成 %				土 性	現地容 積重 g	真比重	全炭素 %
				粗 砂	細 砂	シルト	粘 土				
1	0~15	3.31		42.01	16.34	18.83	22.82	SCL			5.71
2	15~20	3.35		35.18	28.33	15.99	20.50	SCL			3.95
3	20~50	2.55		56.19	26.86	9.43	7.52	SL			1.45

層位	全窒素 %	炭素率	腐 植 %	p H		置換酸 度 Y ₁	塩基置換 量 me/100g	置換性塩基 me/100 g			塩 基 飽和度 %
				H ₂ O	K C L			C a O	M g O	K ₂ O	
1	0.38	15.03	9.84	5.4	4.2	12.50	15.6	5.9	0.4	0.5	37.8
2	0.23	17.17	6.81	5.4	4.3	11.88	20.1	6.1	0.4	0.4	30.3
3	0.03	48.33	2.50	5.6	4.4	8.75	9.7	5.0	0.3	0.4	51.5

層位	phosphate absorption coefficient	有效態 mg/100g		乾 土 効 果	30°C:NH ₄ -N 発生量 mg/100g		遊離酸 化 鉄 %
		P ₂ O ₅	N		乾 土	湿 土	
1	1,140	7.49	12.76	1.24	14.76	13.52	0.77
2	650	7.31	11.85	7.07	11.85	4.78	0.85
3	1,050	1.05	5.31	1.24	5.31	4.07	—

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては大和統と上士別南統があるが堆積様式と腐植層序が夫々本統と異にするので区別される。

A-3 母 材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積(河成)

B 地 形 平坦(沢)

C 気 候 年平均気温 5.6 °C 年降水量 1,185 mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項 深耕、有機物施用
F 分 布 北海道士別市上士別

調査及び記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年 月 日 昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
川南中央統一川南中央区	II t p l r f n

② 土壌区別説明

川南中央統 - 川南中央区

示 性 分 級 式(水田)

土表有表耕へへへ湛へへ酸へへ土へへへ自へへ養へへへへへへ障へへ炎へへ 壤 効土表表作易遊ゲ透保濕保固土置有微酸有物增地 生土生土水土化分離地無鹽分換"効"害理冠す 莖土土の下下解酸ラの性態量物水べ 力の腐土の粘透5050還化イの水水潤肥肥定塩の石苦加過室珪害的害の 可碟乾cmcm有鐵基灰要の障危 能の土着土の機械化沃狀豐含"'"有害危險 性厚深含難水土最元物含化乾沃狀豐含"'"有害危險 等性性硬性高含量要性性度力力態量素度無性度 級ささ量易ささ性ち性量湿度否性性 t d g p ℥ w f n i a 簡略分級式 II t p l r f n

A 土壌区の特徴

この土壌区は川南中央統に属する。表土の厚さは15cm内外でやや浅く、有効土層は1m以上で深い。表土の土性はS C Lで粘着性はやや弱く、耕耘、碎土は比較的容易であり、保肥力中、固定力小、塩基状態中で自然肥沃度は中庸である。養肥分は加里が多く、石灰、磷酸、窒素が中、苦土は欠乏をしている。地形は沢の平坦地が多い。

B 横生及び利用状況 水稻が主体である。

C 地力保全上の問題点

この土壌区は比較的表土が浅いので深耕と併せて有機質の施用により地力の培養が望ましい。

D 分 布

上海道士別市上士別

記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

大和統

(1) 土壌統の概要

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20前後で腐植含量6~8%、土性はL i C~H Cで、色は10 Y R、彩度2、明度3~4である。礫を含まず、粒質構造で細孔に富み、膜状、糸根状斑鉄を含み、ち密度10程度で疎である。PH(H₂O)5.5前後、下層との境界は平坦で明瞭である。

第2層は厚さ20前後で腐植含量5~6%、土性L i C~H Cで、色は10 Y R、彩度4~5、明度3~4である。礫を含まず、細塊状構造で細孔に富み、糸根状斑鉄を含む、ち密度15前後で中である。PH(H₂O)5.5前後、下層との境界は漸変である。

第3層は厚さ20~30cmで腐植含量2%、土性L i Cで、色は10 Y R、彩度4~5、明度5~6、礫を含まず、塊状構造で細孔を含み、斑鉄なし、ち密度20前後、PH(H₂O)5.0~5.5程度で下層との境界は漸変である。

第4層は厚さ50cm以上で腐植含量1~2%、土性L i C、色は10 Y R、彩度4~5、明度6~7、礫を含まず、塊状構造で細孔を含み、斑鉄なし、ち密度20~22、PH(H₂O)5.0~5.5である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市上士別18区 試坑70 福溪純一

第1層	0~17cm	腐植に富む黒褐(10 Y R 3/2)でL i C、粒質構造、細孔に富む、膜、糸根状斑鉄を含む。ち密度10で疎、PH(H ₂ O)5.5、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第2層	17~33cm	腐植に富む暗褐(10 Y R 3/4)でH C、細塊状構造、細孔に富む。糸根状構造斑鉄を含む。ち密度15で中、PH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り湿、境界は漸変
第3層	33~60cm	腐植を欠くにぶい黄橙(10 Y R 6/4)でL i C、塊状構造、細孔を含み、斑鉄なし、ち密度20で中、PH(H ₂ O)5.2、調査時の湿り湿、境界は漸変。
第4層	60cm以下	腐植を欠くにぶい黄橙(10 Y R 7/4)でL i C、塊状構造、細孔を含み、斑鉄なし、ち密度21で中、PH(H ₂ O)5.3、調査時の湿り湿である。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重 量 %	粒径組成 %				土性	現地容積 g	真比重	全炭素 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土				
1	0~17	4.38		13.13	15.33	31.02	40.52	LiC			4.19
2	17~33	4.18		6.17	15.51	32.34	45.98	H C			3.42
3	33~60	3.41		9.13	16.64	42.82	31.42	LiC			1.15
4	60~	3.75		3.50	22.44	43.74	30.32	LiC			0.85

層位	全窒素 %	炭素率	腐植 %	pH		置換度 Y ₁	塩基置換量 me/100g	置換性塩基 me/100 g			塩基 飽和度 %
				H ₂ O	KCL			CaO	MgO	K ₂ O	
1	0.26	16.12	7.22	5.5	4.4	8.75	26.0	11.5	0.9	0.2	44.2
2	0.17	20.12	5.89	5.6	4.3	12.50	23.1	11.0	1.2	0.2	47.8
3	0.04	28.75	1.98	5.2	4.2	28.75	16.4	1.6	0.3	0.2	9.8
4	0.03	28.33	1.46	5.3	4.1	36.88	17.9	3.0	0.5	0.1	16.8

層位	磷酸吸収 係数	有効態 mg/100g		乾土 効果	30°C: NH ₄ N 発生量 mg/100g		遊離酸化 鉄 %
		P ₂ O ₅	N		乾土	湿土	
1	1.220	3.38	15.16	0.05	15.16	15.11	0.77
2	1.540	tr	8.20	0.09	8.20	8.11	0.65
3	1.140	tr	3.93	1.85	3.93	2.08	—
4	1.050	tr	—	—	—	2.20	—

A-2 他の土壤統との関係

本統に離接する統としては川南中央統があるが堆積様式を異にするので区別される。

A-3 母材 非固結火成岩

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B 地形 やゝ緩波状台地

C 気候 年平均気温 5.6°C 年水量 1185mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項

深耕 心土耕 有機質施用 排水完備

F 分 布

北海道士別市上士別

調査及び記載責任者

野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年 月 日

昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
大和統一大和区	Ⅲ p Ⅱ r f n

(2) 土壤区別説明

大 和 統一大 和 区

示 性 分 級 式(水田)

表土有表耕へへへ湛へへ酸へへ土へへへ自へへへ養へへへへへへへ障へへ災へへ 土壤効土表土作土易遊グ透保濕保固土置有微酸有物增地 生産土の下下化分離ラ地然層分換"効"害理冠す 土の風透5050性化イの水水潤肥定塩の石苦加磷塗珪物的水べ 力の層の粘乾cmcm還有鐵基灰土里酸素酸害質のり 可能の礫土の機化乾沃狀豐含"障"害の 能厚含難土着の水土最元物含化乾沃狀豐含"害"危 性深含等性性硬性高含量度性性度力力態量素度無性度 等級ささ量易ささ性ち性量)湿度否性性度 ささ量易ささ性ち性量)密)度r w f n i a 種) t d g p l)
簡 略 分 級 式 Ⅲ p Ⅱ r f n

A 土壤区の特徴

この土壤区は大和統に属する。表土の厚さは17~20cmで中庸で有効土層は1m以上で深い。表土の土層はL i C~H Cで粘着性が強く耕起、碎土は困難である。自然肥沃度は中庸、養分肥は石灰、苦土、加里、磷酸、窒素とともに中である。地形はやや緩波状台地が多い。

B 植生及び利用状況 水稻が主体で一部に畑作物が栽培されている。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は比較的表土が浅いところから深耕と併せて有機物、塩基の補給により積極的に地力の培養が望まれる。又部分的に排水不良地が見られるので明、暗渠排水の完備に努力されたい。

D 分 布 北海道士別市上士別

記載責任者

野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

日 付

昭和45年3月31日

多寄 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ15cm内外で腐植に頗る富み、土生はCL、色はN、明度4~5、礫は含まず、粒状構造で膜状斑駁を含む、ち密度4で疎である。PH(H₂O) 5.5~6.0 下層との境界は平坦明瞭である。

第2層の厚さ10cm内外で腐植に頗る富み、土性はCL、色はN、明度4~5、礫は含まず、粒状構造で斑駁なし、を密度4で疎である。PH(H₂O) 5.5前後、下層との境界は平坦明瞭である。

第3層の厚さ5.0~6.0cm前後のヨシ、ハンの木を主材とした低位泥炭層色は5.0 YR、彩度3~4、明度3~4である。ち密度7~10である。

第4層の厚さ4.0cm以上で埴土からなつていて、色はN、明度3~4無構造でち密度1.0前後で疎である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市37線東1(101) 鈴木徳一

第1層	0~14cm	腐植に頗る富み灰(N4/0)でCL、粒状構造、膜状斑駁を含む、ち密度4で疎、PH(H ₂ O) 6.0、調査時の湿り潤。
第2層	14~20cm	腐植に頗る富み灰(N4/0)でCL、粒状構造、斑駁なし、ち密度4で疎、PH(H ₂ O) 5.4、調査時の湿り潤
第3層	20~69cm	暗赤褐(5YR3/4)のヨシ、ハンの木を主材とした低位泥炭層分解程度はやゝ良好、ち密度7で疎、調査時の湿り潤
第4層	69cm以下	暗灰(N3/0)で埴土、無構造、斑駁なし、ち密度1.0で疎。 調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重量%	粒径組成%				地盤 現地容積重さ	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0~14	3.55		2233	1297	4118	2352	CL			1.405		
2	14~20	6.99									2073		

層位	pH		置換酸 H ₂ O KCl 度 Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩基 飽和度 %	磷酸吸 収係数 B ₂ O ₃ N	有効態 mg/100g		乾土 効果 乾土 湿土	30°C NH ₄ N発生量 mg/100g	遊離酸 化鉄 %	
	CaO	MgO			B ₂ O ₃		N			B ₂ O ₃	N				
1	6.0	—	—	20.48	—	—	—	49.14	2.193	—	—	1666	3232	1566	—
2	5.4	—	—	53.04	—	—	—	13.92	1.773	—	—	956	2510	1554	—

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては、多寄北統、武徳統、多寄東流があるが、夫々堆積様式、腐植層序、礫及び砂礫層、母材等が異なるので区別される。

A-3 母材 非固結水成岩／ヨシ、ハンの木

A-4 堆積様式 水積／集噴

B 地形 平坦

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1185mm

D 植生及び利用状況 水田（一毛作田）

E 農業上の留意事項 排水、客土、珪カル施用

F 分布 北海道士別市

調査及び記載責任者 小林莊司、野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
多寄統一多寄区	III r II t l fa

② 土壤区分説明

多寄統一多寄区

示性分級式 (水田)

土表有表耕	湛	酸	土	自	養	障	災
壤効土耘表表水作化易遊ゲ地透保濕然保固土分置				有	微	有	增地
生の土の土土透土土還分離ラの水水潤肥肥定層の換	"	"	"	量	害理	害冠す	水べりの
産厚層礫難のの水下下元解酸イ乾性度沃力度の豊性					要物的	物的	危険度)
力さの含易土粘風性5050性化湿	度	度	塩否石苦加燒珪素度	度	質障性	の害	危険度)
可能深量性着乾	cmcm	有缺度	基灰土里酸素酸	有性			
性土のの土最物量		(機含量)	状態				
等級硬さ)	高	含量	量	"	"	"	
t d g p	l	r	w	f	n	i	a

A 土壤区の特徴

この土壤区は多寄続に属し、表土の厚さ15cm前後で比較的浅く有効土層は1m以上で深い。表土の土性はCLで耕起、碎土にはあまり困難はない。保肥力、固定力共に大きい。養分肥については石灰、窒素が多い。地形は平坦地である。

B 植生及び利用状況

水稻が主体である

C 地力保全上の問題点

この土壤区は、排水を改善して泥炭の分解を促進し、地力窒素の放出を水稻生育のパターンに調節し、併せて珪酸、苦土など塩基の補給を行い、同時に優良粘土の客土が大切である。

D 分 布

北海道

記載責任者 野崎輝義 (北海道立上川農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

多寄北統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ13~15cmで腐植に富み、土性はLicを主とする。色はN、明度5~6である。礫を含まず、粒状構造で糸根状及び膜状斑駁を含む。ち密度2~4で疎である。PH(H₂O) 5.0~5.5前後である。

第2層は厚さ15cm前後で腐植に富み、土性はLic、色はN、明度4~5である。礫を含まず、単一構造で糸根状斑駁を含む、ち密度10~11で疎である。PH(H₂O) 5.4~5.6前後である。

第3層は厚さ70cm以上で腐植を含み、土性はSic、色は10BG、彩度1、明度5~6で、礫を含まず、単一構造でヨシ有り、斑駁なし、ち密度10~15で中である。PH(H₂O) 5.0~5.2である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市35線西1(102) 神田寿雄

第1層	0~15cm	腐植に富む灰(N6/0)でLic、粒状構造、糸根及び膜状斑駁を含む。ち密度2で疎、PH(H ₂ O) 5.6、調査時の湿り潤、境界平坦や明瞭
第2層	15~27cm	腐植に富む灰(N5/0)でLic、単一構造、糸根斑駁を含む。ち密度10で疎、PH(H ₂ O) 5.4、調査時の湿り潤。境界平坦や明瞭
第3層	27cm以下	腐植を含む青灰(10BG6/1)でSic、単一構造、ヨシ有り、斑駁なし、ち密度10で疎、PH(H ₂ O) 5.2、調査時の湿り潤

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	機合量 重量%	粒径組成 %				土性	現地容 積重	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~15	2.29	/	4.63	12.14	42.34	40.89	Lic	/	/	3.630	0.272	13.3	6256
2	15~27	1.76	/	3.77	12.02	41.57	42.64	Lic	/	/	4.866	0.363	13.4	8386
3	27~	3.24	/	0.23	7.21	50.29	42.27	Sic	/	/	2.051	0.160	12.9	3555

層位	PH		置換度Y ₁	塩基置換量 me/100g			置換性塩基 me/100g			塩基飽和度 %	磷酸及 収率数	有効態 mg/100g			乾土		30°C NH ₄ -N 発生量mg/100g	遊離酸化鉄%
	H ₂ O	KCl		CaO	MgO	K ₂ O	B ₂ O ₃	N	効果			乾土	湿土	乾土	湿土	乾土	湿土	
1	5.6	—	—	18.93	—	—	25.91	1.314	—	—	7.87	19.84	11.97	—	—	—	—	
2	5.4	—	—	21.12	—	—	34.23	1.290	—	—	10.36	21.47	11.11	—	—	—	—	
3	5.2	—	—	18.34	—	—	33.02	1.097	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては、多寄統、日向統、武徳統、多寄南統、中士別中統、中士別南統、北士別北統があるが、夫々堆積様式、母材、腐植層序、礫、グライ層等を異にするので区別される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積（河成）

B 地形 平坦

C 気候 年平均気温 5.6 °C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 水田（一毛作田）

E 農業上の留意事項

排水、深耕、有機物施用、磷酸増肥

F 分布 北海道士別市

調査及び記載責任者 小林莊司 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

年月日 昭和45年3月31日

（2）土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
多寄北統一多寄北区	III P r l t f n

② 土壤区別説明

多寄北統一 多寄北区

示性分級式（水田）

A 土壤区の特徴

この土壤区は多寄北統に属する。表土の厚さ13~15cmで浅く、有効土層は1m以上で深い。表土の土性は強粘質で耕起、碎土は困難である。

保肥力中、固定力中で自然肥沃度は中庸である。養分では石灰が欠乏している、地形は平坦である。

B 植生及び利用状況

水稻が主体である。

C 地力保全七の問題点

この土壤区は表土が比較的浅いところから深耕と平行して有機物投入によって地力増強をはかることが大切である。（この場合特に塩基の補給も併せて行う事が必要である）又、地下水位が高いので暗渠排水の完備が望まれる。

D 分 布

北海道十別市

記載責任者 野崎輝義 (北海道立上川農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

多寄東統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ12～15cmで腐植を含むL i cで、色は10 B G、彩度1、明度5～6である。小礫を含み、粒状構造で糸根状膜状斑駁を富むから含むである。

pH (H₂O) 5.5前後で下層との境界は平坦明瞭である。

第2層の厚さ10cm内外で腐植に富む土性L i cで、色はN、明度5～6である。小礫有り、单一構造で斑駁なし、ち密度1.1～1.5で中である。pH (H₂O) 5.0～5.5で下層との境界は平坦で明瞭である。

第3層の厚さ20cm内外で腐植を含む土性H Gである。色は10 B G、彩度1、明度5～6で腐朽木あり、単粒構造で糸根状斑駁を含む。ち密度1.5で中である。pH (H₂O) 5.5前後で下層との境界は漸変である。

第4層の厚さは50cm以上で腐植を欠く土性Cで、色は10 B G、彩度1、明度6、角柱状構造でモザイク状黃褐色腐朽礫斑紋に富む。斑駁なし、ち密度1.5～1.6である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市37線東3(103) 鷹橋義雄

第1層	0～13cm	腐植を含む青灰(10 B G 6/1)のL i C、粒状構造、糸根状、膜状斑駁に富む、小礫あり、pH (H ₂ O) 5.6 境界平坦明瞭
第2層	13～21cm	腐植に富む灰(N 6/0)のL i C、单一構造、斑駁なし、小礫有り、ち密度1.3で中、pH (H ₂ O) 5.3 境界平坦明瞭調査時の湿り湿。
第3層	21～42cm	腐植を含む青灰(10 B G 6/1)のL i C、单一構造、糸根状斑駁を含む、腐朽木有り、ち密度1.5で中、pH (H ₂ O) 5.6、境界漸変、
第4層	42cm以下	腐植を欠く青灰(10 B G 6/1)のC、角柱状構造、斑駁なし、ち密度1.6で中、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫合量 重量%	粒径組成 %				土性 積重g	現地容 積重g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗沙	細沙	シルト	粘土							
1	0~13	2.10	/	21.84	18.23	31.42	28.51	L i C	/	2.793	0.215	13.0	4.813	
2	13~21	2.14	/	9.98	10.92	41.19	37.91	L i C	/	1.3372	0.290	11.6	5.811	
3	21~42	2.18	/	0.86	6.53	44.36	48.25	H C	/	1.967	0.153	12.8	3.390	

層位	PH		置換酸 度Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩基 飽和度 %	燃耗級 收率 %	有機態 mg/100g		乾土 B ₂ O ₃	N	30°C NH ₄ N 発生量/mg/100g	遊離酸 化 度 %
	H ₂ O	KOH			CaO	MgO	K ₂ O			B ₂ O ₃	N				
1	5.6	-	/	20.05	-	-	-	33.80	1009	-	-	6.01	15.01	9.00	-
2	5.3	-	/	20.36	-	-	-	29.12	1.033	-	-	4.91	13.48	8.57	-
3	5.6	-	/	29.01	-	-	-	20.53	1.110	-	-	-	-	-	-

A - 2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては、武徳統、多寄統、多寄北統があるが、夫々堆積様式、腐植層序、礫、母材等が異なるので区別される。

A - 3 母材 非固結水成岩

A - 4 堆積様式 洪積世堆積

B 地形 やゝ緩傾斜

C 気候 年平均気温 5.6 °C 年降水量 1,185 mm

D 植生及び利用状況 水田（一毛作田）

E 農業上の留意事項

排水、深耕心土深、磷酸多用による初期生育促進、有機質の施用、窒素質肥料の合理的施用による生育遅延防止

F 分布 北海道士別市

調査及び記載責任者 小林莊司 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
多寄東統—多寄東区	III P II t r f n

② 土壌区別説明

多寄東統 一 多寄東区

示性分級式（水田）

土表有表耕 壤土効土耘表表水作化易遊 生の土の土土透土還分離ラ 産厚礫難のの水下下元解酸イ 力さの含易土粘風性5050性化 可能 等級	湛 土 自 養 鹽 障 災 地 保 固 置 有 微 酸 有 物 增 地 害 理 冠 す 物 的 水 べ 度 性 質 障 性 の り の 害 危 險 危 險 度 度	土壤性状					
		t d g p	l r	w	f	n	i a
⑥	III I I I 3 3 3 1 1 2 2 - 3 - - - 2 2 2 2 - - - 2 - - 1 1 1 1 1						
簡略分級式						III p II t r f n	

A 土壌区の特徴

此の土壌区は多寄東統に属する。表土の厚さ 13 cmで浅いが有効土層は 1 m以上で深い。表土の土性は L i c で粘着性が強いので耕起、碎土は困難である。自然肥沃度は中庸であり、石灰、窒素等は多少不足気味である。地形はやゝ緩傾斜地帯が多い。

B 植生及び利用状況

水稻が主体である。

C 地力保全上の問題点

表土、下層土共に強粘質なためもあり排水不良のため全層は強い還元状態を呈している。従つて第1に排水を良好にし、生育遅延の防止策を確立することが先決である。このため窒素肥料の合理的施用法、弁当苗使用ならびに磷酸多用による初期生育の促進、密植栽培法などが考られる。また深耕と併行して有機質の施用も大切である。

D 分 布 北海道士別市

記載責任者 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

日 付 昭和 45 年 3 月 31 日

兼 内 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ13～15cmで腐植を含む、土性はL i cが主であり、色はN、明度4～5、礫は含まず、粒状構造で膜状、糸根状斑駁に富み、ち密度4～5で疎である。P H (H₂O) 5.0～5.5下層との境界は平坦で明瞭である。

第2層の厚さ7～10cmで腐植を含む。土性はL i c～H Cで、色は7.5 Y、彩度2、明度3～4で、単一構造で糸根状斑駁を含み、小礫の出現する個所もあり、ち密度1.5～1.8で中である。

P H (H₂O) 5.3～5.6で下層との境界は平坦でやゝ明瞭である。

第3層は厚さ10～15cmで腐植を含むH Cで、色は7.5 Y、彩度2、明度5～6、小礫の出現もあり、細粒状及び塊状の複合構造で糸根状斑駁を含み、ち密度1.6～2.0で中、P H (H₂O) 5.5～6.0、下層との境界は平坦でやゝ明瞭である。

第4層は厚さ5.0cm以上で腐植を欠くCで色は10 Y、彩度2、明度5～6、斑駁なし、塊状構造、ち密度1.9～2.1で中である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市上士別27線北(104) 斎藤仙三郎

第1層	0～13cm	腐植を含む灰(5/0)でL i c、粒状構造、膜状、糸根状斑駁に富み、ち密度4で中、P H (H ₂ O) 5.0、調査時の湿り潤、境界平坦明瞭
第2層	13～22cm	腐植を含むオリーブ黒(7.5 Y3/2)でH C、単粒構造、糸根斑駁を含む、ち密度1.5で中、P H (H ₂ O) 5.4、調査時の湿り潤、境界平坦やゝ明瞭、
第3層	22～33cm	腐植を含む灰オリーブ(7.5 Y5/2)でH C、細粒状及び塊状の複合構造、糸根状斑駁を含む、ち密度1.6で中、P H (H ₂ O) 5.5、調査時の湿り潤、境界平坦やゝ明瞭
第4層	33cm以下	腐植を欠くオリーブ(10 Y5/2)でC、塊状構造、斑駁なし、ち密度1.9で中である。調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫量 重量 %	粒径組成 %				土性	現地容 積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~13	2.09		11.0	11.31	42.69	44.90	Lic			2.583	0.255	10.1	4451
2	13~22	2.47		22.3	13.95	31.67	52.15	Hc			2.024	0.192	10.6	3488
3	22~33	3.06		33.3	21.90	19.09	55.68	Hc			1.177	0.134	8.8	2028

層位	PH H_2O/KOH	置換酸 度 γ_1	塩基置換 容量 $me/100g$	置換性塩基 $me/100g$	塩基 飽和度 %	磷酸吸 収係数 $P_{2O_5} N$	有効態 $mg/100g$	乾土 効果 乾土	30°C NH ₄ -N 発生量 $mg/100g$	遊離酸 化鐵 %			
1	5.0		16.12				46.28	1.076		1004	1569	5.65	
2	5.4		17.78				37.39	1.256		245	1125	8.80	
3	5.5		17.69				57.11	1.288		-	-	-	

A - 2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては上士別北統、中士別中統、中士別南統があるが、夫々堆積様式、腐植層序、礫、母材等が異なるので区別される。

A - 3 母材 非固結水成岩

A - 4 堆積様式 水積(扇状)

B 地形 やや緩傾斜

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項

排水、磷酸多用、弁当苗使用などによる初期生育促進、有機質の利用、窒素の合理的施肥法

F 分布 北海道士別市

調査及び記載責任者 小林莊司 野崎輝義 (北海道立上川農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
兼 内 統 一 兼 内 区	III p II t r f n

② 土壤区別説明

兼 内 統 一 兼 内 区

示性分級式 (水田)

土表有表耕	湛	酸	土	自	養	障	災
壤土効土耘表表水作化易遊地透保濕然保固土分置					有	微酸	有物
生の土の土土透土還分離ラの水水潤肥定層の換					"	"	量
産厚層礫難のの水下元解酸イ乾性性度沃力の豊性							害理害冠す
力さの含易土粘風性5050性化化湿							水ベ
可能深量性着乾	cm cm	有鉄度			基	石苦加磷空珪素度性	要物的
性土の土最		機含			灰土里酸素酸		質障性の
性等級硬さ)	物量	含量					害の危
			態	含			險度無)
t d g p	l	r	w	f	n	i	a
III II I III 3 3 3 I 1 2 II 2 - 3				II 2 2 2 II 2	---	2 -- 2 -- 2	I 1 1 I 1 1

A 土壌区の特徴

この土壤区は、兼内統に属する。表土13cmで浅く、有効土層は1m以上で深い。表土、下層土ともに強粘質土壤のため、耕起、碎土は困難である。

自然肥沃度は中庸で、一般に腐植、全窒素含有量が低いが、乾土効果、温度上昇効果、アンモニア化成率の高い土壤である。地形はやゝ緩傾斜から成る。

B 植生及び利用状況

水稻が主体である。

C 地力保全上の問題点

排水を良好にし、稻作期間の地温上昇を計るとともに春先の耕鋤を早めて地力の増進を計ることが大切である。

D 分 布 北海道士別市上士別

記載責任者 野崎輝義 (北海道立上川農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

中 土 別 中 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ15cm内外で腐植を含む、土性L i c、色はN、明度3~4、礫は含まず、粒状構造で膜状、糸根状斑鉄に富み、ち密度9~11で疎である。P H (H₂O) 5.5~5.8、下層との境界は平坦で明瞭である。

第2層の厚さ8~10cmで腐植を含む。土性L i c、色はN、明度4~5、中礫を含み、単粒構造で糸根状斑鉄ならびに膜状斑鉄を含む。ち密度15~20で中である。P H (H₂O) 5.5~6.0下層との境界は平坦で明瞭である。

第3層50cm以上の礫層である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市中土別5線東(105) 片山八治

第1層	0~14cm	腐植を含む暗灰(N3/0)でL i c、粒状構造、膜状、糸根状に富み、ち密度9で疎、P H (H ₂ O) 5.6調査時の湿り湿で境界平坦明瞭。
第2層	14~22cm	腐植を含む灰(N4/0)でL i c、単粒構造、中礫含む。膜状、糸根状斑鉄を含み、ち密度19で中、P H (H ₂ O) 5.8、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第3層	22cm以下	礫層からなつてゐる。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重量量 %	粒径組成 %				土性	現地容 積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~14	1.40	/	16.36	25.85	26.80	30.99	Lic	/	/	2.784	0.294	9.5	47.98
2	14~22	1.70	/	15.46	25.65	29.82	29.07	Lic	/	/	2.729	0.337	8.1	27.04

層位	PH		置換酸 度Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩基 飽和度 %	磷酸吸 收係数	有効態 me/100g		乾土 効果	30°C: NH ₃ -N 発生量mg/100g	遊離酸 化率 %
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			P ₂ O ₅	N			
1	5.6		/	15.92	/	/	/	49.01	79.6	/	/	13.65	19.01	536
2	5.8	/	/	17.00	/	/	/	45.90	91.6	/	/	7.02	14.09	7.07

A-2 他の土壤との関係

本統に隣接する統としては、中士別南統、多寄北統、上士別北統、下士別統、武徳統、下士別西統兼内統があるが、夫々堆積様式、母材、腐植層序、礫、グライ等が異にするので区別される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積（河成）

B 地形 平坦

C 気候 年平均気温 5.6 °C 年降水量 1,185 mm

D 植生及び利用状況 水田（一毛作田）

E 農業上の留意事項

漏水防止、深耕、後期生育の凋落防止

F 分布 北海道士別市天塩川流域

調査及び記載責任者 小林莊司 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

年月日 昭和45年3月31日

（2）土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
中士別中統一中士別中区	III d p II t f n

② 土壤区別説明

中士別中統	—	中士別中区
-------	---	-------

示性分級式（水田）

土表有表耕 壤土効土耘表表水作化易遊 生の土の土土透土土還分離 産厚層礫難の水下下元解酸イ 力さの含易土粘月性5050性化 可能等級	湛酸土自養障災 透保濕然保固土分置有微酸有物增地 肥肥定層の換効量害理害冠す 態沃力力の豊性熊要物的水ベ 塩否石苦加燃空珪素度性質礫性のり 基灰土量酸素酸の害危 状含量有性危險 態量無度危險	t d g p l w f n i a	
		t d g p l w f n i a	
簡略分級式		III d p II t f n	

A 土壌区の特徴

この土壤区は、中土別中統に属する。表土が15cm以内で浅く有効土層も30cm程度で非常に浅い。一般に腐植に乏しく肥料分の溶脱の激しい土壤区と考えられる。自然肥沃度、養分肥はやく中庸であり、地形は天塩川流域の平坦地である。

B 植生及び利用状況

水稻が主体である

C 地力保全上の問題点

第1に露水防止に努め優良粘土ならびにペントナイトを施用して後期生育の倒落を防ぐことが大切である。

D 分 布

北海道土別市天塩川流域

記載責任者 野崎輝義 (北海道立上川農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

武徳統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ13~15cmで腐植に富む、土性はSic~Licで色はN、明度3~4、礫は含まず、粒状構造で膜状斑駁を含むから富む、ち密度は5~10で疎である。PH(H₂O)は5.5前後下層との境界は平坦でやゝ明瞭である。

第2層の厚さ10~13cmで腐植に富む、土性はSic~Licで色はN、明度5~6、礫は含まず、粒状構造で糸根状斑駁に富む、ち密度は16~20で中である。PH(H₂O)5.0~5.2、下層との境界は平坦で明瞭である。

第3層の厚さ20cm前後で腐植を含む、土性はLicで色は5.0Y、彩度2、明度1~2である。礫は含まず、小粒状及び塊状の複合構造からなり、斑駁なし、ち密度15~18で中である。PH(H₂O)5.0~5.3で下層との境界は平坦でやゝ明瞭である。

第4層の厚さ50cm以上で腐植を欠くOで色は5.0Y、彩度2、明度6~7、塊状構造でモザイク状の黄褐色腐朽礫の斑紋を含む。斑駁なし、ち密度20~22で中である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市武徳42線4(106) 石川新之助

第1層	0~15cm	腐植に富み灰(N4/0)でSic、粒状構造、膜状斑駁を含む、ち密度5で疎、PH(H ₂ O)5.5、調査時の湿り潤、境界平坦やゝ明瞭。
第2層	15~24cm	腐植に富み灰(N5/0)でLic、粒状構造、糸根状斑駁に富む、ち密度16で中、PH(H ₂ O)5.2、調査時の湿り潤、境界平坦明瞭。
第3層	24~51cm	腐植を含むオリーブ黒(5Y2/2)でLic、小粒状及び塊状の複合構造、斑駁なし、ち密度15で中、PH(H ₂ O)5.3、調査時の湿り潤、境界平坦やゝ明瞭
第4層	51cm以下	腐植を欠く灰白(5Y7/2)でO、塊状構造、斑駁なし、ち密度20で中、調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 重 量 %	礫含量 %	粒径組成 %				土性	現地容 積 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~15	2.73	/	0.87	11.28	48.17	39.67	Sic	/	/	5.422	0.424	1.28	9.344
2	15~24	3.08	/	7.43	7.49	41.64	43.44	Lic	/	/	4.374	0.326	1.33	7.533
3	24~51	3.28	/	1.21	20.39	42.11	36.29	Lic	/	/	1.945	0.203	9.6	3.552

層位	PH		置換酸 H ₂ O 度Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩基 飽和度 %	磷酸吸 取係数 P ₂ O ₅ /N	有効態 乾土 効果		CO ₂ H-N 発生量 %100g	遊離酸 化 鉄 %	
	PH	KCl 度Y ₁			CaO	MgO	K ₂ O			乾土 効果	湿土			
1	5.5	/	/	29.71	/	/	/	29.92	1.198	/	/	6.91	1484	7.93
2	5.2	/	/	17.79	/	/	/	22.83	1.291	/	/	5.86	1109	5.23
3	5.3	/	/	25.16	/	/	/	20.93	1.580	/	/	-	-	-

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては、多寄東統、多寄北統、下上別西統、多寄統、上土別北統とがあるが、夫々堆積様式、母材、礫、腐植層序が異なるので区別される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B 地形 やや緩傾斜

C 気候 年平均気温 5.6℃ 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 水田（一毛作田）

E 農業上の留意事項

窒素質肥料の合理的施用の検討、磷酸多用弁当苗使用による初期生育の促進、深耕、心土耕、心土破碎、排水など土地改良の効果の検討

F 分布 北海道士別市を中心とする中心帶、武徳の大部分、上多寄、上多寄、中土別の一部に分布

調査及び記載責任者 小林莊司 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
武徳統一武徳区	Uto 1 f n

② 土壤区別説明

武徳統一 武徳区

示性分級式（水田）

	土表有表耕湛酸土自養有敏酸有物障災	(地增水すべりの危険度)
壤土効土耘表表水作化易遊グ地透保濕然保固土分置有敏酸有物害理害冠す	土壤土透土土還分離ラの水水潤肥肥定層の換〃〃効〃〃量害理害冠す	(地增水すべりの危険度)
生の土の土土土透土土還分離ラの水水潤肥肥定層の換〃〃効〃〃量害理害冠す	生の土の土土土透土土還分離ラの水水潤肥肥定層の換〃〃効〃〃量害理害冠す	(地増水すべりの危険度)
産厚層礫難のの水下下元解酸イ乾性性度沃力の豐性態要物的	産厚層礫難のの水下下元解酸イ乾性性度沃力の豐性態要物的	(地増水すべりの危険度)
力さの含易土粘風性5050性化化湿塩否石苦加磷珪素度性質障性の害	力さの含易土粘風性5050性化化湿塩否石苦加磷珪素度性質障性の害	(地増水すべりの危険度)
可能深量性着乾cmcm有疎度機含量	可能深量性着乾cmcm有疎度機含量	(地増水すべりの危険度)
性土のの土最機物基灰土里酸素素有性無)	性土のの土最機物基灰土里酸素素有性無)	(地増水すべりの危険度)
性等級のの硬さ(性高密)度)	性等級のの硬さ(性高密)度)	(地増水すべりの危険度)
(相t d g p l r w f n i a	(相t d g p l r w f n i a	(相t d g p l r w f n i a
簡略分級式 II t p l f n	簡略分級式 II t p l f n	簡略分級式 II t p l f n

A 土壤区の特徴

この土壤は武徳統に属する。表土の厚さ 1.5 cm 内外でやゝ浅く腐植に富み、斑点の集積も多い。置換容量がやゝ高く、窒素の保持力が良好と考えられる。下層は灰褐色から灰色を呈し、構造組織とともに発達し、デピリデルによる Fe²⁺ の反応は認められない。一部には Mn の集積がみられる。

第3層の硬度は20以下となつており、第4層には腐朽礫の斑紋がある。70cm前後に湧水面が出現している。表形はやゝ緩傾斜地帯である。

B 植生及び利用状況

大部分は水稻が单作されている

C 地力保全上の問題点

1. 窒素質肥料の合理的施用の検討
 2. 鉻酸多用弁当苗使用による初期生育の促進
 3. 深耕心土耕、心土破碎、排水など土地改良の効果の検討、
 4. 腐熟堆肥の使用、
 5. 栽植様式及び水温上昇など稲作法の検討

D 分布

北海道士別市の中心部、武徳の大部分、東多寄、上多寄、中士別の一部に分布

記載責任者 野崎輝義 (北海道立上川農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

日 向 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ13cm内外で腐植に富み、土性L i c、色はN、明度5~6である。礫は含まず、粒状構造で膜状糸根状斑駁に富む。ち密度は1.2~1.4で中、PH(H₂O) 5.5~5.7前後、下層との境界は平坦で明瞭である。

第2層の厚さ10cm内外で腐植に富み、土性L i cで色は10 BG、彩度1、明度4~5である。礫を含まず単一構造で膜状斑駁に富む、ち密度1.8~2.1前後で中である。PH(H₂O) 6.0前後、下層との境界は平坦で明瞭である。

第3層の厚さ5.0cmで腐植を含むS i cである、色は10 Y R、彩度2、明度5~6である。礫を含まず、粒状及び塊状の複合構造で斑駁なし、ち密度2.0~2.2で中である。PH(H₂O) 6.0~6.2で下層との境界は平坦やゝ明瞭である。

第4層の厚さ4.0cm以上で腐植を欠くCで、色は7.5 Y、彩度2、明度5~6、礫を含まず、粒状構造で膜状斑駁を含む、ち密度1.7~2.0で中である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市31線西4(107) 日下忠男

第1層	0~13cm	腐植に富む灰(N6/0)のL i c、粒状構造、膜状糸根状斑駁に富む、ち密度1.3で中、PH(H ₂ O) 5.7、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭
第2層	13~20cm	腐植に富む青灰(10 BG 5/1)のL i c、単一構造、膜状斑駁を含む、ち密度2.0で中、PH(H ₂ O) 6.1、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭
第3層	20~71cm	腐植を含む灰黄褐(10 Y R 6/2)のS i c、粒状及び塊状の複合構造、斑駁なし、ち密度2.2で中、PH(H ₂ O) 6.2、調査時の湿り湿、境界平坦やゝ明瞭
第4層	71cm以下	腐植に欠く灰オリーブ(7.5 Y 6/2)のC、粒状構造、膜状斑駁を含む、ち密度1.9で中である。調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重量 %	粒径組成 %				土性	現地容 積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~13	2.17	/	1.93	1.992	43.41	3.474	Lic	/	/	2.995	0.276	10.9	5.161
2	13~20	2.31	/	1.60	18.53	43.79	36.08	Lic	/	/	2.936	0.309	9.5	5.060
3	20~71	6.81	/	0.15	10.12	47.91	41.82	Sic	/	/	1.336	0.123	10.8	2.302

層位	PH		置換酸 度 Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩基 飽和度 %	磷酸吸 収係数	有効態 P ₂ O ₅ N	乾土 効果	30°C NH ₄ -N 発生量 mg/100g		遊離酸 化鐵 %
	H ₂ O	KOH			Ca O	Mg O	K ₂ O					乾土	湿土	
1	5.7		/	2.273	/	/	/	26.62	1.049	/	625	13.94	7.68	/
2	6.1		/	24.43	/	/	/	32.71	1.044	/	266	10.81	8.15	/
3	6.2		/	20.45	/	/	/	50.14	1.196	/	-	-	-	/

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては、多寄北統、武徳統、下士別西統、中士別南統があるが夫々堆積様式、母材、礫、グライ、腐植層序等が異なるので区別される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積(河成)

B 地形 平坦

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項

- 堆肥の施用
- 窒素ならびに磷酸の施用法に対する検討
- 深耕

F 分布 北海道士別市天塩川流域

調査及び記載責任者 小林莊司 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
日向統一日向区	III p II t f n

(2) 土壤区別説明

日向統一 日向区

示性分級式（水田）

土表有表耕湛酸土自養障災	微酸有物增地
壤土効土塙表水作化易遊ヶ地透保濕然保固土分置有	量害理害冠す
生の土の土土透土還分離ラの水水潤肥肥定層の換"効"量	要物的水ベ
産厚層櫻難のの水下下元解酸イ乾性性度沃力の農性態	珪素度性質障性のり
力さの含易土粘風性50%性化混度塙否石苦加磷堿基無)	の害危の
可深量性着乾cm有鐵度	灰土里酸素無)
能さ性土の機含量	有性
性等級の土最物量	無)
等級硬性高含密度	度)
t d g p	1 r w f n i a
III II III 3 3 3 I 1 2 I 2 - - - II 1 2 3 II 3 - - - 2 - - 2 I 1 1 I 1 1	
簡略分級式	III p II t f n

A 土壤区の特徴

この土壤区は、日向統に属する。表土の厚さ1.5cm程度で浅いが有効土層は1m以上で深い。第1層・第2層には斑状の集積が多く、さらに作土直下にはマンガンの集積も多い。強粘質で耕起、碎土が困難である。自然肥沃度、養肥分は中庸である。

地形は平坦地帯である。

B 植生及び利用状況

水稻が主体である

C 地力保全上の問題点

一般に作土が浅いので深耕と併せて有機質の施用が特に望まれる
又窒素ならびに磷酸の施用法について研究がほしい。

D 分布 北海道土別市天塙川流域

記載責任者 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

日付 昭和45年3月31日

下士別西統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ12～15cm内外で腐植に富む、土性L i c、色はN、明度4～5である。礫は含まず、粒状構造で膜状斑駁に頗る富み、ち密度1.5で中である。PH(H₂O) 5.0～5.5前後、下層との境界は平坦で明瞭である。

第2層の厚さ10～15cmで腐植に富む、土性はL i cで色は10 Y R、彩度2～3、明度4～5である。礫は含まず、粒状構造で糸根状斑駁を含む、ち密度2.0～2.2で中である。PH(H₂O) 5.0～5.5で下層との境界は平坦でやゝ明瞭である。

第3層の厚さ30cm前後で腐植を含む、土性はC L、色は10 Y R、彩度4～5、明度4～5である。礫は含まず、柱状構造で斑駁なし、ち密度2.5～2.7で密である。PH(H₂O) 5.5～6.0で下層との境界は平坦明瞭である。

第4層は厚さ50cm以上の砂礫層からなつている。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市下士別40線西3(108) 木島 清

第1層	0～12cm	腐植に富む灰(N4/0)のL i c、粒状構造、膜状斑駁に頗る富み、ち密度1.5で中、PH(H ₂ O) 5.3、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭
第2層	12～24cm	腐植に富む灰黄褐(10 Y R 4/2)のL i c、粒状構造で糸根状斑駁を含み、ち密度2.2で中、PH(H ₂ O) 5.3、調査時の湿り湿、境界平坦やゝ明瞭
第3層	24～53cm	腐植を含む褐(10 Y R 4/4)のC L、柱状構造で斑駁なし、ち密度2.6で密、PH(H ₂ O) 5.9、調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭
第4層	53cm以下	砂礫層

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重 量 %	粒径組成 %				土性	現地容 積 重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~12	1.76		548	23.51	3579	3522	Lic			3.854	0.327	11.8	6.643
2	12~24	1.59		590	3123	3058	3229	Lic			3.009	0.309	9.7	5.185
3	24~53	2.10		1370	41.21	2888	16.21	cL			1.191	0.085	-	2052

層位	PH		置換酸 度 Y ₁	塩基置換 容量 me / 100g	置換性塩基 me / 100g			塩基 飽和度 %	磷酸吸 收係数 B ₂ O ₅ / N	有効態 mg / 100g	乾土 効果	50°C NH ₄ -N 発生量 mg / 100g		遊酸酸 化 鉄 %
	H ₂ O	KOL			CaO	MgO	K ₂ O					乾土	湿土	
1	5.3			28.73				19.60	1.315		5.47	12.78	7.31	
2	5.3			20.33				20.64	1.587		3.04	10.03	6.99	
3	5.9			20.14				29.98	1.408		-	-	-	

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては、武徳統、日向統、中士別南統、下士別統、多寄北統、中士別中統、とあるが夫々堆積様式、母材、礫、土性、腐植層序、グライ等が異なり区別される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積（河成）

B 地形 平坦

C 気候 年平均気温 5.6 °C 年降水量 1,185 mm

D 植生及び利用状況 水田（一毛作田）

E 農業上の留意事項

- 漏水分止
- 窒素肥料の合理的施用法
- 磷酸多用
- 有機質施用

F 分布 北海道士別市天塩川流域

調査及び記載責任者 小林莊司 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
下士別西統 - 下士別西区	I t p f n

② 土壤区別説明

下士別西統 — 下士別西区

示性分級式（水田）

土表有表耕湛酸土自養障災 壤土効土粧表表水作化易遊ヶ地透保濕然保固土分置有微酸有物增地 生の土の土土透土土還分離ラの水水潤肥肥定腐の換効量害理害冠す 産厚層礫難のの水下元解酸イ乾性度沃力の豊性態要物的水べ 力きの含易土粘風性5050性化化湿度塩否石苦加磷望珪素度性質障のり 可深量性着乾cmcm基灰土里酸素酸の害危 能さの土最物量状含有性 性等級硬性高含態量無 等級硬性高含量 等級密 t d g p 1 度 r w f n i a
簡略分級式 II t p f n

A 土壤区の特徴

此の土壤区は下士別西統に属する。表土の厚さが12cmで浅く、有効土層も浅く53cm以下に砂礫層が出現するため通気、通水性はきわめて良好な土壤区である。

化学的性質は各層の磷酸吸收係数がやゝ高い。作土の置換容量はやゝ高いが他の諸性質との関連で肥料分の溶脱が考えられる。地形は平坦地帯である。

B 植生及び利用状況

大部分が水稻を単作している

C 地力保全上の問題点

1. 漏水防止としてペントナイトの施用
2. 窒素肥料の合理的施用法、とくに施用量、分施追肥、窒素の形態の検討
3. 磷酸多用（窒素の増施と併用して検討）
4. 腐熟堆肥の施用

D 分布 北海道士別市天塩川流域

記載責任者 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

日付 昭和45年3月31日

上士別北統

(1) 土壌統の概要

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ10～15cmで腐植に富み、土性はCL～Licで、色はN、明度4～5、小礫あり、粒状構造からなり、膜状、糸根状斑駁に富む。ち密度は6～11で疎である。PH(H₂O) 5.0～5.2、下層との境界は平坦で明瞭である。調査時の湿り湿。

第2層の厚さ5～10cmで腐植に富み、土性はLicを主とする。色はN、明度3～4、小礫ありから含む。単一構造で糸根状斑駁を含む。ち密度は2.0～2.2で中である。PH(H₂O) 5.5～5.6、下層との境界は平坦で明瞭である。

第3層の厚さ15cm内外で腐植を含む、Licで、色は7.5Y、彩度2～3、明度4～5である。粒状塊状の複合構造で膜状、糸根状斑駁を含み、ち密度は2.0前後で中である。PH(H₂O) 5.5～5.9、下層との境界は平坦明瞭である。

第4層の厚さ20cmで腐植を欠くしで、色は2.5Y、彩度2、明度4～5、小礫あり、大塊状及び粒状の複合構造で斑駁なし、ち密度2.5前後で密である。

第5層は厚さ50cm以上の礫層である。（小礫に頗る富む）

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市上士別25線南3(109) 庄司文雄

第1層	0～12cm	腐植に富む灰(N4/0)のCL、粒状構造、膜状、糸根状斑駁に富む、小礫あり、ち密度6で疎、PH(H ₂ O) 5.2、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭
第2層	12～19cm	腐植に富む暗灰(N3/0)のLic、粒状構造、糸根状斑駁を含む、小礫含む、ち密度2.1で中、PH(H ₂ O) 5.5、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭
第3層	19～33cm	腐植を含む灰オリーブ(7.5Y5/2)のLic、粒状、塊状の複合構造、膜状、糸根状斑駁を含む。ち密度1.9で中、PH(H ₂ O) 5.8、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭
第4層	33～55cm	腐植に欠く暗灰黄(2.5Y4/2)のL、大塊状、粒状の複合構造、小礫あり、ち密度2.5で密、斑駁なし、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭
第5層	55cm以下	礫層である。（小礫に頗る富む）

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	機含量 重 %	粒径組成 %				土性	現地容 積 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~12	1.80		25.66	22.86	27.08	24.40	cL			3.800	0.308	12.4	6548
2	12~19	1.97		19.91	20.42	24.04	35.62	Lic			4.573	0.287	15.3	7536
3	19~33	2.29		19.14	23.26	27.92	29.68	Lic			2.462	0.266	9.3	4243

層位	P H		置換酸 度 Y ₁	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			塩基 飽和度 %	磷酸吸 収係数	有効態 P ₂ O ₅ /N	乾土 効果	30°C:NH ₄ -N 発生量mg/100g		遊離酸 化 度 %
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O					乾土	湿土	
1	5.2			13.98				36.86	9.23		677	16.96	10.19	
2	5.5			22.50				48.30	1.070		467	11.19	6.52	
3	5.8			20.98				43.86	9.91		-	-	-	

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては多寄北統、中土別南統、下土別統、兼内統、武徳統とがあるが、夫々堆積様式、母材、機、グライ、腐植層序等が異なるので区別される。

A-3. 母材 非固結水成岩

A-4. 堆積様式 水積（扇状）

B 地形 緩傾斜

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 水田（一毛作田）

E 農業上の留意事項

窒素質肥料の合理的施用量の検討 深耕

F 分布 北海道士別市上士別

調査及び記載責任者 小林莊司 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
上士別北統—上士別北区	I t p f n

(2) 土壤区別説明

上土別北統 - 上土別北区

示性分級式（水田）

土表有表耕	湛	酸	土	自	養	障	災
壤土効土耕耘表水作化易遊	地透保濕然保固土分置	有	微酸	有物	增地		
生の土の土土透土還分離ラの水水潤肥耙定層の換	"効" "量	害理害冠す					
産厚層難のの下元解酸イ乾性性度沃力の豊性	態	要	物的	水			
力さの含易土粘風性5050性性化湿	度	塩否石苦加磷空珪素度性質障性のり					
可深量性着乾	t cm	有铁度	基灰土里酸素酸	の害	危の		
能性さ	性土	の機含	状含	有性	危險		
性等級	の土最	物量	態)	量	無	度	
	硬性高	含量					
	さ	ち					
		密度					
	t d g p	l r	w	f	n	i	a
簡略分級式 II t p f n							

A 土壤区の特徴

この土壤区は、上土別北統に属する、上層は腐植に富み、斑錆の集積の多い、多孔質の土壤である。一般に作土の置換容量が低くとくに窒素の保持力は弱いと考えられる。また2層はやゝ堅い犁底盤をなし、全体的に作土が浅い。地形は緩傾斜地帯である。

B 植生及び利用状況

水田が主体である

C 地力保全上の問題点

耕土を深くするところから深耕する事が望ましい。尚下層50cm位より礫層が出現し、排水は良好と考えられるも、中間層は粘土層のため一部還元層となつてゐる。

D 分布 北海道士別市上土別

記載責任者 野崎輝義（北海道立上川農業試験場）

日付 昭和45年3月31日

下 土 別 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ15cm内外で腐植に富み、土性はL i c、色はN、明度3~4である。礫は含まず粒状構造で膜状斑鉄に頗る富む、ち密度7~10で疎である。PH(H₂O) 5.5~6.0前後で下層との境界はやゝ明瞭である。

第2層の厚さ10cmで腐植に富み、土性はL i c、色はN、明度2~3である。礫は含まず、小粒状構造で膜状斑鉄を含み、ち密度15~18で中である。PH(H₂O) 5.5~5.9で下層との境界は平坦で明瞭である。

第3層の厚さ15cm内外で腐植を欠き、土性はC Lで、色は2.5Y、彩度は4~5、明度3~4である。礫を含まず、塊状及び小粒状の複合構造で斑鉄なし、ち密度20~22で中である。PH(H₂O) 5.0~5.5で下層との境界は平坦でやゝ明瞭である。

第4層の厚さは50~60cm以上で腐植を欠くCで、色は2.5Y、彩度4~5、明度4~5である。礫を含まず、大塊状及び小塊状の複合構造で斑鉄なし、ち密度22~24で中である。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市武徳46線3(110) 岡島宗三

第1層	0~14cm	腐植に富む暗灰(N3/0)でL i c、粒状構造、膜状斑鉄に頗る富み、ち密度8で疎、PH(H ₂ O) 5.7、調査時の湿り潤、境界平坦やゝ明瞭
第2層	16~22cm	腐植に富む黒(N2/0)でL i c、小粒状構造、膜状斑鉄を含む、ち密度18で中、PH(H ₂ O) 5.7、調査時の湿り潤、境界平坦明瞭。
第3層	22~37cm	腐植を欠くオリーブ褐(2.5Y4/4)でC L、塊状、小粒状複合構造、斑鉄なし、ち密度23で中、PH(H ₂ O) 5.4、調査時の湿り潤、境界平坦やゝ明瞭
第4層	37cm以下	腐植を欠く黄褐(2.5Y5/4)でC、大塊状、小塊状複合構造、斑鉄なし、ち密度24で中である。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫含量 重 量 %	粒径組成 %				土性	現地容 積 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~14	2.48	/	11.5	18.61	43.22	37.02	LiC	/	/	4.870	0.310	15.7	8.392
2	14~22	1.62	/	12.0	29.96	40.00	28.84	LiC	/	/	3.135	0.279	11.3	5.403
3	22~37	1.98	/	0.94	42.79	36.72	19.55	CL	/	/	0.912	0.128	7.1	1.572

層位	PH		置換酸 度 Y ₁	塩基置換 量 mEq/100g			置換性塩基 me/100g		塩基 飽和度 %	磷酸吸 収係数	有効態 mg/100g	乾土 P ₂ O ₅	N 効果	30℃:NH ₃ -N 発生量 mg/100g	遊離酸 化 鉄 %
	H ₂ O	KCl		CaO	MgO	K ₂ O									
1	5.7		/	29.86			/	/	36.37	1.485	/	6.51	14.62	8.11	/
2	5.7		/	23.16			/	/	23.87	1.571	/	1.40	6.74	5.34	/
3	5.4		/	19.69			/	/	21.51	1.070	/	-	-	-	/

A-2 他の土壤との関係

本統に隣接する統としては中士別南統、下士別西統、中士別中統、多寄東統、多寄北統、武徳統があるが夫々堆積様式、母材、礫、グライ、土性、腐植層序等が異なるので区別される。

A-3 母 材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積(河成)

B 地 形 平坦

C 気 候 年平均気温 5.6℃ 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項

- 1. 窒素質肥料の合理的施肥 2. 磷酸多用 3. 有機質施用

F 分 布 北海道士別市天塩川流域

調査及び記載責任者 小林莊司 野崎輝義 (北海道立上川農業試験場)

年 月 日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
下士別統一下士別区	III o II t 1 n

② 土壤区別説明

下十別統 一 下七別区

示性分級式（水田）

土表有表耕	湛	酸	土	自	養	障	災
壤土効土耘	表	表	表	化	遊	地	地
生の土の土の土	透	透	透	保	然	保	増
産厚層礫舞ののの	分	離	ラ	水	潤	固	理
力さの含易土粘風性	離	性	沃	肥	定	冠	害
可能 性等級	下	元	解	性	度	物	水
t d g p	1	w	f	n	i	a	べり
湛	酸	土	自	養	障	災	の危険度
有表耕	表	表	化	遊	地	地	の危険度
壤土効土耘	透	透	保	然	保	増	度)
生の土の土の土	分	離	水	潤	固	理	度)
産厚層礫舞ののの	離	性	沃	肥	定	冠	害
力さの含易土粘風性	下	元	解	性	度	物	水
可能 性等級	元	解	性	度	度	質	べり
t d g p	1	w	f	n	i	a	の危険度
湛	酸	土	自	養	障	災	の危険度
有表耕	表	表	化	遊	地	地	度)
壤土効土耘	透	透	保	然	保	増	度)
生の土の土の土	分	離	水	潤	固	理	度)
産厚層礫舞ののの	離	性	沃	肥	定	冠	害
力さの含易土粘風性	下	元	解	性	度	物	水
可能 性等級	元	解	性	度	度	質	べり
t d g p	1	w	f	n	i	a	の危険度

A 土壤区の特徴

此の土壤区は下土別統に属する。表土は14cmでやゝ浅く、有効土層は1m以上で深い。作土は腐植に富み、斑鐵が多い強粘質土壤で耕起、碎土は困難である。

置換容量、全置換性塩基やゝ高く、また潜在性の地力もやゝ高い。

地形は平坦地帯である。

B 植生及び利用状況

大部分が水稻单作である。

C 地力保全上の問題点

- 1 硝素質肥料の合理的施肥法の検討
 - 2 磷酸多用による初期生育の促進ならびに有効茎数の確保
 - 3 深耕と併せて堆、厩肥等の有機物の利用。

D 分布

北海道十別市天塩川流域

記載責任者 野崎輝義 (北海道立上川農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

中士別南統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ12～15cmで腐植に富む、土性はCL～L_iCで色はN、明度2～3である。礫は含まず、粒状構造で膜状斑鉄に富む。ち密度12～15で中である。PH(H₂O)5.7～5.9で下層との境界はやゝ明瞭である。

第2層の厚さ10cm内外で腐植に富む、土性はL_iCで色はN、明度3～4である。礫を含まず、単一構造で膜状、糸根状斑鉄を含み、ち密度は17～22前後でPH(H₂O)5.3～5.7前後、下層との境界は平坦で明瞭である。

第3層の厚さ10cm内外で腐植を含む、土性はCLで色は2.5Y、彩度4～6、明度3～5である。礫を含まず、大塊状及び小粒状の複合構造で斑鉄なし、ち密度25～27で密である。PH(H₂O)6.0前後で下層との境界は平坦で明瞭である。

第4層の厚さ40～50cm内外の砂層で色は2.5Y、彩度4～5、明度4～5である。

第5層の厚さ50cm以上の砂礫層からなつている。

代表的断面形態

(所在地) 北海道士別市中士別7線西1(111) 山下政雄

第1層	0～14cm	腐植に富む暗灰(N3/0)でCL、粒状構造、膜状斑鉄に富む、ち密度15で中、PH(H ₂ O)5.8調査時の湿り湿、境界平坦やゝ明瞭。
第2層	14～22cm	腐植に富む暗灰(N3/0)でL _i C、単一構造、膜状、糸根状斑鉄を含む、ち密度21で中、PH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り湿、境界平坦明瞭。
第2層	22～30cm	腐植を含むオリーブ褐(2.5Y4/4)でCL、大塊状、小粒状構造、斑鉄なし、ち密度27で密、PH(H ₂ O)6.1、調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭。
第4層	30～74cm	腐植を欠く砂層で黄褐(2.5Y5/4)である。
第5層	74cm以下	砂礫層である。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重量%	粒径組成 %				土性	現地容積重g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0～14	1.62	/	20.93	27.01	27.15	24.91	C L	/	/	3.323	0.302	11.0	5.727
2	14～22	1.69	/	18.11	28.29	26.74	26.86	L i C	/	/	3.232	0.260	11.9	5.569
3	22～30	1.87	/	22.97	29.96	25.58	21.49	C L	/	/	2.659	0.245	10.9	4.577

層位	pH		置換酸度Y ₁	塩基置換容量me/100g	置換性塩基me/100g			塩基飽和度%	磷酸吸収係数	有効態mg/100g		乾土効果	30°C NH ₄ N發生量mg/10g		遊離酸化鉄%
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			P ₂ O ₅	N	乾土	湿土		
1	5.8	/	/	20.07	/	/	/	36.60	1,182	/	/	5.91	12.95	7.04	/
2	5.4	/	/	17.15	/	/	/	35.62	1,066	/	/	1.10	8.58	7.48	/
3	6.1	/	/	16.90	/	/	/	39.26	1,095	/	/	—	—	—	/

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては下士別西統、日向統、中士別中統、下士別統、多寄北統、北士別北統兼内統があるが夫々堆積様式、母材、礫、グライ、土性、腐植層序等が異なるので区別される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 水積(河成)

B 地形 平担

C 気候 年平均気温5.6°C 年降水量1,185mm

D 植生及び利用状況 水田(一毛作田)

E 農業上の留意事項

1. 漏水防止 2. 窒素質肥料の合理的な施用法 3. 有機質施用

F 分布 北海道士別市天塩川流域

調査及び記載責任者 小林莊司 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
中士別南統一中士別南区	I t d p f n

② 土壤区別説明

中士別南統一中士別南区

示性分級式(水田)

土表有表耕	淋	酸	土	自	養	障	災
壤土効土耘表表作	易遊	透保湿	保固土	置	有徵酸	有物害	(地增冠す
の土の土土土	ラ	分離	層	換	"効"	理物的	水の
生厚層疊難の水下化	解酸イ	地水水潤然	肥定の分性	態量	石苦加磷窒珪	質障の	危の
産さの含易土粘風	五五性化化	肥	力基	灰土里酸素酸要	害有	害無性	危險度
力深量性着乾透	〇〇有鐵度	性性度	肥	状の含	素度	度	(地增冠す
可さの硬水土最元透	m cm還機含	の物量	乾	沃	量	性	水の
能性等級	ののの量	態	沃	豐	素度	a	危の
t a g p	性密性r	湿度w	f	n	j	s	危險度
簡略分級式		t d p f n					

A 土壤区の特徴

此の土壤区は中士別南統に属する。表土の厚さ 14 cmで中庸、有効土層は 30 cm前後で浅い。一般に砂層の出現する位置が高く 30 cm内外から認められる。排水はきわめて良好で、肥料流亡の大きい土壤で作土の磷酸吸收係数は中程度で、置換容量は下層になるにつれて低くなつてゐる。腐植は 6% 前後で有機物に乏しい。地形は平坦地帯からなつてゐる。

B 植生及び利用状況

大部分が水稻单作である。

C 地力保全上の問題点

- ベントナイト施用による漏水防止
- 窒素質肥料の合理的施用法、とくに漏水との関連において分施、追肥による秋落現象の防止。
- 深耕と併せて堆、厩肥等の有機質の導入も望まれる。

D 分布

北海道士別市天塩川流域

記載責任者 野崎輝義(北海道立上川農業試験場)

日付 昭和 45 年 3 月 31 日

大英統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cm内外で、腐植含量は5~10%、土性はS i C Lである。土色は10 Y Rで彩度2、明度2、細粒構造で発達程度は弱度のものが多い。ち密度は10以下で疎である。P H (H₂O) 6.4、下層へはおもむね漸変する。

第2層は厚さ20cm内外で腐植1~2%。土性はL~S i Lである。土色は7.5 Y Rで彩度3~4、明度2~3で、細粒状構造、細孔を含む、ち密度は12~20で中、P H (H₂O) 6.2前後、下層との境界は判然としない。

第3層は、厚さ50~60cm以上で、腐植含量は1%以下、土性はL~S i Lである。土色は、7.5 Y R~10 Y R、彩度5~6、明度4~5である。塊状構造で不鮮明なものが多い。ち密度は、20~28で密である。P H (H₂O)は6.4前後である。

代表的断面形態

(所在地) 士別市上士別 試抗№7

第1層	0~13cm	腐植に富む黒褐色(10 Y R 2/2)のS i C L、発達弱度の細粒構造、ち密度8で疎、P H (H ₂ O) 6.4、調査時の湿り乾、境界漸変。
第2層	13~30cm	腐植を欠く黄褐色(5 Y R 2/4)のL、不鮮明細塊状構造で細孔を含む、ち密度25、P H (H ₂ O) 6.6、調査時の湿り半乾、境界は判然としない。
第3層	30cm以下	腐植を欠く、黄褐色(10 Y R 4/4)のL、不鮮明小塊状構造で細孔を含み、ち密度32で密、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含 量重 量%	粒径組成 %				土性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~13	4.0		5.6	28.9	45.5	19.7	S i C L	—	—	3.00	0.32	9	5.2
2	13~30	3.8		14.2	38.3	34.9	12.9	L	143.0	—	2.29	0.21	11	3.9
3	30~	3.9		—	—	—	—	—	—	—	1.50	0.13	11	2.6

層位	p H		置換酸度 Y ₁	塩基 置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰 飽和度 %	磷酸 吸收係数	有効態磷酸 me/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	6.4	4.6	1.15	25.9	13.3	0.4	0.2	52	856	3.5
2	6.6	4.4	3.92	19.9	6.9	1.0	0.1	35	1,150	1.7
3	6.4	4.6	7.17	16.6	2.7	0.6	0.1	17	1,195	—

A - 2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては成美統があるが、堆積様式が異なるので区別される。

A - 3 母材 固結火成岩(斑勵岩)

A - 4 堆積様式 残積土

B 地形 10~20度の複合斜面、波状地である。

C 気候 平均的気温 5.6℃ 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 大部分は農耕地であるが林地もある。主要作物は馬鈴薯、麦類、燕麦、豆類、ビートなどであるが、一般に管理は粗放で収量は低い。

E 農業上の留意事項

保全耕作、有機物増施、混同經營、施肥の合理化

F 分布 北海道士別市上士別

調査及び記載責任者 野村 球(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(〃 上川 〃)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
大英統一大英区	ⅢSe II _t fni

② 土壤区別説明

大英統一大英区

示性分級式(畑)

土壌等級	表有表耕土効土耘表表土の土の土の厚層礫難の土の含易土粘風力深量性着乾の性土の硬さ	透保濕水潤然肥定の性度肥の状態	自保固土層の分力基の状態	養置換"効性態量塩石苦加燃灰土里酸要の含"素度	障有物害理物的質障害の害有性無	災增地冠す水べのり危の度險度	傾自然斜為傾の傾斜方斜向	侵人耐蝕水風度蝕性
可	t d g p	w	f	n	j	a	s	e
能	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	1 2 1	[1 2 (2)]	1 2 1	1 3 2 2 1 1	1 2 --- Ⅲ 3 - Ⅲ 3 2 1
性	簡略分級式	Ⅲ S e	Ⅲ t f n i					

A 土壤区の特徴

この土壤区は大英統に属する。表土の厚さは 1.5 cm 内外、有効土層 1 m 以上、細粒質で稍粘着性を示すが、農具の使用には支障はない。保水力は中庸であり、下層土の透水性は比較的大きい。保水力は中庸で固定力は比較的大きく、自然肥沃度は中程度である。作土は、燐酸、カリ及び苦土に欠乏しているが、特殊の障害性は存在しない。地形は 10 ~ 25 度の波状性傾斜地帯で土壤侵蝕が著しい。

B 植生及び利用状況

大部分は農耕地であるが林地もある。主要作物は馬鈴薯、麦類、豆類、燕麦、ビート等である。

C 地力保全上の問題点

傾斜地で且つ下層土が堅密な所が多い。従つて水蝕の発生が認められるので、保全耕作傾斜地用農具の整備が最も緊急な問題である。尙全般に有機質の不足が目立つ。

D 分布

北海道士別市上士別

記載責任者 野 村 琥 (北海道立中央農業試験場)
 日 付 野 崎 輝 義 (" 上川 ")
 日 付 昭和 45 年 3 月 31 日

成 美 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は15cm内外で腐植含量は5~10%、土性はCL-SiCLである。土色は7.5YRで彩度2、明度2~3。未風化礫を稍含み、弱度の細粒状構造。ち密度は10以下で疎である。PH(H₂O)6.5前後、下層へは概ね漸変する。

第2層は20~30cmで腐植1~3%、土性はCL~SiCLである。土色は7.5YR~10YRで彩度3~4、明度4~5、未風化礫を稍含む。弱度の細塊状構造で細孔を含む。ち密度は10~15の中、PH(H₂O)6.0~6.5、下層との境界は判然としない。

第3層は30cm内外で腐植を欠き土性はL~CLである。土色は10YRで彩度6~8、明度4~5。弱度の塊状構造で細孔を含む。ち密度20~30で密。PH(H₂O)は5.5~6.5である。

第4層は40cm内外で腐植を欠き土性はL~CLである。土色は10YRで彩度7~8、明度5~6、構造は不鮮明で、ち密度30前後で密である。

代表的断面形態

(所在地) 士別市上士別 試坑No.4

第1層	0~12cm	腐植に富む、黒褐色(10YR3/4)のSiC、発達弱度の細粒状構造、ち密度10で疎、PH(H ₂ O)6.3、調査時の湿り乾、境界漸変。
第2層	12~26cm	腐植を含む暗褐色(10YR4/6)のSiC、不鮮明細塊状で細孔を含む。ち密度20でPH(H ₂ O)6.6、調査時の湿り半乾、境界は判然としない。
第3層	26~52cm	腐植を欠く褐色(5YR4/6)のCL、構造は不鮮明な塊状で細孔を含む。ち密度25で密、調査時の湿り湿、境界は判然としない。
第4層	52cm以下	腐植を欠く黄褐色(10YR4/4)CL、構造は不鮮明、ち密度28で密、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 %	粒径組成 %				土性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~12	3.3		6.0	19.0	46.9	28.0	SjC	130.7	—	3.28	0.43	8	5.64
2	12~26	4.2		7.1	16.7	49.1	27.1	SjC	134.7	—	2.50	0.31	8	4.30
3	26~52	4.5		14.0	30.0	38.4	17.7	CL	—	—	2.63	0.25	11	4.52

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基 置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰 飽和度 %	磷酸 吸収係数 mg/100g	有効態磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	6.3	5.0	1.87	23.7	16.1	0.8	0.2	59	1,014	2.4
2	6.6	4.8	1.30	21.3	18.0	0.5	0.2	72	1,182	1.5
3	6.2	4.6	8.58	21.1	3.2	0.5	0.2	8	1,492	—

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては大英統があるが、堆積様式が異なるので区別される。

A-3 母材 固結火成岩(斑勵岩)

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B 地形 5~15度の複合斜面、波状地である。

C 気候 年平均気温 5.6℃ 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 大部分農耕地で主要作物、馬鈴薯、燕麦、麦類、ビート、豆類である。

E 農業上の留意事項

保全耕作、有機物増施、混同經營、施肥の合理化

F 分布 北海道士別市上士別

調査及び記載責任者 野村 琥(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(〃 上川 〃)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
成美統一成美区	III Se J t g f n i

② 土壤區別說明

成 美 統 一 成 美 区

示性分級式(番)

土壌	表土	透保濕	自然	保固土	養置	有微酸	障害	災害	傾傾	侵侵
生産力	土効土耘表表	土地	然然	層分	性換	“”效	(物理的	(地增冠水	(自然傾斜	(耐風蝕度性)
可能性等級	の土の土の土の厚層礫難のさの含易土粘風の深量性着乾さ	水潤肥定	肥性	塩基性	態質	量苦加鹽	物的障害	すべりの危険度	傾斜方向	水飽蝕度性)
t d g p	の性土の硬さ)	肥沃	力基	石灰土	酸要	害	物質害性	度)	危險度)	侵蝕度性)
	乾	状态	力状态	苦加鹽	酸要	害	有無)			
	w	度	f	n	i	a	s	e		
	1 2 1	1 2 (2)	1 2 1	1 2 2 2 1 1	1 2	—	3	—	3 2 1	

A 土壤区の特徴

この土壤区は成美統に属する。表土の厚さは15cm内外、有効土層1m以上、細粒質で稍粘着性がある。保水力は中庸で下層土の透水性は中、保肥力は中庸で固定力は稍大きい。自然肥沃度は中位である。作土は、燐酸、カリ及び苦土に欠乏している。特殊の障害性はない。地形は5~15度の波状地で相当の土壤侵蝕が認められる。

B 植生及び利用状況 大部分農耕地で、主要作物は馬鈴薯、燕麦、麦類、ピート、豆類である。

C 地力保全上の問題点

傾斜地で、且つ下層土が堅密な所が多く、水蝕の発生が認められる。従つて保全耕作、傾斜地用農具の整備が最も緊急な問題である。有機質に欠乏しているので深耕、心土破碎等と併せて有機物の導入も望まれる。

D 分 布 北海道士別市上士別市

記載責任者 野 村 球(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(“上川”)

日付 昭和45年3月31日

川 南 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は、厚さ15cm内外で腐植含量は5～10%、土性はL i Cである。土色は10YRで彩度2、明度2、発達弱度の細粒構造である。ち密度は10以下で疎である。PH(H₂O)5.6～6.0、下層へはおむね漸変する。

第2層は、厚さ20cm位で腐植5～10%、土性はL i Cである。土色は10YRで彩度3、明度3、稍鮮明な細粒状構造で細孔を含む。ち密度は15～20で中である。PH(H₂O)5.1、下層との境界は、比較的判然としている。

第3層は、厚さ50～60cm以上で腐植含量は1%以下、土性はL i Cである。土色は10YR、彩度4～5で稍不鮮明な塊状構造、ち密度は20～22で中である。PH(H₂O)は5.7前後である。

代表的断面形態

(所在地) 士別市上士別 試坑No.34

第1層	0～15cm	腐植に富む黒褐色(10YR3/4)のL i C、発達弱度の細粒状構造、ち密度8で疎、PH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り半乾、境界漸変。
第2層	15～33cm	腐植を含む暗褐色(7.5YR4/4)のL i C、稍鮮明な細粒状構造、細孔を含み、ち密度20で中、PH(H ₂ O)5.7、調査時の湿り湿、境界不鮮明。
第3層	33～56cm	腐植を欠く、褐色(7.5YR5/4)のL i C、不鮮明小塊状構造、細孔、小孔を含む、ち密度20で中、PH(H ₂ O)5.7、調査時の湿り湿、境界不鮮明
第4層	56cm以下	腐植を欠く、褐色(7.5YR5/8)のL i C、不鮮明塊状構造、ち密度25で密、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 重 量 %	礫含量 %	粒径組成 %				土性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~15	4.2	/	1.1	23.2	38.2	37.5	LjC	96.0	—	3.00	0.34	8.8	5.2
2	15~33	3.0	/	1.0	19.5	42.4	37.2	LjC	94.6	—	2.43	0.35	6.9	4.2
3	33~56	4.5	/	0.8	33.2	33.6	32.4	LjC	107.6	—	1.47	0.20	7.4	2.5

層位	P H		置換酸度 Y ₁	塩基 置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰 飽和度 %	燃 酸 吸收係数 mg/100g	有効態磷 酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	5.6	3.7	17.5	31.3	10.0	2.0	0.9	32.0	1,500	2.7
2	5.1	3.5	26.4	31.5	8.9	1.2	0.8	28.0	1,627	2.3
3	5.7	3.5	—	38.1	4.3	1.2	0.7	11.6	1,970	—

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては成美統、川西南統があるが堆積様式、母材が異なるので区別される。

A-3 母材 変成岩(ホルンヘルス)

A-4 堆積様式 残積土

B 地形 10~20度の複合斜面、波状地からなる。

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185 mm

D 植生及び利用状況 大部分農耕地であるが林地もある。馬鈴薯、麦類、燕麦、豆類で収量は低い。

E 農業上の留意事項

下層土が堅密で、急傾斜地が多い。土壤侵蝕の防止が急務である。

F 分布 北海道士別市上士別

調査及び記載責任者 野村 球(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(" 上川 ")

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
川南統一川南区	IIISe IItg p fnj

(2) 土壤区別説明

川南統一川南区

示性分級式(畳)

土壌 生産力 可能性 等級 III	表有表耕	土	透保濕	自保固土	養置	有微酸	障害	災害	傾傾	侵侵
	土効土耘表表表	地	水水潤	然然肥定	層分性	換"効態量	有物理的物質障害	增地冠す水べのり危険度	自然斜傾傾斜方斜向	侵耐水風侵耐水風侵耐水風
	の土の土土土	の地	水水潤	肥定の塩	性肥	石苦加鹽	害の害	の危険度		性性性性
	厚層難ののの				性度	灰土里酸要	含"有性無			
	さの含易士粘風				性度	素度				
	深量性着乾				状態					
	さの性土硬				沃					
	の乾				豐					
	t d g p	w	f	n		j	a	s		e
	II III III 3 2 2	I 1 2 (2)	II 2 2 2	II 1 2 1 3 1 2	II 1 2	-	-	III 3 EW-NS	III	3 2 1
	簡略分級式	III Se	II t g P f n i							

A 土壤区の特徴

この土壤区は川南統に属する。表土の厚さ 15 cm 内外で有効土層 1 m 以上、細粒質で粘着性を示すが、農機具の使用に支障はない。保水力、下層土の透水性は中庸である。保肥力は中、固定力は稍大で自然肥沃度は中位である。作土は磷酸に稍欠乏しているが、特殊の障害性はない。地形は 10 ~ 25 度の波状地で、土壤侵蝕が著しい。

B 植生及び利用状況

大部分は農耕地であるが林地もある。主要作物は馬鈴薯、麦類、燕麦、豆類等であるが、管理は一般に粗放であり、収量も低い。

C 地力保全上の問題点

下層土が堅密で急傾斜地が多く、土壤侵蝕の防止が急務である。

保全耕作（等高線栽培緑作帯設置）有機物施用（堆肥、綠肥作物導入）により地力の培養を図ることが望まれる。

D 分布 北海道士別市上士別

記載責任者 野 村 球（北海道立中央農業試験場）

野 崎 輝 義（ “ 上川 ” ）

日付 昭和 45 年 3 月 31 日

川 西 南 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15～22cmで、腐植含量は3.2%、土性はLjCが主である。色は5YR～10YRで、彩度3～6、明度2～4。風化、腐朽小角礫を含む。細粒状構造で、発達は中程度。ち密度は12～18で中である。PH(H₂O)5.6前後。下層へはおおむね漸変する。

第2層は厚さ11～35cmで、腐植含量は1.7%、土性はLjCが主である。色は5YR～10YRで、彩度3～8、明度4～5、風化小中角礫を含むが、処によつては大角礫を含む場合もある。発達弱度の細塊状構造、若しくは細粒状構造で、細小孔を含む。ち密度は20～25で中、PH(H₂O)は5.1前後。下層との境界は、おおむね漸変である。

第3層はおおむね40cm以下で、腐植含量は0.7%以下、土性はHCが主である。色は2.5YRが主で、5YR～10YRの場合もある。2.5YRの彩度6～8、明度4～5。5YR～10YRの彩度5～8、明度4～5である。風化小中大角礫を含む～富む。角塊状構造、若しくは連結状で、細小孔を含む。ち密度は22～28である。

代表的断面型態

(所在地) 士別市川西 試抗6

第1層	0～16cm	腐植を含む、黒赤褐(5YR4/3)のLjC、発達中度の粒状構造、風化小角礫を含む。ち密度17、PH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り半乾、境界波状漸変。
第2層	16～37cm	腐植を欠く、赤褐(5YR4/8)のLjC、発達弱度の細塊状構造、風化小角礫を含む。ち密度18～20、PH(H ₂ O)5.1、調査時の湿り湿、境界波状漸変。
第3層	37cm以下	腐植を欠く、明赤褐(2.5YR6/5)のHC、発達中度の細塊状構造、風化小角礫を含む。ち密度25、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~16	2.8	/	11.9	17.6	38.9	31.7	LjC	102	2.55	1.81	0.19	10	3.2
2	16~37	3.3	/	14.2	12.5	38.6	34.6	LjC	129	2.63	1.01	0.11	9	1.7
3	37~	4.4	/	5.7	9.8	24.6	59.9	H C	—	—	0.45	0.06	7	0.7

層位	p H		置換酸度 Y_1	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸收係数 mg/100g	有効態磷酸 mg/100g
	H_2O	KCl			Ca O	Mg O	K_2O			
1	5.6	5.2	0.3	16.3	11.2	0.4	—	68.6	730	—
2	5.1	4.5	2.8	12.9	8.1	0.4	—	62.3	830	—
3	4.5	4.2	22.5	16.3	1.4	0.5	—	8.5	1,060	—

A - 2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては東山南、川西北、東山、川西中央の各統とは母材が異なり区分した。

A - 3 母材 固結火成岩(集塊岩)

A - 4 堆積様式 残積土

B 地形 標高 200~300m、平均傾斜8度内外の丘陵地

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 緩傾斜地は耕地化されているが、周辺の急傾斜は不可耕地となつてゐる。

E 農業上の留意事項

土壤侵蝕が激しく、更に土壤の有機物にも乏しく、地力低下しているので、保全耕作、緑肥導入の必要がある。

F 分布 北海道士別市

調査及び記載責任者 野村 球(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(" 上川 ")

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
川西南統一1区	III t n S e II g p f i

② 土壤区別説明

川西南統一1区

示性分級式(畳)

土表有表耕	土透保湿	自保固土養置	養有微酸	障害	災害	傾傾	侵侵耐耐
土効土耘表表土	地水潤	然肥定の性層分	性換"効	害理	增地冠す	自傾人然斜為	水風
生の土の土の土	水水潤	肥定の性層分	性態量	物的	水ベ	傾の傾	蝕蝕
産厚層難の土の土	水水潤	肥塩の石苦加鹽	石苦加鹽	質障害	のり	斜方斜	性性
力さの含易土粘風	肥力基	灰土里酸要	灰土里酸要	害の害	危の危	向))
可能深量性着乾	性性度	含"有性	有性無)	危險度	度		
能性等級	性土の乾	沃狀態	素度	無)			
t a g p	w f	n	j a s				e
III	II 2 2 1	I 1 2 (2)	II 1 3 1	III 1 2 1 3 1 1	II 1 2	---	III 3 SN WE 1 III 3 2 1
簡略分級式	III t n S e	II g p f i					

A 土壤区の特徴

表土の厚さ 15 cm、有効土層 1 m 以上、細粒質で稍粘着性があるが、農具の使用に支障を來す程ではない。保水力、下層土の透水性は中庸で、保肥力、固定力は共に大きい。自然肥沃度は中位である。作土は、磷酸に欠乏しており又苦土は稍少ない。特殊の障害性はない。地形は 10 ~ 25 度の波状地で、相当の土壤侵蝕がある。

B 植生及び利用状況

大部分農耕地で、主要作物は燕麦、馬鈴薯、豆類、麦類である。

C 地力保全上の問題点

急傾斜なので土壤侵蝕の防止が望まれる。

D 分 布

北海道土別市

記載責任者 野 村 琥 (北海道立中央農業試験場)

野 崎 輝 義 (" 上川 ")

日 付 昭和 45 年 3 月 31 日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
川西南統一2区	III p n e II t g i s

② 土壤区別説明

川西南統一2区

示性分級式(畳)

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	表有表耕	土透保濕	自保固土	養置換	障有微酸	災增地	傾自傾風	侵耐水風
	土効土耘表表	地水水潤	然肥定の	性性態量	害害理物的	冠す水べ	然傾傾斜	耐水風度性性
厚層礫難ののの	水水潤	肥定の	石苦加磷	物的質障害	のりの害	のりの危	侵耐水風	
さの含易土粘風	肥力力基	塩灰土里酸要	害害の害	害害の害	度度度	度度度	度度度	
深量性着乾	力狀態	含" "	有性無	性性	性性	性性	性性	
さの性土乾	沃沃	量量	素度	斜斜	斜斜	斜斜	斜斜	
硬さ	沃	否	性	性	性	性	性	
t d g p	w	f	n	j	a	s	e	
■ ■ ■ 3 2 3	■ 2 2 (2)	■ 2 2 1	■ 1 3 3 3 - 1	■ 1 2	---	■ 2 8 -	■ 2 3 1	
簡略分級式	III p n e	II t g i s						

A 土壤区の特徴

この土壤区は川西南統に属する。表土の厚さは 1.6 cm 内外で、有効土層は 1 m 以上、表土は小角礫を含み、細粒質で粘着性中～弱で風乾土の硬さは強く、耕耘の困難な土壤で、侵蝕も受け易い。保水性は中庸であるが、下層土の透水性は小さい。

保肥力中、固定力小、下層土は強、酸性である。

作土は磷酸、加理、苦土等の有効態養分に不足しているが、弱酸性である。

特殊の障害性は存在しないが、地形は傾斜地が多く、侵蝕を強く受けている。

B 植生及び利用状況

緩傾斜地は耕地化され、主に馬鈴薯、えん麦、小豆を作付しているが、収量は低い。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は侵蝕を強く受け、表土が浅く、且つ下層に礫が多く堅密で、侵蝕を助長している。

従つて本土壤区では、保全耕作、堆肥施用、綠肥作物の導入によつて、表土の流亡を防ぐと共に積極的に地力の培養を図ることが必要である。

D 分 布 北海道士別市川西

記載責任者 野 村 球（北海道立中央農業試験場）

野 崎 輝 義（ “ 上川 “ ）

日 付 昭和45年3月31日

兼 内 南 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は、20cm内外で腐植含量3%、土性はCLである。土色は10YR、彩度3、明度2、円礫を含み、弱度の細粒状構造、ち密度8、下層との境界は判然としている。PH(H₂O)6.6である。

第2層は、20～60cmで、腐植を欠く、SL、土色10YRで彩度4、明度3、単一構造でち密度8で疎、PH(H₂O)6.8、調査時の湿り半乾。

第3層は60～65cm以下で礫層となつてゐる。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 士別市上士別 試抗№28

第1層	0～23cm	腐植を含む黄褐色(10YR3/2)のCL、不鮮明細粒状構造、ち密度8で疎、PH(H ₂ O)6.8、調査時の湿り乾、境界明瞭。
第2層	23～65cm	腐植を欠く黄褐色(10YR4/3)SL、単一構造、ち密度8、PH(H ₂ O)6.8、調査時の湿り半乾。
第3層	65cm以下	礫層となつてゐる。

土壤の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礦物質 重量 %	粒径組成 %				土性	現地 容積重 g/cm ³	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~23	2.1	/	14.0	46.8	20.6	18.6	CL	130.6	—	1.82	0.12	15.2	3.1
2	23~65	3.1	/	19.9	52.6	13.3	14.3	SL	139.2	—	1.43	0.20	7.2	2.5

層位	pH		置換酸度 Y _i	培養基 容重 me/100g	置換性塩基 me/100g			石鈣和度 %	磷酸吸收係数	有効態接酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	6.6	4.8	0.7	16.3	11.8	0.8	0.6	71.3	54.9	14.8
2	6.8	5.4	0.6	14.9	11.3	1.2	0.4	74.0	69.7	13.2

A - 2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては大英統があるが、堆積様式が異なるので区別される。

A - 3 母材 非固結水成岩

A - 4 堆積様式 沖積

B 地形 平坦地

C 気候 年平均気温 5.6 °C、年降水量 1,185 mm

D 植生及び利用状況 農耕地としてピート、小豆、馬鈴薯、アスパラ等があるが一部水稻も栽培されている。

E 農業上の留意事項

有機物の導入

F 分布 北海道士別市上士別

調査及び記載責任者 野村 球(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(" 上川 ")

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
兼内南統一兼内南区	II d (W)

② 土壤区別説明

兼内南統一兼内南区

B 植生及び利用状況

緩傾斜地は耕地化され、主に馬鈴薯、えん麦、小豆を作付しているが、収量は低い。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は侵蝕を強く受け、表土が浅く、且つ下層に礫が多く堅密で、侵蝕を助長している。

従つて本土壤区では、保全耕作、堆肥施用、綠肥作物の導入によって、表土の流亡を防ぐと共に積極的に地力の培養を図ることが必要である。

D 分布 北海道士別市川西

記載責任者 野 村 琥（北海道立中央農業試験場）

野 崎 輝 義（ “ 上川 ” ）

日 付 昭和 45 年 3 月 31 日

兼 内 南 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は、20cm内外で腐植含量3%、土性はCLである。土色は10YR、彩度3、明度2、円礫を含み、弱度の細粒状構造、ち密度8、下層との境界は判然としている。PH(H₂O) 6.6である。

第2層は、20～60cmで、腐植を欠く、SL、土色10YRで彩度4、明度3、单一構造でち密度8で疎、PH(H₂O) 6.8、調査時の湿り半乾。

第3層は60～65cm以下で礫層となつていて。

代 表 的 断 面 形 狀

(所在地) 士別市上士別 試抗 № 28

第1層	0～23cm	腐植を含む黄褐色(10YR3/2)のCL、不鮮明細粒状構造、ち密度8で疎、PH(H ₂ O) 6.8、調査時の湿り乾、境界明瞭。
第2層	23～65cm	腐植を欠く黄褐色(10YR4/3)SL、单一構造、ち密度8、PH(H ₂ O) 6.8、調査時の湿り半乾。
第3層	65cm以下	礫層となつていて。

土壤の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	総重量 g	粒径組成 %				土性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~23	2.1	/	14.0	46.8	20.6	18.6	CL	130.6	—	1.82	0.12	15.2	3.1
2	23~65	3.1	/	19.9	52.6	13.3	14.3	SL	139.2	—	1.43	0.20	7.2	2.5

層位	pH		置換酸度 Y _i	換置量 me/100g	置換性塩基 me/100g			饱和度 %	磷酸吸收係数	有効態磷 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	6.6	4.8	0.7	16.3	11.8	0.6	0.6	71.3	54.9	14.8
2	6.8	5.4	0.6	14.9	11.3	1.2	0.4	74.0	69.7	13.2

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては大英統があるが、堆積様式が異なるので区別される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 沖積

B 地形 平坦地

C 気候 年平均気温 5.6 °C、年降水量 1,185 mm

D 植生及び利用状況 農耕地としてビート、小豆、馬鈴薯、アスパラ等があるが一部水稻も栽培されている。

E 農業上の留意事項

有機物の導入

F 分布 北海道士別市上士別

調査及び記載責任者 野村 球(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(" 上川 ")

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
兼内南統一兼内南区	II d (W)

② 土壤区別説明

兼内南統一兼内南区

示性分級式(畳)

土表有表耕へへへ	土透保濕	自保固土	養置	障災	傾侵
壤土効土粋表表	然層分換	肥定の性	有微酸	有物害理	増地冠すべり
生の土の土士士	水水潤	性態量	害物的	自然斜為	自然傾斜
産厚層礫難のの	肥塩の石苦加鹽	害物質障害	地の害	傾の傾斜	耐水風度
力さの含易土粘風	肥塩の灰土里酸要	害の害	水の危険度	斜方斜向	耐蝕性
可能深量性着乾	肥力基灰土里酸要	害の有性無	度の危険度		
性等級	状態豊量	素度	度の危険度		
t d g p	w f n	i a s			e
II	I I I I 2 1 1 (II) 1 2 1	I 2 1 1	I 1 1 2 1 1 1	I 1 1 - - -	I 1 - - I 1 1 2
簡略分級式	II d (w)				

A 土壌区の特徴

この土壤区は兼内南統に属する。表土の厚さ 20 cm 内外、有効土層は 70 ~ 80 cm で中庸である。保水力は小さく、下層土の透水性は大きい。保肥力は中庸で、固定力は小さい。自然肥沃度は上位である。作土は苦土に稍欠乏している。特殊の障害性はない。地形は平坦で土壤侵蝕は認められない。

B 植生及び利用状況

農耕地でピート、小豆、馬鈴薯、燕麦、アスパラガス等であるが、一部水稻の栽培もされている。

C 地力保全上の問題点

保肥力、保水力の増大のため、有機物の導入が望まれる。

D 分 布 北海道士別市上士別

記載責任者 野 村 琥 (北海道立中央農業試験場)

野 崎 輝 義 (" 上川 ")

日 付 昭和 45 年 3 月 31 日

東山南統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~18cmで、腐植含量は3.4%、土性はLjCである。色は7.5YR~10YRで、彩度3、明度5である。未風化、風化、腐朽小円礫、小半角礫を含む。発達弱度の細粒状構造。ち密度は15~17。PH(H₂O)4.8前後。下層へは漸変する。

第2層は厚さ12~22cmで、腐植含量は1.5%、土性はLjCである。色は7.5YR~10YRで、彩度6、明度4~6、未風化、風化、腐朽小中円礫、角礫を含む。発達弱度の細塊状構造で、細孔を含む。ち密度は22~25。PH(H₂O)は4.6前後、下層へは漸変する。

第3層はおおむね27cm以下で、腐植含量は0.6%以下、土性はLjCである。色は7.5YR~10YRで、彩度8、明度5である。未風化、風化、腐朽細小中円、半角、角礫に富み~頗る富む。単位状で、ち密度は26~30、PH(H₂O)は4.5前後。

代表的断面形態

(所在地) 士別市川西 試抗N630

第1層	0~15cm	腐植を含む、灰褐(7.5YR 5/3)のLjC、発達弱度の細粒状構造、未風化、風化、腐朽小円礫、小半角礫を含む、ち密度17、PH(H ₂ O)4.8、調査時の湿めり乾、境界不規則漸変。
第2層	15~27cm	腐植を欠く、明褐(7.5YR 5/6)のLjC、発達弱度の細塊状構造、細孔を含む、未風化、風化、腐朽小中円礫、角礫を含む。ち密度25、PH(H ₂ O)4.6、調査時の湿めり半乾、境界波状漸変。
第3層	27~cm	腐植を欠く、明褐(7.5YR 5/8)のLjC、単位状構造、未風化、風化、腐朽細小中円、半角、角礫に富む、ち密度は26、PH(H ₂ O)は4.5前後。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 %	粒径組成 %				土性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~15	3.0		15.3	19.3	38.7	26.7	LjC	103	2.66	1.94	0.15	13	3.4
2	15~27	4.5		16.5	22.5	29.8	31.3	LjC	105	2.68	0.89	0.10	9	1.5
3	27~	5.5		17.1	23.0	25.1	34.9	LjC			0.35	0.07	5	0.6

層位	p H		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸收係数 mg/100g	有効態磷 mg/100g
	H ₂ O	KCL			CaO	MgO	K ₂ O			
1	4.8	4.2	13.1	17.2	5.3	0.3		31.0	637	
2	4.6	4.1	37.4	18.2	2.8	0.1		15.5	1,016	
3	4.5	4.0	66.1	14.2	2.0	0.3		13.8	1,346	

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては川西南統、川西北統、東山統があるが川西南統とは母材が異なるので、区分した。川西北統、東山統とは同母材であるが、本統は下層に礫層を有するため区分した。

A-3 母材 固結水成岩（砂礫層岩）

A-4 堆積様式 残積土

B 地形 標高130~200m、平均傾斜8度内外の波状性丘陵地。

C 気候 年平均気温5.6°C 年降水量1,185mm

D 植生及び利用状況 無んど耕地として利用されていない。

E 農業上の留意事項

土壤侵蝕が激しく、更に土壤の有機物にも乏しく、地力が低下しているので、保全耕作、綠肥導入の必要がある。

F 分布 北海道士別市川西

調査及び記載責任者 野 村 琥（北海道立中央農業試験場）

野 崎 輝 義（ “ 上川 ” ）

年 月 日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
東山南統一東山南区	IVi IIItdpne IIfs

② 土壤区別説明

東山南統一東山南区

示性分級式(畠)

A 土壤区の特徴

この土壤区は東山南統に属する。表土の厚さは15cm内外で、有効土層は40cm内外。表土は小円礫、小半角礫を含み、細粒質で、粘着性は弱く、侵蝕を受け易い。

下層(第3層)は石礫が多く、極めて堅密で、有効土層とは認められない点が障害になつてゐる。保肥力中、固定力ごく小、下層十は強酸性である。

作土は磷酸、カリなどの有効態養分には富んでいるが、苦土は少なく、強酸性である。地形は傾斜が強く、侵蝕を強く受けている。

B 植生及び利用状況

大部分農耕地として利用されており、主要作物は馬鈴薯、燕麦、小豆等であるが、収量は極めて低い。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は侵蝕を強く受け、表土が浅く、且つ下層に疊が多く堅密で、有效土層の浅い事が制

限因子となつてゐる。更に表土に腐植の少ない事も地力の低い一因になつてゐる。従つて本土壤区では保全耕作、堆肥施用、綠肥作物の導入によつて、表土の流亡を防ぐと共に、地力の培養を図ることが必要である。

D 分 布 北海道士別市川西

記載責任者 野 村 球(北海道立中央農業試験場)

野 崎 輝 義(" 上川 ")

日 付 昭和45年3月31日

川 西 北 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~30cm、腐植含量は4.2%、土性はLjCである。色は7.5YR~10YRで、彩度3~6、明度3~4、風化、腐朽小円、半角、角礫を含むが、未風化、風化、腐朽大中小細円、半角、角礫に富む処もある。一般に細粒状構造で、粒状構造の処もある。発達は弱程度、ち密度は1.0~2.0、PH(H₂O)は4.8前後。

第2層は厚さ15~40cmで、腐植含量は2.6%、土性はLjCである。色は7.5YR~10YR、彩度3~8、明度3~7、未風化、風化、腐朽細小中円礫、角礫、半角礫を含む~富む。発達弱度の粒状~細粒状構造の処が多いが、発達弱度の細塊状構造、更に連結状の処もある。細小孔はあるが、一部には富む処もある。ち密度は1.5~2.7。PH(H₂O)は4.7前後。

第3層はおおむね40cm以下で、腐植含量は2.6%以下、土性はLjCである。色は5YR~10YRで、彩度4~8、明度4~7である。未風化、風化、腐朽細小中円礫、半角礫、角礫を含む。一部には礫に富む処もある。細塊状(角塊状)構造を呈する処も多いが、連結状の処もある。ち密度は2.0~2.8である。PH(H₂O)は4.7前後。

代表的断面形態

(所在地) 士別市川西 試抗M6.20

第1層	0~18cm	腐植を含む。褐(7.5YR 4/3)のLjC、発達弱度の粒状構造、風化、腐朽小円礫、半角礫、角礫を含む、ち密度1.7、PH(H ₂ O)4.8、調査時の湿めり乾、境界波状漸変。
-----	--------	---

第2層	18～50cm	腐植を含む。灰褐(7.5 Y R 5/4)のLiC、発達弱度の粒状構造と連結状との混合、細小孔あり、未風化、風化、腐朽細小中円礫、半角礫、角礫を含む。ち密度2.0、PH(H ₂ O)4.7、調査時の湿めり半乾、境界波状漸変。
第3層	50cm以下	腐植を含む。明褐(7.5 Y R 5/6)のLiC、角塊状構造、細孔あり、未風化、風化、腐朽細小中円礫、半角礫、角礫を含む。ち密度2.2、PH(H ₂ O)4.7、調査時の湿めり湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水 分 %	礫 含 量 %	粒径組成 %				土性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0～18	4.1	—	13.5	18.4	35.1	33.1	LiC	102	2.59	2.44	0.26	9	4.2
2	18～50	5.2	—	14.0	15.2	38.6	32.1	LiC	105	2.69	1.52	0.17	9	2.6
3	50	5.8	—	5.6	22.9	40.7	30.8	LiC			1.50	0.18	8	2.6

層位	p H		置換酸度 Y 1	塩基 置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石 灰 飽 和 度 %	磷 酸 吸收係数 mg/100g	有効態磷 酸
	H ₂ O	KCL			CaO	MgO	K ₂ O			
1	4.8	4.3	10.2	22.3	7.2	0.8		33.5	1,018	
2	4.7	4.2	28.2	21.6	3.3	0.3		15.3	1,538	
3	4.7	4.2	52.5	25.5	2.7	0.1		10.4	1,482	

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては東山南統と川西南統があるが夫々堆積様式、母材等が異なるので区別される。

A-3 母材 固結水成岩(砂礫層岩)

A-4 堆積様式 残積土

B 地形 標高は130～240mで、平均傾斜8度内外の波状性台地及び丘陵地である。

C 気候 年平均気温5.6°C 年降水量1,185mm

D 植生及び利用状況 沢に面した急傾斜地を除き殆んど耕地化されている。

E 農業上の留意事項

全般に土壤の腐植に乏しいので、堆肥施用、緑肥作物の導入を図る事が必要である。更に侵蝕

を受け易いので、保全耕作も必要である。

F 分 布 北海道士別市

調査及び記載責任者 野 村 琥（北海道立中央農業試験場）

野崎輝義（　　”上川　　”）

年 月 日 昭和 45 年 3 月 31 日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覽

土壤区名	簡略分級式
川西北统一川西北区	I p n s e I t g f i

② 土壤區別說明

川西北統一川西北区

示性分級式(烟)

A 土壤区の特徴

この土壤区は川西北統に属する。表土の厚さは18cm内外で、有効土層は1m以上。表土は風化、腐朽の小円、半角、角礫を含み、細粒質であるが粘性は弱く、侵蝕を受け易い。

下層には未風化、風化、腐朽小中円礫、半角礫、角礫を含み、堅密である。

保肥力中、固定力小、下層土は強酸性で、自然肥沃度は中位である。

作土は磷酸、加里、苦土などの有効態養分は中庸であるが、強酸性である。特殊の障害性は存在しないが、地形は傾斜地が多く、侵蝕を受け易い。

B 植生及び利用状況

殆んど耕地として利用され馬鈴薯、燕麦、小豆、菜豆、ピート等を作付しているが、収量は低い。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は表土の腐植に乏しく、且つ地力が低く、更に下層は堅密なため、表土の侵蝕を助長している。従つて本地区では堆厩肥の施用、綠肥作物の導入を図り、地力を培養する事が必要である。侵蝕防止のため、保全耕作も必要である。

D 分 布 北海道士別市川西

記載責任者 野 村 球(北海道立中央農業試験場)

野 崎 輝 義(〃 上川 〃)

日 付 昭和45年3月31日

東 山 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~23cm、腐植含量は3.8%、土性はL i Cである。色は7.5 Y R ~ 10 Y Rで、彩度2~3、明度4~5である。礫は殆んど見られないが、稀に未風化細円礫、半角礫を含む。発達弱度の細粒状構造、ち密度は12~15、P H (H₂O)は4.9前後。下層へはおおむね漸変する。

第2層は厚さ18~35cmで、腐植含量は2.8%、土性はL i Cである。色は7.5 Y R ~ 10 Y Rで、彩度4、明度5である。腐朽細円礫を含むが、殆んど礫のない処が多い。発達弱度の細粒状構造と細塊状構造、若しくは連結状との混合である。細小孔を含む。ち密度22~25。P H (H₂O)は4.6前後。下層へは漸変する。

第3層はおおむね55cm以下で、腐植含量は0.6%以下、土性はS C Lである。色は7.5 Y R ~ 10 Y Rで彩度7~8、明度5である。未風化細円礫に富むが、腐朽細円礫を含む処もある。発達弱度の塊状構造と連結状の混合で、細小孔あり、ち密度は22~28、P H (H₂O)は4.8前後。

代表的断面形態

(所在地) 士別市川西 試抗 A6.3.5

第1層	0~23cm	腐植を含む、灰黄褐(10YR 4/3)のLjC、発達弱度の細粒状構造、礫は殆んどなし、ち密度1.5、PH(H ₂ O)4.9、調査時の湿めり乾、境界波状漸変。
第2層	23~55cm	腐植を含む、灰黄褐(10YR 5/4)のLjC、発達弱度の細粒状構造と連結状の混合細小孔を含む、腐朽細円礫を含む、ち密度2.5、PH(H ₂ O)4.6、調査時の湿めり半乾、境界波状漸変。
第3層	55~cm	腐植を欠く、黄褐(10YR 5/8)のSCL、発達弱度の塊状構造と連結状の混合、未風化小円礫に富む、ち密度は2.2、PH(H ₂ O)は4.8前後

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重 量 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~23	3.9	—	2.7	19.7	41.4	36.9	LjC	103	2.55	2.19	0.23	1.0	3.8
2	23~55	4.3	—	6.8	19.0	35.3	39.0	LjC	131	2.58	1.63	0.23	7	2.8
3	55~	3.8	—	34.5	33.2	15.5	16.8	LjC	—	—	0.36	0.06	6	0.6

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸收係数 mg/100g	有効態磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	4.9	4.3	11.3	22.6	7.3	1.3		32.2	791	—
2	4.6	4.1	40.7	21.7	3.2	0.8		14.7	1103	—
3	4.8	4.1	42.2	16.3	1.6	0.4		9.6	835	—

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては東山南統、川西北統があるが夫々堆積様式、母材ともに同様であるが、礫が殆んどないのと下層の土性が異なるので区分した。

A-3 母材 固結水成岩(砂礫層岩)

A-4 堆積様式 残積土

B 地 形 標高は130～200mで、平均傾斜6度内外の波状台地である。

C 气候 年平均气温 5.6°C 年降水量 1,185 mm

D 植生及び利用状況 1部耕地化されているが、大部分は未耕地である。最近草地造成が行なわれた処もある。

E 農業上の留意事項

耕地化された処は、土壤侵蝕が激しく、更に全般的に腐植に乏しく、地力が低いので、保全耕作、堆肥施用、緑肥導入の必要がある。

F 分 布 北海道士別市川西

調査及び記載責任者 野 村 球(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義（“上川”）

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覽

土壤区名	簡略分級式
東山統一東山区	III p n e II t f i s

② 土壤区別説明

東山統一東山区

示性分級式(畠)

土壤	表土	透湿性	自然保土層	養分置換性	有機酸	障害	災害	傾斜	侵蝕
生産力	土の厚層	地の水潤性	土の肥定性	土の鹽基性	土の苦加磷量	土の害物質	冠水の物理的障害	地すべりの傾斜度	(耐風蝕性)
可能性	の難易	の含水量	の肥力	の塩基力	の加磷量	の害物質	の物理的障害	の傾斜方向	(耐水蝕性)
等級	の含水量	の性状	の肥力	の灰土里酸要	の有無	の害物質	の危險度	の傾斜度	(耐風蝕性)
	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ	さ
	t d g p	w	f	n	j	a	s	e	
III	3 2 3	1 2 (2)	2 2 2	2 1 3 3 - 3	1 2 - - -	2 S -	3 3 1		
	簡略分級式	III p n e	II t f i s						

A 土壤区の特徴

この土壤区は東山系に属する。表土の厚さは20cm内外で、有効土層は1m以上。表土は礫の含まない細粒質で、粘着性中、2層以下は極めて堅密で、表土の侵蝕を助長している。保肥力中、固定力、下層土は強酸性で、自然肥沃度は中位である。作土は苦土、石灰はやゝ多いが、磷酸、カリに不足して強酸性である。

地形は傾斜が強く、侵蝕を受けている。

B 植生及び利用状況

一部は耕地化され、更に草地造成された処もあるが、大部分は未耕地である。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は表土の腐植に乏しく、更に下層が堅密で、表土の侵蝕を助長している。

従つて本区では、堆厩肥の施用、綠肥作物の導入を図り、地力を培養する事が必要である。侵蝕防止のため、保全耕作も必要である。

D 分 布 北海道士別市川西

記載責任者 野 村 球（北海道立中央農業試験場）

野 崎 輝 義（　　上川　　）

日 付 昭和45年3月31日

川 西 中 央 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15～30cm、腐植含量は4.3%、土性はL i Cである。色は2.5 Y R～5 Yで、彩度2～4、明度3～4である。未風化、風化、腐朽細小円礫、半角礫、角礫に富む。発達中度の細粒状構造、ち密度は15～18、PH(H₂O)は7.0前後、下層へはおおむね漸変する。

第2層は厚さ18～20cmで、腐植含量は1.5%、土性はL i Cである。色は2.5 Y～5 Yで、彩度2～6、明度4～7である。本層に酸化沈積物(膜状)が含む～富む処もある。未風化、風化、腐朽中小半角礫、角礫、円礫に富む。発達弱度の細塊状構造と連結状の混合で、細小孔あり、ち密度は20、PH(H₂O)は4.7前後、下層へは漸変する。

第3層はおおむね30cm以下で、腐植含量は0.6%以下、土性はL i Cである。色は2.5～5 Yで、彩度2、明度6～7である。未風化細小円礫に富み、風化、腐朽中小半角礫、角礫も含まれる。

発達弱度の細塊状構造もあるが、殆んどは連結状で、細小孔はある。酸化沈積物(膜状)に富む処が多い。ち密度は25~27、PH(H₂O)は4.6前後。

代表的断面形態

(所在地) 士別市川西 試抗№17

第1層	0~15cm	腐植を含む、黒褐(2.5Y3/4)のLjC、発達中度の細粒状構造、風化、未風化、腐朽細小円礫、半角礫、角礫に富む。ち密度15、PH(H ₂ O)7.0、調査時の湿り半乾、波状漸変。
第2層	15~30cm	腐植を欠く、暗黄褐(2.5Y4/6)のLjC、発達弱度の細塊状構造と連結状の混合、細孔あり、未風化、風化、腐朽細小円礫、半角礫、角礫に富む、ち密度20、PH(H ₂ O)4.7、調査時の湿り半湿、境界波状漸変。
第3層	30cm以下	腐植を欠く、黄褐灰(2.5Y6/2)LjC、発達弱度の細塊状構造と連結状の混合、細孔あり、未風化細小円礫に富み、腐朽小中礫も含む、ち密度25、PH(H ₂ O)4.6、調査時の湿り半湿~湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水位 %	礫含量 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~15	4.3		15.1	17.6	36.7	30.6	LjC	106	2.65	2.51	0.19	1.3	4.3
2	15~30	5.3		13.7	18.4	38.3	29.7	LjC	126	2.64	0.86	0.11	8	1.5
3	30~	5.4		10.5	23.7	40.1	25.7	LjC	—	—	0.36	0.07	5	0.6

層位	pH		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸收係数 mg/100g	有効態磷 酸 mg/100g
	H ₂ O	KCL			CaO	MgO	K ₂ O			
1	7.0	6.5	0.1	24.2	18.4	0.4		75.9	1,000	
2	4.7	4.3	33.0	21.6	5.0	0.4		23.3	1,154	
3	4.6	4.2	50.9	19.9	3.4	0.4		17.1	1,044	

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては川西北統、川西南統中士別統、東山南統があるが、母材、堆積様式、色層序、酸化沈積物等が夫々異なるので区別される。

A-3 母材 固結水成岩(砂砾層岩)

A - 4 堆積樣式 残積土

B 地形 標高200m内外、平均傾斜6度内外の台地

C 气候 年平均气温 5.6°C 年降水量1,185mm

D 植生及び利用状況 耕地化されている処と、薪炭林等の附帯地が同じ面積位である。

E 農業上の留意事項

全般的に腐植に乏しく、地力が低下し、且つ下層が堅密で、排水も不良であるので、堆肥施用
緑肥作物の導入で地力の培養を図り、更に排水も必要と考えられる。

F 分 布 北海道士別市川西

調査及び記載責任者 野 村 琥(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義（　　“上川”　　）

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覽

土壤区名	簡略分級式
川西中央統一川西中央区	Ⅲtpne Ⅱgwfis

② 土壤区別説明

川西中央統一川西中央区

示性分級式(烟)

土壤生産力可能性等級	表有耕 土効土耘表表 の土の土土 厚層礫難のの さ深量性着乾 さ	土透保濕 地水水潤 肥定の肥 力基力 硬さ)	自保固土 層分 塩性 力基 沃	養置換 性肥定 石苦加 灰土里酸 含量	障有微酸 効性 燃要 害素度	傾自然傾 斜方向	侵地すべ りの危險 度)
	t d g p	w	f	n	i	a	s
Ⅲ	Ⅲ 3 1 3	Ⅱ 2 2 1	Ⅱ 2 2 2	Ⅲ 1 3 2 1 - 1	Ⅱ 1 2 - - -	Ⅱ 2 S -	Ⅲ 3 3 1
簡略分級式	Ⅲ t p n e	Ⅱ g w f i s					

A 土壤区の特徴

この土壤区は川西中央統に属する。表土の厚さは15cm内外で、有効土層は1m以上。表土は風化、未風化、腐朽細小円礫、半角礫、角礫に富み、細粒質で、粘着性は弱く、浸蝕を受け易い。下層は未風化細小円礫に富み、堅密で、排水が悪く、酸化沈積物が見られる。保肥力中、固定力小、下層土は強酸性で、自然肥沃度は中位である。

作土は磷酸、カリなどの有効態養分に富んでいるが、やや苦土が足りない。

特殊な障害性は存在しないが、表土は浅く、腐植も乏しく、下層の排水の悪い点が、地力の低い原因になっている。

B 植生及び利用状況

耕地と附帯地が同面積位で、耕地には野菜、トウキビ、牧草等が栽培されているが収量は低い。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は作土が浅く、更に下層が堅密で、排水が悪い事が制限因子になつてゐる。

従つて本区では、排水の施行、堆厩肥施用、綠肥作物の導入と共に徐々に深耕する事が必要であろう。

D 分 布

北海道士別市川西

記載責任者 野 村 琥（北海道立中央農業試験場）

野 崎 輝 義（ “ 上川 ” ）

日 付 昭和45年3月31日

中 土 別 統

(1) 土壤統の概要

A、土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ 20cm、腐植含量は 5.5%、土性は Li C である。色は 7.5 Y R で、彩度 2、明度 4 である。風化小円礫を含み、発達弱度の細粒状構造、ち密度は 12、PH (H₂O) は 5.3、下広との境界はやゝ明瞭。

第2層は厚さ 30cm で、腐植含量は 3.6%、土性は Li C である。色は 7.5 Y R で、彩度 4、明度 4 である。未風化細小円礫あり、発達中度の細粒状構造で、細小孔あり。ち密度は 17、PH (H₂O) は 5.1 前後、下層へは漸変する。

第3層は 50cm 以下で、腐植含量は 0.9% 以下、土性は Li C である。色は 7.5 Y R で、彩度 3、明度 4 である。未風化細小円礫に富む～頗る富む。単粒状、ち密度は 26 で密、PH (H₂O) 5.3 前後である。

代表的断面形態

(所在地) 士別市川西 試抗 No. 32

第1層	0～20cm	腐植に富む、褐灰(7.5 Y R 4/2)のLi C、発達弱度の細粒状構造、風化小円礫を含む。ち密度 12、PH (H ₂ O) 5.3 調査時の湿り半乾、境界波状やゝ明瞭。
第2層	20～50cm	腐植を含む、褐(7.5 Y R 4/4)のLi C 発達中度の細粒状構造細小孔あり、未風化細小円礫を含む。ち密度 17、PH (H ₂ O) は 5.1 前後、調査時の湿り半乾、境界波状漸変。
第3層	50cm 以下	腐植を欠く、褐(7.5 Y R 4/3)のLi C、単粒状、未風化細小円礫に富む～頗る富む。ち密度は 26 で密、PH (H ₂ O) は 5.3 前後。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分%	礫含量 重量%	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0～20	3.7		9.3	20.2	34.8	35.8	Li C	103	2.61	3.18	0.36	9	5.5
2	20～50	3.4		6.7	22.8	35.2	35.3	Li C	111	2.58	2.06	0.26	8	3.6
3	50～	2.2		9.9	26.9	30.7	32.4	Li C				0.11	5	0.9

層位	P H		置換酸度 Y I	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 me/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	5.3	4.6	1.8	24.1	10.5	0.9		43.7	795	
2	5.1	4.3	10.0	19.1	7.0	0.4		36.5	1010	
3	5.3	4.5	8.2	9.3	0.9	0.3		9.7	847	

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては、川西北統、東山統、川西南統、東山南統とがあるが夫々推積様式、母材、腐植層序等が異なるので区別される。

A-3 母材 固結水成岩(砂岩)

A-4 推積様式 沖積世推積

B 地形 標高 150m の平坦地である。

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 殆んど耕地化されている。

E 農業上の留意事項 特にないが、堆肥施用、多肥栽培が望ましい。

F 分布 北海道士別市川西

調査及び記載責任者 野村琥(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(" 上川 ")

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
中土別統—中土別統	I II t g p f

② 土壤区別説明

中土別統—中土別区

示性分級式(畳)

土表有表耕	土表地透保濕自然保	養土分置有微酸障	災增冠水害	傾地自然人侵耐水風蝕
壤土効土耘	表表地肥層の換	困土分置" "効	理害物的害	斜為
生の土の土の土の	肥層の換	肥定の豊性	害物的害	侵蝕性
産層礫難の乾水水潤沃肥定	度	性量	水の害	性
力さの含易十粘風湿	度	塙否石苦加燃	質障の危	侵蝕度
可能深量性着乾性度	力力基	灰土里酸要	害の危	度
性等t d g p	性土	状含" " "	性有性度	斜
等の硬w	態n	素度i	無度a	斜
級	()))
III 3 1 3 1 2 (2) 2 2 2 III 1 1 3 2 - 1, 1 1 - - - 1 - - 1 2 1				
簡略分級式 III n t g p f				

A 土壌区の特徴

この土壤区は中土別統に属する。表土の厚さ20cm内外、有効土層は1m以上、表土に風化小円礫を含む細粒質で、粘着性は弱、2層は未風化細小円礫あり、中程度に発達した細粒状構造で、透水性大、理学性は良好と考えられる。3層は未風化細円礫に富み、堅密であるが、植生に悪影響を及ぼす事はない。保肥力中、固定力小、下層土は強酸性で、自然肥沃度は中庸である。作土は磷酸、苦土等の有効態養分に富んでいるが、加里が不足している。地形は平地で、侵蝕はない。

B 植生及び利用状況

殆んど耕地化され、馬鈴薯、燕麦、小豆、ピート、牧草等が作付され、水稻も一部栽培されている。

C 地力保全上の問題点

特記する事はないが、堆厩肥施用、多肥栽培が望ましい。

D 分布

北海道士別市川西

記載責任者 野 村 豊 (北海道立中央農業試験場)

野 崎 煉 義 (" 上川 ")

日 付 昭和45年3月31日

北 武 德 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ 14cm、腐植含量は 5.1%、土性は Li C である。色は 2.5 Y R、彩度 2、明度 4 である。半風化の小円、半角礫を含み、発達弱度の細粒状構造を呈す。ち密度 11で疎である。

pH (H₂O) は 4.9 前後。下層への境界は波状明瞭である。

第2層は厚さ 18cm、腐植含量は 2.4%、土性は HC である。色は 2.5 Y R、彩度 4、明度 4 である。未風化、半風化の小中円礫、半角礫を含み、発達中度の細塊状構造を呈し、細小孔を含む。ち密度 20で中、pH (H₂O) は 4.3 前後。

第3層はおおむね 32cm 以下で、腐植含量は 2% 以下、土性は HC である。色は 10 R、彩度 4、明度 4 である。未風化、半風化の小中円礫を含み、均質連絡状を呈し、細小孔を含む。ち密度 23 で中。pH (H₂O) は 4.7 前後。

代表的断面形態

(所在地) 士別市武徳 試坑 No.3 1

第1層	0 ~ 14cm	腐植に富む暗赤褐(2.5 Y R 4/2)のLi C、半風化の小円半角礫を含み、発達弱度の細粒状構造、ち密度 11で疎 pH (H ₂ O) 4.9 前後、調査時の湿り半乾、境界は波状明瞭。
第2層	14 ~ 32cm	腐植を含む暗赤褐(2.5 Y R 4/4)のHC、未風化、半風化の小中円礫半角礫を含み、発達中度の細塊構造を呈す。細小孔含む。ち密度 20で中、pH (H ₂ O) は 4.3 前後、調査時の湿り半乾、境界は不規則漸変。
第3層	32cm ~	腐植を欠く灰赤褐(10 R 4/4)のHC、赤風化、半風化の小中円礫を含み、均質連結状、細小孔を含む。ち密度 23 で中、pH (H ₂ O) 4.7 前後、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	腐植量 重量%	粒径組成 %				土性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~14	5.1		3.6	16.6	38.7	41.1	Li C	110.2	2.79	2.96	0.32	9	5.1
2	14~32	8.9		3.4	25.5	21.3	49.7	HC	94.2	2.73	1.38	0.21	7	2.4
3	32~	9.6		3.7	27.4	13.6	55.2	HC	104.2	2.90	1.07	0.15	7	1.9

層位	p H		置換酸度 Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石飽和度 %	磷酸吸收係数	有効態磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	4.9	3.7	20.8	17.9	5.9	1.2	0.6	32.9	940	10.0
2	4.3	3.6	69.7	22.6	2.8	1.5	0.6	12.4	1,488	tr
3	4.7	3.6	69.2	22.6	1.7	1.4	1.1	7.4	1,595	tr

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては東陽統があるが、腐植層序、母材等が異なるので区別される。

A-3 母材 固結火成岩(集塊岩)

A-4 堆積様式 残 積

B 地形 標高190~290m、傾斜4度内外の丘陵地

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 大部分を占める急斜地は林地になり、傾斜の比較的緩やかな一部を耕地に利用しているにすぎない。主作物は、馬鈴薯、えん麦、牧草である。

E 農業上の留意事項 全般的に傾斜度が強く、且つ土壤の粘着性中~弱で土壤侵蝕が激しい。保全耕作(等高線栽培、緑作帯設置)が必要である。

F 分布 北海道士別市武徳

調査及び記載責任者 野村 琥(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(" 上川 ")

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
北武徳統-北武徳区	I tfn II pse

② 土壤区別説明

北武徳統 - 北武徳区

示性分級式(烟)

A 土壤区の特徴

この土壤区は、北武徳統に属する。表土の厚さは14cm内外で薄く、有効土層は1m以上で深い。表土は小円、半角礫を含み、細粒質で、粘着性中、保水性中、下層の透水性は小。保肥力中、固定力少、強酸性を呈し、自然肥沃度は低い。磷酸が多いが、石灰、苦土の成分含量が低い。特殊の障害性はないが、土壤侵蝕のため地力低下しやすい。

B 植生及び利用状況

緩傾斜地で耕作が行われ、急傾斜地は林地、草地になつている。

C 地力保全上の問題点

C 地力保全上の問題点 急傾斜地が多く、粘着性も弱いこと、相挨拶て土壤侵蝕の激しいことが問題点である。更に腐植含量低く、保肥力も高くないため地力が低下し易い土壤である。従つて、等高線栽培、縁作帯の設置、綠肥作物の導入によって、地力の保全を図ることが必要である。

D 分 布

北海道士別市武德

記載責任者

野 村 琥 (北海道立中央農業試験場)

野崎輝義（“上川”）

日付

昭和45年3月31日

東 陽 統

(1) 土壌統の概要

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ 15~33cm、腐植含量は3.4~3.8%、土性はLiCである。色は5~10YR 彩度3~4 明度3~4である。未風化、半風化の小円礫を含み、発達中度の細粒状構造と粒状構造の複合構造、ち密度8~17ですこぶる疎~疎である。PH(H₂O)は5.2前後。下層への境界は波状明瞭である。

第2層は厚さ 11~31cm、腐植含量は1.3~2.1%、土性はSiC~LiCである。色は5~10YR、彩度3~6、明度4~5である。未風化の小中円礫を含み、発達弱度の細塊状~塊状構造で、細孔を含む。ち密度19~23で中。PH(H₂O)は4.5~5.3。下層への境界は不規則漸変である。

第3層は厚さ 10~19cm、腐植含量は2%以下、土性はLiC-HCである。色は5~10YR、彩度4~8、明度4~7である。未風化、半風化の小中円礫を含み、発達弱度塊状構造を呈し、細小孔を含む。ち密度18~25で中~密。PH(H₂O)は4.8~5.0。下層への境界は不規則漸変である。

第4層はおおむね 50cm内外以下で、腐植含量は2%以下、土性はHC細粒質である。色は5~10YR、彩度6~8、明度5である。未風化の小円礫を含み、発達中度の塊状構造を呈し、細孔を含む。ち密度20~27で中~密。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 北海道士別市武徳 試抗 №29

第1層	0~20cm	腐植を含む暗褐(10YR 3/3)のLiC、半風化の小円礫を含み、発達中度の細粒状構造と粒状構造の複合構造、ち密度11で疎、PH(H ₂ O)6.7前後、調査時の湿めり半乾、境界は波状明瞭。
第2層	20~31cm	腐植を含む灰黃褐(10YR 4/3)のSiC、発達弱度の細塊状構造、細孔を含む、ち密度21で中、PH(H ₂ O)4.5調査時の湿めり半乾、境界は不規則漸変。

第3層	31~50cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR5/4)のHC、未風化小円礫を含み、発達弱度の塊状構造、細小孔を含む。ち密度25で密、PH(H ₂ O)5.0、調査時の湿めり半乾、境界は不規則漸変。
第4層	50cm ~	腐植を欠く黃褐(10YR5/8)HCの細粒質、未風化小円礫および腐植朽礫を含み、角塊状構造を呈す。ち密度26で密。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重量 %	粒径組成 %				土性	現地 容積 g	真比重	全炭素	全窒素	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~20	4.0		4.4	16.8	33.9	44.8	LiC	935	2.67	2.20	0.30	7	3.8
2	20~31	4.1		3.4	12.6	48.0	36.0	SiC	1240	2.72	1.23	0.20	6	2.1
3	31~50	4.4		5.6	17.8	30.1	46.6	HC	1430	2.88	0.83	0.14	6	1.4

層位	pH		置換酸度 Y1	塩基 置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰 飽和度 %	磷酸 吸収係数 me/100g	有効 態磷酸 me/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	6.7	6.5	0.5	19.3	14.4	1.7	0.4	74.6	1,293	1.0
2	4.5	4.1	9.9	11.6	4.5	0.5	0.2	39.0	821	tr
3	5.0	3.9	31.8	12.0	1.7	0.5	0.2	13.8	804	tr

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては北武徳統があるが母材の相違により区別される。

A-3 母材 固結水成岩(砂礫層)

A-4 堆積様式 残 積

B 地形 標高150~200m、傾斜3~10度の波状性丘陵地

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 緩傾斜地で耕作を行つてゐるが、傾斜10度以上の急傾斜地は林地になつてゐる。主作物は、馬鈴薯、えん麦、小麦、除虫菊である。

E 農業上の留意事項 全般的に傾斜強く且つ礫を含む堅密な土壤で、腐植含量少なく、生産力は低い。従つて保全耕作(等高線栽培、緑作帯設置)有機物施用(堆厩肥、綠肥作物の導入)により地力の培養を図ることが必要である。

F 分 布 北海道士別市武徳東陽

調査及び記載責任者 野 村 琥 (北海道立中央農業試験場)

野 崎 輝 義 (" 上川 ")

年 月 日 昭和 45 年 3 月 31 日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
東陽統 - 1 区	III n t g p f s e

② 土壌区別説明

東 陽 統 - 1 区

示性分級式(畳)

土表有耕	土表透湿	自然保固	養分置換	有微酸	障害	災害	傾傾	侵侵耐
土壤土効	表地保肥	固層の換	置換の効	酸の物理的	害物の水害	冠水の傾斜	自然の傾斜	風侵耐
生の土の土の	肥の水の潤沃	肥定の豊性	量の量	害物の害	害物の害	傾斜の傾斜	自然の傾斜	水風侵耐
産厚層礫難の土の	乾水水の肥度	肥定の性質	量の性質	害物の害	害物の害	傾斜の傾斜	自然の傾斜	風侵耐
力さの含易土の	粘風濕度	度の度	度の度	害物の害	害物の害	傾斜の傾斜	自然の傾斜	風侵耐
可深量性着	性着乾	性度	性度	害物の害	害物の害	傾斜の傾斜	自然の傾斜	風侵耐
能さ	性土	性度	性度	害物の害	害物の害	傾斜の傾斜	自然の傾斜	風侵耐
性等級	硬さ	状態	含量	素度	性度	危險度	危險度	危險度
t d g p	w	f	n	i	Q	s	e	
III I 3 2 2	I 2 2 1	2 2 2	II 2 1 1 3 - 2	I 1 1 --	-- 2 --	2 2 1		
簡 略 分 級 式 III n t g p f s e								

A 土壌区の特徴

この土壌区は東陽統に属する。表土の厚さは 20cm 内外。有効土層は 1m 以上で深い。表土は小円礫を含み、細粒質で、粘着性中、保水性、透水性中、下層も小円礫を含み、堅密で、透水性中。保肥力中、固定力小、弱酸性で、自然肥沃度中である。

養肥分としては苦土、加里に富むが、石灰、磷酸が少ない。

特殊の障害はないが、侵蝕のため地力が低い。

B 植生及び利用状況 緩傾斜地で耕作が行われ、急傾斜地は林地になつてゐる。

C 地力保全上の問題点 腐植含量少なく、養肥分の保持力弱く、酸性も強く、生産力低いことが問題である。更に土壌侵蝕も強く受けている。従つて等高線栽培、綠作帶の設置、綠肥作物の導入、堆肥の多肥によつて地力の培養を図ることが必要である。

D 分 布 北海道士別市武徳

記載責任者 野 村 琥 (北海道立中央農業試験場)

野崎輝義（〃上川〃）

日付 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覽

土壤区名	簡略分級式
東陽統一2区	Ⅲ n s t g p f e

② 土壤區別說明

東陽統一2区

示性分級式(畠)

侵 蝕	侵 耐	風 蝕	侵 耐	風 蝕	侵 耐	風 蝕
(自然傾斜)	(人為傾斜)	(自然傾斜)	(地すべりの危険度)	(増冠水の危険度)	(物理的障害性)	(有害物質の有無)
傾 斜	傾 斜	傾 斜	傾 斜	傾 斜	傾 斜	傾 斜
s	a	i	n	f	d	t
e						
II II I II II 3 2 2 2 2 1 2 1 1 III 1 1 2 3 - 2 1 1 --- II 3 --- II 2 2 1						
簡略分級式	ns	t g p f e				

A 土壤区の特徴

この土壤区は、東陽統に属する。前東陽1区に比し傾斜強く、且つ礫も多く、腐植の含量少ないため区別した。

表土の厚さは2-3cm、有効土層は1m以上。未風化の小中円礫を含み、細粒質で、粘着性弱、腐植含量も低い。

保肥力中、固定力ごく少、弱酸性を呈し、自然肥沃度は中である。

養肥分は石灰、苦土多いが、カリ、磷酸が少ない。

特殊の障害性は少ないが、傾斜強く、一層侵蝕をうけ、腐植含量も少なく、下層の礫多く生产力低い。

B 植生及び利用状況

になつてゐる。

C 地力保全上の問題点

相俟つて土壤侵食を受け易い。従つて等高線栽培、緑作帯設置、綠肥作物の導入、堆肥の多

肥よつて侵蝕を防ぎ、地力の培養を図ることが必要である。

D 分 布 北海道士別市東陽

記載責任者 野 村 球(北海道立中央農業試験場)

野 崎 峰 義(" 上川 ")

日 付 昭和45年3月31日

東 多 寄 統

(1) 土壤統の概要

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ13~22cm、腐植含量は3.8~5.6%、土性はSiC~HCである。色は2.5~5Y、彩度2~4、明度3~4である。礫なく、発達弱度の細粒状構造を呈す。ち密度8~17ですこぶる疎~疎である。pH(H₂O)は4.5~5.6。下層への境界は波状やや明瞭である。

第2層は厚さ12~28cm、腐植含量は2.0~2.5%、土性はSiC~HCである。色は2.5~5Y、彩度2~6、明度5~7である。礫なく、発達中度の細粒状構造~塊状構造(角塊状)を呈し、細小孔を含む。ち密度1.5~2.4で疎~中である。pH(H₂O)は4.6~5.1。下層への境界は不規則漸変である。

第3層はおおむね37cm内外以下で、腐植含量は2%以下、土性はHCである。色は2.5~7.5Y、彩度1~2、明度7~8である。礫なく、発達弱度の塊状構造、もしくは均質連結状(柱状構造になりつつある)で細小孔を含む。ち密度1.8~2.6で中~密である。排水悪く、湿性を呈し、斑状、脈状の酸化沈積物を含む。pH(H₂O)は4.3~5.0。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 土別市多寄 試坑16.2.5

第1層	0~20cm	腐植に富む黒褐(2.5Y3/4)のSiC、礫なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.4で中、pH(H ₂ O)4.5前後、調査時の湿めり半乾、境界は波状やや明瞭。
第2層	20~37cm	腐植を欠く黄褐(2.5Y5/6)のHC、礫なく、発達中度の細塊状構造、細小孔を含む、ち密度2.1で中、pH(H ₂ O)4.6前後、調査時の湿めり湿、斑状、脈状の酸化沈積物を含む。境界は波状漸変。

第3層	37 cm ~	腐植を欠く淡黄灰(7.5 Y 7/1)のH C、礫なく、均質連結状(角柱状構造になりつつある)を呈し、細小孔を含む、ち密度1.9で中、p H (H ₂ O) 4.3前後、調査時の湿めり湿、斑状、脈状の酸化沈積物を含む。
-----	------------	--

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重量 %	粒径組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~20	5.7		1.2	6.7	58.5	33.6	S i C	81.0	2.70	3.23	0.36	9	5.6
2	20~37	5.3		0.9	3.5	38.2	57.4	H C	113.2	2.79	1.14	0.22	5	2.0
3	37~	7.0		0.1	1.6	22.3	77.1	H C	118.5	2.71	0.59	—	—	1.0

層位	p H		置換酸度 Y ₁	塩基 置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰 飽和度 %	磷酸 吸收係数	有効 態磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCL			Ca O	Mg O	K ₂ O			
1	4.5	3.7	24.3	22.2	7.2	1.8	0.9	32.4	537	10.0
2	4.6	3.6	68.1	16.9	2.2	0.5	0.4	12.9	877	tr
3	4.3	3.4	80.1	26.6	2.1	0.6	0.5	8.0	1,109	tr

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては中武徳統があるが、本統より腐植含量が低く、土色もYRを呈することにより区別される。

A-3 母材 非固結水成岩(頁岩)

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B 地形 標高140m内外、略平坦な段丘。

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 平地で、面積の半ば近くは水田となり、残りが畑地になつてゐる。主作物は小豆、えん麦、馬鈴薯、一部にアスパラガス。

E 農業上の留意事項 平地で、土性細粒質、且つ粘着性強く、透水性悪い。排水不良な処が多い。畑地に於いては排水が必要で、更に除々に深耕、心土耕も必要である。

F 分布 北海道士別市多寄

調査及び記載責任者 野村琥(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(" 上川 ")

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壤区一覽

土壤区名	簡略分級式
東多寄統一1区	I w n t p f

② 土壤区別説明

東多寄統一 1 区

示性分級式(煙)

	耕 耘	表 土	有 效 土 层 的 厚 さ	表 土 的 礫 含 量	土 地 的 透 水 性	土 地 的 乾 湿	水 分 保 持 性	水 分 潤 度	自 然 肥 沃 度	固 定 力	固 定 力	養 分 (土 層 的 豐 否)	鹽 基 狀 態	(置 換 性 石 灰 含 量)	有 效 鹽 基 量	微 酸 量	酸 害 性	障 害 性	災 害 性	傾 斜 (地 すべ りの 危 険 度)	侵 蝕 (耐 水 蝕 性)									
t	d	g	p	w	f	n	i	a	s	e																				
Ⅲ	II	I	I	3	2	2	Ⅲ	3	2	3		1	1	2	Ⅲ	1	1	1	-	3		1	1	---		1	1	---		---

A 土壤区の特徴

この土壤区は東多寄続に属する。表土の厚さは20cm内外、有効土層は1m以上で深い。表土は細粒質で、粘着性中庸、下層は重埴土で、粘着性強く、透水性悪く、排水不良である。保肥分は石灰、苦土、加里、燐礬共に富む。

特殊の障害性はない。

B 植生及び利用状況

面積の半分以上は水田で、残りが畠として利用されている。

C 地力保全上の問題点 土性細粒質で、粘着性強く、透水性及び排水不良のことが、作物根の伸長、生育を防げ、生産不振な原因となつている。

従つて排水により、停滞水を除き、通気水性を良好にし、風化の促進を図り、その後深耕、心土耕により土壤の改良を図ることが望ましい。

D 分布 北海道士別市多寄

記載責任者 野 村 琥 (北海道立中央農業試験場)

野崎輝義（“上川”）

日付 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覽

土壤区名	簡略分級式
東多寄統一2区	I w h t p f

② 土壤区別説明

東多寄統一2区

示性分級式(畫)

A 土壤区の特徴

この土壤区は東多寄続に属する。表土の厚さは18cm、有効土層は1m以上で深い。表土は細粒質で、粘着性中庸、前東多寄1区に比し表土の腐植少なく、第2層の土性が若干粗く、透水性良好で湿性の程度が弱いため区分した。しかし第3層以下は前区同様重埴土で、粒着性強く、透水性不良である。

保肥力中、固定力小、強酸性を呈し、自然肥沃度は中である。

養肥分は磷酸、カリが足りない。

特殊の障害性はないが、前区同様排水不良な事が問題となろう。

B 植生及び利用状況 殆んど畠地として利用されている。

前区同様、土性細粒質で、粘着性強く、透水性悪く、排水不良なことが作物生育不振の原因になつていると考えられる。尙表土の腐植含量が少なく、一層地力を低いものにしている。従つて排水により通気水性を良好にし、深耕、心土耕、堆肥の施用により土壤の改良、耕土の培養を図ることが必要である。

中 武 德 統

(1) 土壤統の細分

A 土壤流の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15～30cm、腐植含量は3.8%、土性はL i Cである。色は7.5～10YR、彩度2～3、明度3～4が主で、処により2.5Yで、彩度2～3、明度3～4を呈する。

礫なく、発達弱度の細粒状構造を呈す。ち密度1.0～1.4で疎である。PH(H₂O)は5.6前後。下層への境界は直線明瞭である。

第2層は厚さ11～22cm、腐植含量は2.0%、土性H Cである。色は10YRで彩度4、明度4であるが、2.5Y、彩度4～6、明度4～6の処もある。礫は殆んどないが、処により未風化、半風化の小中円礫、半角礫を含む。

発達弱度の塊状構造を呈し、細小孔を含む。ち密度2.0～2.5で中～密である。層状、膜状の酸化沈積物を含む。PH(H₂O)は4.8前後。下層への境界は不規則漸変である。

第3層はおおむね40cm内外以下で、腐植含量は2%以下、土性はL i Cである。色は5YRで彩度1、明度7である。処により2.5～5Y、彩度1～2、明度6～7を呈す。礫なく、角柱状構造を呈し、細孔を含む。ち密度2.1～2.4で中、排水悪く、湿性を呈し、層状、膜状、斑状の酸化沈積物を含む。PH(H₂O)は4.7前後。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 士別市武徳 試坑No.38

第1層	0～18cm	腐植を含む黄褐灰(10YR 4/2)のL i C、礫なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.0ですこぶる疎、PH(H ₂ O)5.6前後、調査時の湿めり半乾、境界は直線状明瞭。
第2層	18～40cm	腐植を含む褐(10YR 4/4)のH C、礫なく発達弱度の塊状構造、細小孔を含む。ち密度2.0で中、PH(H ₂ O)4.8前後、調査時の湿めり半乾、層状、膜状の酸化沈積物を含む。境界は不規則漸変。
第3層	40～cm	腐植を欠く淡褐灰(5YR 7/1)のL i C、礫なく、角柱状構造、細孔を含む。ち密度2.3で中、PH(H ₂ O)4.7前後、調査時の湿めり湿、層状、膜状、斑状の酸化沈積物を含む。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重量 %	粒径組成 %				土性	現地 容積 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~18	5.9		3.5	25.3	36.0	35.4	Li C	79.1	2.51	2.23	0.32	7	3.8
2	18~40	3.2		1.6	32.9	20.4	45.1	H C	99.2	2.71	1.15	0.19	6	2.0
3	40~	7.3		3.5	34.1	32.7	29.6	Li C	114.7	2.69	0.58	—	—	1.0

層位	PH		置換酸度 Y1	塩基 置換容量 me/100g	置換性塙基 me/100g			石 飽和 度 %	磷酸 吸収係数	有効 態磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	5.6	4.7	1.8	24.4	19.2	2.4	0.4	78.7	1,152	5.0
2	4.8	3.7	49.2	27.6	5.4	2.3	0.3	19.5	1,318	tr
3	4.7	3.6	70.1	30.3	3.3	2.7	0.3	10.8	1,132	tr

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては東多寄統がある。東多寄統は土色がYであることにより区別される。

A-3 母材 非固結水成岩(砂岩)

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B-地形 標高140m内外の平坦地。

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 半ば近く水田となり残りが畑となつてゐる。主作物、小豆、燕麦、馬鈴薯一部アスパラガス。

E 農業上の留意事項 平地で、土性細粒質、透水性悪く、排水不良である。畑地においては排水が必要で、更に堆肥を多施し、深耕も必要である。

F 分布 北海道士別市武徳

調査及び記載責任者 野村 球(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(" 上川 ")

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
中武徳統－中武徳区	III w // t p n

② 土壌区別説明

中 武 徳 統 － 中 武 徳 区

示性分級式(畳)

土表有表耕	土透保湿	自然固土	養分置換	有機酸	障害物	災害	傾斜	侵蝕
土壤土効土耕表地	土壤肥水潤沃	土壤肥定	土壤豐性	土壤活性量	土壤害物的	土壤冠水	土壤自然傾斜	土壤耐風蝕性
生の土の土の土の厚層	の乾水水潤沃	の肥定	の豊性	の活性量	の害物的	の冠水	の自然傾斜	の耐風蝕性
産の難の難の難の含易土粘風溼	の乾水水潤沃	の肥定	の豊性	の活性量	の害物的	の冠水	の自然傾斜	の耐風蝕性
力さの含易土粘風溼	の乾水水潤沃	の肥定	の豊性	の活性量	の害物的	の冠水	の自然傾斜	の耐風蝕性
可深量性着乾性度	性着乾性度	性度	性度	性度	性度	性度	性度	性度
能性等級	性土の硬さ	性土の硬さ	性土の硬さ	性土の硬さ	性土の硬さ	性土の硬さ	性土の硬さ	性土の硬さ
t d g P	w	f	n	i	a	s	e	
III	II	III	II	II	II	II	II	II
3	2	2	2	1	1	1	1	1
2	2	3	1	2	1	2	—	—
1	1	1	1	1	1	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—
簡 略 分 級 式	III w // t p n							

A-土壌区の特徴

この土壌区は中武徳統に属する。表土の厚さは 18cm 有効土層は 1m 以上である。表土は細粒質で、粘着性中庸、第2層も略々同様の土性、粘着性で、第3層(40cm)以下は粘着性強く、透水性悪くなつてゐる。

保肥力大、固定力小、表土の酸性弱く、自然肥沃度は高いが、第2層以下の酸性強い。養肥分は石灰、苦土は多いが、加里、磷酸は中庸である。特殊の障害性はないが、下層の排水不良なことに注意を払う必要がある。

B 植生及び利用状況 面積の半ば以上が水田として利用され、残りが畑になつてゐる。

C 地力保全上の問題点 土性細粒質で、透水性悪く、排水不良なことが地力保全上の問題点になつてゐる。従つて排水により停滞水の除去、通気水性の改善を図り、其の後に堆厩肥の多施による深耕、心土耕により生産力の向上、耕土の培養を図ることが望ましい。

D 分布 北海道士別市武徳

記載責任者 野 村 虔(北海道立中央農業試験場)

野 崎 煉 義(〃 上川 〃)

日 付 昭和45年3月31日

南 武 徳 統

(1) 土壌統の概要

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ11~22cm、腐植含量は5.0%、土性LiCである。色は7.5~10YRで、彩度2~3、明度3~4である。礫は殆んどないが、局部的に未風化の小中円礫、半角礫が混入（含量は富む程度）する処がある。発達中程度の細粒状構造と、粒状構造の複合構造である。ち密度1.0~1.6で、すこぶる疎~疎である。PH(H₂O)は5.4前後。下層への境界は不規則漸変である。

第2層は厚さ10~28cm、腐植含量は3.2%、土性E/Cである。色は7.5~10YRで、彩度3~6、明度4~6である。礫は殆んどないが、局部的に未風化の小中円礫、半角礫を不規則に混入する処（含量は含む~富む）がある。

発達中度の塊状構造で、細小孔を含む。ち密度2.0~2.2で中、PH(H₂O)は5.2前後。下層への境界は直線明瞭である。

第3層は厚さ11~25cm、腐植含量は2.2%、土性はSiCである。色は10YRで、彩度2~4、明度3~6である。未風化小中円礫、半角礫を含み、発達中度の粒状構造、細小孔を含み、割れ目もあり、ち密度2.1~2.4で中である。PH(H₂O)は5.2前後。下層への境界は不規則漸変である。

第4層は厚さ12cm、腐植含量は2%以下、色は10YRで、彩度3、明度6である。下層への境界は不規則漸変である。

第5層はおおむね47cm以下、未風化の小中円礫、半角礫から成る疎層である。

代表的断面形態

（所在地）土別市武徳 試坑No.4-4（中土別）

第1層	0~11cm	腐植に富む褐(7.5YR 4/3)のLiC、礫なく、発達中度の細粒状構造の複合構造、ち密度1.0で、すこぶる疎、PH(H ₂ O)5.2前後、調査時の湿めり半乾、境界は不規則漸変。
第2層	11~24cm	腐植を含む灰褐(7.5YR 5/3)のE/C、礫なく、発達中度の塊状構造、細小孔を含む。ち密度2.0で中、PH(H ₂ O)5.2前後、調査時の湿めり半干、境界は直線明瞭。

第3層	24~35cm	腐植を含む黄褐灰(10YR 5/2)のSiC、未風化の中円礫、半角礫を含み、発達中度の粒状構造、細小孔、割れ目を含む。ち密度1.8で中、PH(H ₂ O)5.3前後、調査時の湿めり半乾~湿、境界は不規則漸変。
第4層	35~47cm	腐植を欠く灰黃橙(10YR 6/3)のSiC、境界は不規則漸変。
第5層	47~cm	未風化の中円礫、半角礫から成る礫層

代表的断面の分析成績

層位	彩取部位 cm	水分 %	礫含量 重量 %	粒径組成 %				土性	現地 容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~11	5.2	—	16.2	22.8	30.2	30.7	LiC	108.2	2.61	2.88	0.28	1.0	5.0
2	11~24	5.1	—	3.0	10.6	41.1	45.3	H C	105.1	2.69	1.83	0.24	8	3.2
3	24~35	6.3	—	3.5	10.5	47.1	38.8	SiC	102.5	2.63	1.27	0.25	5	2.2

層位	PH		置換酸度 y i	塩基 置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰 飽和度 %	磷吸收係数	有効 態 磷 酸 me/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	5.4	4.1	2.2	26.5	21.8	4.1	0.3	8.2.2	1,254	1.0.0
2	5.2	3.9	21.3	26.6	16.6	5.1	0.3	6.2.4	1,234	tr
3	5.3	3.8	24.7	28.7	17.7	6.1	0.3	6.1.6	1,399	tr

A-2 他の土壤統との関係

本統に隣接する統としては中武徳統、東陽統があるが、何れも下層に二次生成物があり、堆積様式が異なることにより区別される。

A-3 母材 非固結水成岩(砂岩)

A-4 堆積様式 崩積

B 地形 標高150~200m、平均傾斜3度内外の平担地(扇状地)

C 気候 年平均気温 5.6°C 年降水量 1,185mm

D 植生及び利用状況 殆んど耕地となり、えん麦、豆類、ピートなどが栽培されている。

E 農業上の留意事項 大なる問題点はないが、一般に表土の腐植含量が少ないので、堆肥の施用、緑肥の導入によつて地力の一層の増大を図ることが望ましい。

F 分布 北海道士別市武徳(中土別)

調査及び記載責任者 野村 球(北海道立中央農業試験場)

野崎輝義(" 上川 ")

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
南武徳統 - 南武徳区	t d p n i

② 土壤区別説明

南武徳統 - 南武徳区

示性分級式(畑)

土表有表耕	土表地透保湿	自然肥層の換	養分置換	有機酸	障害	災害	傾斜	侵蝕
壤土効土	耕耘土の乾	水潤沃度	肥定の豊性	量	物理的害質	地冠水の害	自然傾斜	人為侵耐水風
生の士の土の	土の土の	土の土の	土の土の	土の土の	物的害質	冠水の害	傾斜	自然傾斜
産厚層疊難の	難の乾	水潤沃度	肥定の豊性	量	害の危険度	地冠水の危険度	傾斜	侵耐水風
力さの含易土粘風湿	土粘風湿	度	塩否石苦加磷	害の危険度	度	度	度	度
可能深量性着乾	性着乾	性度	力力基	灰土里酸要	有性無性	度	度	度
能性等級	性土の硬さ	性度	状態	含量	素度	性度	斜	蝕
t d g p	w	f	n	i	a	s	e	
III III III I 3 1 1 2 2 2 1 2 1 1 1 2 1 - 2 1 2 --- 1 1 --- 1 ---								
簡略分級式 III t d p n i								

A 土壤区の特徴

この土壤区は南武徳統に属する。表土の厚さは 1 cm 有効土層は 50 cm 内外。表土は疊なく細粒質で、粘着性中庸、透水性、保水性も中庸である。47 cm 以下の下層は疊層になつてゐる。

保肥大、固定力小、弱性酸性を呈し、自然肥沃度は高い。

養肥分は石灰、苦土、磷酸に富むが、加里が少ない。

特殊の障害性はない。

B 植生及び利用状況

殆んど耕地として利用され、収量は比較的高い。

C 地力保全上の問題点

大なる問題点はないが、表土が稍薄く、腐植含量も低いので、堆肥の施用による地力の培養が必要である。

尙深耕により表土の深耕化を図る時、下層が強酸性を呈するので酸性矯正が必要である。

D 分布

北海道士別市武徳(中土別)

記載責任者

野 村 球(北海道立中央農業試験場)

野 崎 輝 義(" 上川 ")

日 付

昭和 45 年 3 月 31 日

(3) 保全対策地区区分及び説明

1) 保全対策地区の設定

土壤断面形態、地形、堆積様式および理化学性の特徴から問題点を摘出し地力保全・増強対策の内容によつて次のような保全対策区を設定した。

(水田)

保全対策地区名	該当土壤区	面積(ha)	主な特徴	重要な対策
南線	南線 南線 大牛別	780	1.地下排水不良 2.40~50cm以下グライ 3.透水性小さい。 4.作土や浅い。 5.増水時の危険性	1.明、暗渠排水の完備 2.深耕、心土耕と併行IC 3.有機物の施用 4.区画の拡大 5.珪カルの施用(20kg/10a)
南町	仲線 南町 大和	1,000	1.下層粘質で極めて堅密 2.有機質不足 3.透水性小さい。 4.排水不良	1.深耕(30~40cm) 2.心土破碎(0.5×2.0m) 3.明、暗渠排水の完備 4.有機物、塩基の補給
北町	上士別 南北町 西士別 南士別	970	1.地下排水不良 2.有機質不足 3.磷酸、珪酸や少ないと 4.作土や浅い。	1.暗渠排水完備 2.深耕(30~40cm) 3.磷酸多用、弁当苗使用 4.有機物、塩基の補給 5.による初期生育の促進
川南中央	川南中央	550	1.不層壤質土 2.作土が浅い。 3.有機物不足	1.深耕(30~40cm) 2.堆厩肥等の施用 3.施肥の合理化
多寄	多寄	120	1.低位泥炭 2.全層グライ 3.作土浅く無機膠質不足 4.塩基不足	1.明渠の完備 2.明渠の設置(0.9×7m) 3.用排水分離 4.含鉄粘土客土(30m*10a) 5.珪カルの施用(120kg/10a)

保全対策地区名	該当土壤区	面積(ha)	主な特徴	重要な対策
多寄東	多寄北	750	1.全層グライ 2.作土が浅い。 3.有機物不足 4.透水性小さい。	1.排水施設の完備 2.用排水分離 3.有機物の補給 4.深耕(30~40cm) 5.珪カル、熔燐の投入
	多寄東			
	兼内			
士別	中土別中	1,420	1.下層に砂、礫層出現 2.作土が浅い。 3.やゝ漏水が大きい。 4.塩基不足	1.漏水防止(ペントナイト施用) 2.分追肥の検討 3.含鉄資材の客入 4.土改資材(珪カル、熔燐)の投入
	日向			
	下士別西		5.やゝ窒素地力が低い 6.有効磷酸が少ない。	
	下士別		7.養肥分が流亡する。 8.有機物が不足	5.有機物、塩基の補給 6.深耕(30~40cm)
	中士別南		9.透水性中庸	
武徳	武徳	1,035	1.作土や腐植に富む 2.斑鐵の集積もやゝ多い 3.作土がやゝ浅い。 4.透水性小さい。	1.窒素肥料の合理的な施用検討。 2.磷酸多用弁当苗使用による初期生育の促進。
	上士別北		5.排水や不良	3.深耕、心土耕、心土破碎 4.用排水分離

(畑)

保全対策地区名	該当土壤区	面積(ha)	主な特徴	重要な対策
上士別	大英成美川南 川西南一1	1,490	1.かなりの傾斜(8~15°) 2.表土がうすい。 3.下層が堅密。 4.有機物の欠乏。 5.微量元素の欠乏。	1.保全耕作(牧草、綠作帶) 2.深耕、心土耕、心土破碎 3.有機物施用(堆肥) 4.熔燐、苦土資材施用
兼内南	兼内南	60	1.下層に礫層出現) 2.有機物不足	1.有機物施用 2.施肥の合理化
川西	川西南一2 川西北 東山	600	1.傾斜地 2.有機物不足 3.塩基不足	1.保全耕作(牧草、綠作帶) 2.有機物施用 3.苦土入り肥料の施用
東山	東山南	110	1.傾斜地 2.有機物の欠乏 3.有効土層が浅い	1.保全耕作 2.有機物施用 3.深耕、心土破碎
川西中央	川西中央	90	1.下層排水不良 2.有機物の欠乏 3.傾斜地	1.暗渠排水完備 2.有機物施用 3.保全耕作、施肥合理化
中士別	中士別	200	1.有機物の欠乏 2.塩基やマグネシウム不足	1.有機物施用(綠肥導入) 2.熔燐、苦土入り資材施用 3.施肥の合理化
東陽	北武徳 東陽一1 2 南武徳	590	1.傾斜地 2.腐植含量低い 3.強酸性 4.土壤堅密	1.等高線栽培、綠作帶 2.堆肥、綠肥導入 3.深耕、心土破碎 4.酸性矯正
東多寄	東多寄一1 2 中武徳	710	1.土壤堅密 2.排水不良	1.明、暗渠排水完備 2.深耕、心土耕、心土破碎 3.有機物施用

2) 保全対策地区説明

(水田)

< 南線保全対策区 >

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
土別市	780	南線土壤区、犬牛別土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策区は、沢地帯が主で地下排水が悪く40~50cmからグライを呈している。表土、次層共に強粘質土壤で透水性も小さいところから排水の完備が望まれる地帯である。尚下層に砂礫層の出現する所もある。沢地帯なので一時的増冠水の危険性があるので幹線明渠等の完備が望まれる。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
排水	南線統	明、暗渠排水完備	素焼き土管、塩化パイプなど	
深耕	犬牛別統	大型機械利用	工事費の助成。	
有機物施用	(780ha)	沢地の一時的増冠水排除	耕深30~40cm 堆肥1.0~1.5t/10a	
幹線明渠				

< 南町保全対策区 >

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
土別市	1,000	仲線、南町、大和、各土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策区は、洪積世堆積地帯で表土、下層土共に強粘性で極めて堅密で緩傾斜地帯からなっている。有機質不足、塩基流亡、排水不良等が目立つている。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
深耕	仲線統	大型機械利用	30~40cm 耕深	
心土破碎	南町統	バンブレーカー	0.5~2.0m	
排水	大和統	明、暗渠排水完備	素焼き土管、塩化パイプなど	工事費の助成
有機物施用	(1,000ha)	春、雪上散布	1~2t/10a堆肥	

< 北町保全対策区 >

(1) 分布

市 村 村 名	面 積(ha)	該 当 土 壤 区
士 別 市	970	上士別南、北町、西士別、南士別、各土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策区は、沖積を主体とし(上士別南洪積)た地下排水の比較的悪い地帯が多く磷酸、珪酸のやゝ不足が目立ち、作土も浅い所が多い。したがつて排水の完備と磷酸多用と弁当苗使用による初期成育の促進が望まれる。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び 対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具 の種類、型式、数量等	備 考
地下排水	上士別南統	暗渠排水の完備	土管、塩化イフなど工事費の助成	
磷酸塩基の補給	北町統	苦土、加里、窒素、磷酸施用	苦土石灰、硫酸加里、尿素、熔成磷酸	
深耕	西士別統	大型機械利用	30~40cm 耕深	
有機物施用	南士別統 (970ha)	春、雪上撒布	堆肥、1~2t/10a	

< 川南中央保全対策区 >

(1) 分布

市 町 村 名	面 積(ha)	該 当 土 壤 区
士 別 市	550	川南中央土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策区は、沢の沖積地帯で比較的排水の良好な表土粘質、次層砂質で、耕起、碎土に困難のない地帯で、ところによつては下層に砂礫層の出現する場合もある。したがつて漏水の心配もあり、有機物の不足が目立つている。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び 対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具 の種類、型式、数量等	備 考
深耕	川南中央統	大型機械利用	30~40cm 耕深	
有機質施用	(550ha)	春、雪上撒布	堆肥、1.5~2.0t/10a	
施肥の合理化		指導	磷酸増施、窒素増施及び分施 珪カル施用	

<多寄保全対策区>

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
士別市	120	多寄土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は、天塩川流域に分布する低位泥炭(20~30cm以下)地で、透水性、保水性が悪く、全層グライで、地下水位も高いところから、明渠、暗渠排水の完備により、有機物の分解促進が大切である。珪酸不足と酸性なのでその対策も必要である。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
排水	多寄統 (120ha)	明、暗渠排水完備 軌道-馬搬	素焼き土管、塩化パイプなど工事費助成 30m ³ /10a	
含鉄粘土		珪カル	120kg~150/10a	
珪カル施用				

<多寄東保全対策区>

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
士別市	750	多寄北土壤区、多寄東土壤区、兼内土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は、腐植が比較的少なく、全層グライで、表土、次層ともに強粘質土壤で、作土が浅く、透水性の悪い地帯を取りまとめたものである。したがつて、排水の完備と、有機質の不足から、堆肥などの補給が必要。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
排水	多寄北統 (750ha)	明暗渠排水完備 堆肥、厩肥の施用 大型トラクター	素焼き土管、塩化パイプなど、工事費の助成 堆肥1.5~2.0t/10a 30~40cm	
有機物施用	多寄東統	珪カル	120kg/10a	
深耕	兼内統			
塩基の補給				

< 士別保全対策区 >

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
士別市	1,420	中士別、日向、下士別西、中士別南各土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は、下層に砂土、砂礫層、礫層の出現する地帯をとりまとめたもので、一般に漏水の傾向がある。又窒素、磷酸がやゝ少なく、作土もやゝ浅い地帯である。したがつて深耕と併せて有機物、塩基の補給、土壤改良資材等の投入が考へられる。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
漏水防止	中士別統		ペントナイト施用	
深耕	日向統 下士別西統	大型機械利用	耕深30~35cm	
有機物施用	下士別統	イネわら秋鋤き込み	堆肥1.0~1.5t/10a イネわら300~400kg/10a 珪カル120kg/10a よう撲100~150kg/10a	
土壤改良資材施用	中士別南統 (1,420ha)			

< 武徳保全対策区 >

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
士別市	1,035	武徳土壤区、上士別北土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策区は、作土は腐植に富み、斑鐵の集積も多く、置換容量がやゝ高く、窒素の保持が良好と考えられる。一般に初期生育が遅れる地帯である。したがつて磷酸多用による初期生育の促進が望まれる。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
窒素肥料の合理的な施用	式徳統	指導		
磷酸多用	上士別北統 (1,035ha)	指導	熔燐100~150kg/10a 30~40cm耕深	
深耕		大型機械施用	用排水の分離	
排水			ため池温水ハイブ、D.E.Dグリーンなど	
水温上昇		指導		

(畠)

<上士別保全対策区>

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
士別市	1,490	大英、成美、川南、川西一、土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は、傾斜地で、且つ下層土が堅密な所が多い。従つてリルの発生及び部分的なガリーの発生が認められる。保全耕作、傾斜地用農具の整備が最も緊急な問題である。尚全般に腐植に乏しい。営農レベルが低く、穀物収入は不安定であり又、侵蝕対策として綠作帯の設置が必要である。

以上のことから大家畜を導入した混同経営を実施し、経済力の向上と堆肥の増産、牧草による恒久的な地力維持を考えるべきである。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
保全耕作	大英統 成美統 川南統 川西統一 (1,490ha)	綠作帯設定 等高線栽培 簡易テラス 特殊農具導入 堆肥の増産 乳牛の導入 合理的施肥	綠肥種子共同購入 指導 公共事業費 傾斜地用農機具 畜舎、堆肥舎の完備 講入に対する補助 特に苦土過石、熔燐の過石との併用。	
有機物増施				
混同経営				
施肥の合理化				

<兼内南保全対策区>

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
士別市	60	兼内南土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は、砂質土なので保肥力、保水力の向上を計らなくてはならぬ。従つて粘土地の客土、有機物の増施が考えられる。アスパラガス、蔬菜等の園芸作物に重点を置いた経営が望ましい。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
保肥力、保水力の向上 有機物増施 施肥の合理化	兼内南統 (60ha)	客土 堆肥の増産 合理的施肥	粘土質土壌の客入 畜舎、堆肥の完備 指導	

< 川西保全対策区 >

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
士別市	600	川西南一2、川西北、東山土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は、全般に傾斜が強く、土壤の粘性は弱く、更に下層は堅密で、一層侵蝕を助長している。尙土壤の有機物は欠乏し、極めて低い現状である。現在穀苗経営で、馬鈴薯、燕麦、小豆等を主作し、徐々にピートも作付けされているが、地力が低いため収量が低く、家畜も綿羊、牛、馬等が飼育されている程度で、経営は不安定である。従つて地力の保全、培養のためには前記の如く、保全耕作の一環として緑作帯の設置が必要で、更に堆肥の施用、緑肥作物の導入も必要であり、此等を総合して経営を行うには、大中家畜を導入した混同経営が望ましい。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
保全耕作	川西南統一2	等高線栽培	指導	
有機物施用	川西北統 東山統 (600ha)	緑作帯設置 特殊農具 堆肥施用 緑肥導入	牧草種子補助 傾斜地用プラウ、カルチベーター補助 家畜の導入、畜舎、堆肥の設置 種子補助	
施肥の合理化		指導の徹底	苦入り肥料の施用指導	

< 東山保全対策区 >

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
士別市	110	東山南土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は全般に川西保全対策地区同様傾斜が強く、侵蝕を強く受け、更に表土の有機物にも欠乏している。尚下層は極めて堅密で、有効土層が40cm内外しかない事が特徴である。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
保全耕作	東山南統 (110ha)	等高線栽培 緑作帯設置 特殊農具 堆肥施用 綠肥導入 大型機械利用 指導の徹底	指導 牧草種子補助 傾斜地用ブラウ、カルチベーター補助 家畜の導入、畜舎、堆肥貯蔵庫の設置。 種子補助 トラクター及びバンプレーカー 苦土入り肥料の施用指導	
有機物施用				
深耕及び心土破碎 施肥合理化				

< 川西中央保全対策区 >

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
士別市	90	川西中央土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は、全般に傾斜地が多く、有機物に乏しく、更に下層が堅密で、排水不良な事が特徴である。川西、東山保全地区と同様の営農形態を考えるべきであろう。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
有機物施用	川西中央統 (90ha)	堆肥施用 綠肥導入 明、暗渠排水	家畜の導入、畜舎、堆肥貯蔵庫の設置。 種子補助 小団地補助事業適用	
排水保全耕作		等高線栽培 綠作帯設置 指導の徹底	指導 牧草種子補助 苦土入り肥料の施用	
施肥合理化				

< 中士別保全対策区 >

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
中士別市	200	中士別土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は、平坦で、土壤断面の状態からみて、問題点は少ないと考えられる。土壤の生産力高く、水田、畑、の何れにしても可成りの収量を期待出来よう。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
有機物施用	中士別統 (200ha)	堆肥施用 厩肥導入	家畜の導入、畜舎、堆肥舎の設置 種子補助	
施肥合理化		指導の徹底	苦土入り肥料の施用指導	

< 東陽保全対策区 >

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
江別市	590	北武徳、東陽-1、東陽-2、南武徳、各土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は、標高140～290m、平均傾斜7度内外の波状性丘陵地に分布し、表層から下層まで石礫を混入し、土性細粒質で、堆積堅密、更に腐植含量低く、強酸性を呈し、土壤の理化学性劣悪である。燕麦、馬鈴薯、豆類を主にし、それに除虫菊を加えた當農を行つている。しかし地力が低いため、生産不振で経営の苦しい農家が多い。従つて地力の培養を図り経営の安定を期するためには、有機物の施用が不可欠と考えられ、このため大中家畜を導入した混同経営で進むことが望ましい。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
保全耕作	北武徳統 東陽統-1	等高線栽培 緑作帯設置	指導の徹底、牧草、種子の補助	
有機物施用	東陽統-2	堆肥化、緑肥導入	家畜の導入、畜舎、堆肥化建設の補助	
塩基補給	南武徳統 (590ha)	石灰、苦土資材施用 有機物を施用し、機械力使用	牧草種子補助 炭カル600kg/10a 苦土4kg/10a トラクターセットの貸与	
深耕				

< 東多寄保全対策区 >

(1) 分布

市町村名	面積(ha)	該当土壤区
土別市	710	東多寄-1、東多寄-2、中武徳、各土壤区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

この対策地区は、平坦地であるが、土性細粒質で堅密な堆積をなし、排水不良である。

地形、水利等からみて将来は水田とする方がよいであろう。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対策地及び対象面積(ha)	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量等	備考
排水	東多寄統-1	暗渠排水	土管購入補助	
深耕、心土破碎	東多寄統-2 中武徳統 (710ha)	大型機械利用 (有機物施用して)	トラクターセットの貸与 バシブレイカー	

土壤分析成績(水田)

保全対策区	土壌番号	地點番号	層位	深さcm	理学性										化学生性																				
					種風乾物中%	風乾細土中		細土無機物中					土性	現地における理学性 100cc容中			pH		置換酸度 Y ₁	有機物			塩基質換量 me/100g	置換性塩基 mg/100g			塩基飽和度%	磷酸吸収係數	乾土効果	30°C NH ₄ N発生量 mg/100g		有効態 P ₂ O ₅	遊離酸化鉄 %		
						水分%	腐植%	粗砂%	細砂%	砂合計%	シルト%	粘土%		容積重g	固容相積cc	水容分積cc	空容気積cc	孔隙率%	H ₂ O	KCL	T-C%	T-N	C/N	CaO	MgO	K ₂ O	乾土	湿土							
南線	南線	犬牛別	1 2 3	0~17 17~45 45~70	3.34	5.58	6.14	2728	33.42	34.18	32.40	Li C						56	4.5	875	3.24	0.15	21.60	17.1	9.4	0.8	0.2	54.9	470	1078	17.24	6.46	220	1724	1.08
					4.20	4.27	2.81	31.58	34.39	32.92	32.69	Li C						58	4.6	563	248	0.11	22.55	260	11.5	1.7	0.1	44.0	950	595	12.63	6.68	tr	1263	1.12
					4.09	4.00	3.62	19.38	23.00	14.82	62.19	H C						55	4.3	1875	252	0.13	17.85	21.6	6.3	1.2	0.7	29.2	1.300	277	12.31	9.54	tr	1231	—
南線	仲綫	犬牛別	1 2 3	0~23 23~75 75~	79.9	16.58	1.81	5.84	7.65	37.49	54.86	H C						58	4.6	688	9.62	0.61	15.77	32.0	32.3	1.9	0.7	100.9	1.830	524	16.95	11.71	1.49	1695	1.60
					6.29	3.46	0.04	1.87	1.91	33.31	64.78	H C						49	3.8	58.75	201	0.10	20.10	350	109	1.5	0.5	31.1	1.600	2.11	7.84	577	tr	784	1.71
					5.16	2.12	0.17	5.32	5.49	33.20	61.30	H C						49	3.6	6375	123	0.03	41.00	246	7.9	1.8	0.5	32.1	1.380	235	8.08	573	tr	8.08	—
南綫	南綫	仲綫	1 2 3	0~15 15~55 55~	4.78	4.95	4.67	15.35	20.02	37.68	42.30	Li C						52	4.1	2000	287	0.18	15.94	22.3	187	2.4	0.4	83.8	9.40	1031	20.98	10.67	1.49	2098	1.14
					3.48	2.48	0.19	16.57	16.76	27.15	56.09	H C						55	4.1	25.00	1.44	0.09	16.00	186	146	2.4	0.5	78.4	1.150	0.82	558	476	tr	558	1.38
					3.89	1.59	1.25	10.25	11.50	38.91	49.58	H C						62	4.8	11.88	0.92	0.02	46.00	156	152	4.8	0.3	97.4	1.100	1.50	6.87	537	tr	687	—
南綫	南町	犬牛別	1 2 3	0~15 15~35 35~60	32.5	5.84	11.98	18.59	30.57	36.45	32.98	Li C						54	4.3	13.75	339	0.22	15.41	193	103	0.8	0.3	53.3	800	860	18.59	8.99	1.45	1859	0.90
					32.2	4.84	5.31	22.22	27.53	36.00	36.47	Li C						59	4.8	7.50	281	0.14	20.07	208	168	1.4	0.5	80.8	1.120	9.98	1386	388	tr	1386	0.72
					352	1.98	15.33	25.70	41.03	31.31	27.66	Li C						55	4.2	24.38	1.15	0.02	57.50	179	7.6	1.6	0.2	42.4	800	1.52	475	323	tr	475	—
南綫	大町	犬和	1 2 3 4	0~17 17~33 33~60 60~	4.38	7.22	13.13	15.33	28.45	31.02	40.52	Li C						55	4.4	8.75	4.19	0.26	16.12	260	11.5	0.9	0.2	44.2	1.220	0.05	15.16	5.11	338	15.16	0.77
					4.18	5.89	6.17	15.51	21.68	32.34	45.98	H C						56	4.3	12.50	342	0.17	20.12	231	11.0	1.2	0.2	47.8	1.540	0.09	820	811	tr	820	0.65
					3.41	1.98	9.13	16.64	25.77	42.82	31.42	Li C						52	4.2	28.75	1.15	0.04	28.75	16.4	1.6	0.3	0.2	9.8	1.140	1.85	393	2.08	tr	393	—
北	上士別南	北町	1 2 3	0~20 20~40 40~	5.76	4.53	3.61	25.32	28.93	26.41	44.66	Li C						55	4.4	15.00	263	0.19	13.84	260	14.4	1.8	0.3	55.3	1.830	11.96	16.83	4.87	3.12	16.83	0.60
					5.91	4.95	2.37	12.45	14.82	41.28	43.90	Li C						54	4.3	18.13	287	0.17	16.88	31.3	8.1	0.9	0.2	25.9	1.860	0.20	4.11	3.91	3. tr	4.11	1.27
					5.27	2.00	20.39	25.84	46.23	30.53	23.25	C L						53	4.3	18.75	1.16	0.04	29.00	22.3	2.7	0.3	0.2	12.1	1.580	2.01	455	2.54	tr	455	—
北	北町	西士別	1 2 3	0~18 18~50 50~73	4.17	7.70	10.81	23.61	34.42	31.08	34.51	Li C						57	4.5	9.38	447	0.28	15.96	20.1	17.2	2.2	0.3	85.6	9.40	540	13.86	846	6.18	1386	0.43
					5.17	5.86	0.56	5.66	6.22	36.46	57.32	H C						56	4.3	20.00	340	0.24	14.17	298	132	1.6	0.8	44.3	1.850	0.26	5.49	523	1.13	549	0.18
					5.00	2.15	11.55	18.58	30.13	31.74	38.12	Li C						54	4.2	25.63	1.61	0.11	14.64	246	1.7	0.2	0.6	6.9	1.500	0.06	387	381	tr	387	—
北	南士別	西士別	1 2 3	0~20 20~60 60~	5.17	5.43	1.35	11.91	13.26	39.73	47.01	H C						52	4.1	26.00	315	0.21	15.00	186	107	1.5	0.4	57.5	1.350	8.69	17.56	887	0.82		

土壤分析成績(水田)

保全対策区	土壌番号	地點位	層深さ	理 學 閣										化 學 性														遊離酸化鉄 %									
				礫 (風乾物) % 風乾物 %	風乾細土中					細土無機物中					土性	現地における理学性 100cc 容中		pH		電換酸度 Y ₁		有機物			電換性塩基 mg/100g			塩基饱和度 % me/100	塩基飽和度 % CaO MgO K ₂ O	乾土効果	30°C NH ₄ -N 発生量 mg/100g		有効態 P ₂ O ₅ N				
					水分 %	腐植 %	粗砂 %	細砂 %	砂合計 %	シルト %	粘土 %	容積重 g	固容積 相重 cc	水容 分積 cc	空容 氣積 cc	孔隙率 %	H ₂ O	KCL	T-C	T-N	C/N	CaO	MgO	K ₂ O	乾土			湿土	P ₂ O ₅	N							
多寄北	102	1	0~15		229	626	463	12.14	1777	4234	40.89	Lic					56	—	—	3.63	0.27	13.3	18.9	—	—	—	259	1,314	787	1984	11.97	—	19.84	—			
		2	15~27		176	839	377	12.02	1579	4157	42.64	Lic					54	—	—	487	0.36	13.4	21.1	—	—	—	342	1,290	0.36	21.47	11.11	—	21.47	—			
		3	27~		324	354	023	721	7.44	5029	42.27	Sic					52	—	—	205	0.16	12.9	18.3	—	—	—	330	1,097	—	—	—	—	—	—			
多寄東	103	1	0~13		210	481	2184	18.23	40.07	3142	28.51	Lic					56	—	—	279	0.22	13.0	20.1	—	—	—	338	1,009	601	1501	9.00	—	1501	—			
		2	13~21		2.14	581	998	1092	20.90	41.19	37.91	Lic					53	—	—	3.37	0.29	11.6	20.4	—	—	—	29.1	1,033	491	1348	8.57	—	1348	—			
		3	21~42		2.18	339	086	653	739	4436	48.25	Hc					56	—	—	1.97	0.15	12.8	29.0	—	—	—	20.5	1,110	—	—	—	—	—	—			
兼東内	104	1	0~13		209	445	1.10	11.51	12.41	42.69	4490	Lic					50	—	—	2.58	0.26	10.1	16.1	—	—	—	46.3	1,076	10.04	1569	5.65	—	15.69	—			
		2	13~22		2.47	349	223	1395	16.18	31.67	52.15	Hc					54	—	—	2.02	0.19	10.6	17.8	—	—	—	37.4	1,256	2.45	11.25	8.80	—	11.25	—			
		3	2~33		3.06	2.03	3.33	21.90	2523	19.09	5568	Hc					55	—	—	1.18	0.13	8.8	17.7	—	—	—	57.1	1,288	—	—	—	—	—	—			
土中別士	105	1	10~14		1.40	4.80	16.36	2585	4221	26.80	30.99	Lic					56	—	—	2.78	0.29	9.5	15.9	—	—	—	49.0	796	13.65	1901	5.36	—	1901	—			
		2	24~22		1.70	2.70	15.46	2565	41.11	29.82	29.07	Lic					58	—	—	2.73	0.34	8.1	17.0	—	—	—	45.9	916	7.02	1409	7.07	—	1409	—			
	107	1	0~13		2.17	5.16	1.93	19.92	21.85	43.41	34.74	Lic					57	—	—	3.00	0.28	10.9	22.7	—	—	—	26.6	1,049	626	1394	7.68	—	13.94	—			
下士別西	108	2	13~20		2.31	5.06	1.60	18.53	20.13	43.79	36.08	Lic					6.1	—	—	2.94	0.31	9.5	24.4	—	—	—	32.7	1,044	266	1081	8.15	—	10.81	—			
		3	20~71		6.81	2.30	0.15	10.12	10.27	47.91	41.82	Sic					62	—	—	1.34	0.12	10.8	20.5	—	—	—	50.1	1,196	—	—	—	—	—	—			
		1	0~12		1.76	6.64	548	2351	28.99	3579	3522	Lc					53	—	—	3.85	0.33	11.8	28.7	—	—	—	19.6	1,315	547	12.78	7.31	—	12.78	—			
下士別別	108	2	11~24		1.59	5.19	590	31.23	27.13	3058	3229	Lic					53	—	—	3.01	0.31	9.7	20.3	—	—	—	20.6	1,587	3.04	10.03	6.99	—	10.03	—			
		3	24~53		2.10	2.05	13.70	41.21	5491	2888	1621	Cil					59	—	—	1.19	0.09	—	20.1	—	—	—	30.0	1,408	—	—	—	—	—	—			
	110	1	0~14		2.48	8.39	1.15	18.61	19.76	4322	35.22	Lc					57	—	—	4.87	0.31	15.7	29.9	—	—	—	36.4	1,485	651	14.62	8.11	—	14.62	—			
別中士別南	110	2	14~22		1.62	5.40	1.20	29.96	31.16	40.00	28.84	Lc					57	—	—	3.14	0.28	11.3	23.2	—	—	—	23.9	1,571	1.40	6.74	5.34	—	6.74	—			
		3	22~37		1.98	15.1	0.94	42.79	43.73	36.72	19.55	Cil					54	—	—	0.91	0.13	7.1	19.7	—	—	—	21.5	1,070	—	—	—	—	—	—			
	111	1	0~14		1.62	5.73	10.93	27.01	47.94	27.15	24.91	C L					58	—	—	3.32	0.30	11.0	20.1	—	—	—	36.6	1,182	591	12.95	7.04	—	12.95	—			
武徳	106	2	15~24		1.69	5.57	28.11	28.29	46.40	26.74	26.86	Lic					54	—	—	3.23	0.26	11.9	17.2	—	—	—	35.6	1,066	1.10	858	7.48	—	3.58	—			
		3	24~51		3.28	3.35	1.21	20.39	21.60	42.11	36.29	Lic					61	—	—	2.66	0.25	10.9	16.9	—	—	—	39.3	1,055	—	—	—	—	—	—			
	109	1	0~12		1.80	6.55	25.66	22.86	48.52	27.08	24.40	C L					55	—	—	5.42	0.42	12.8	29.7	—	—	—	29.9	1,143	691	14.84	7.93	—	14.84	—			
徳北士別北	106	2	12~19		1.97	7.54	19.91	20.42	40.33	24.04	35.62	Lic					52	—	—	4.37	0.33	13.3	17.8	—	—	—	22.8	1,									

土壤分析成績(畳)

保全対策区	土壌番号	地點番号	層位	深さcm	理学性										化学生性																
					礫 (風乾物中)%	風乾細土中		細土無機物中					土性	現地における理学性 100cc容積中					PH		置換酸度 H ₂ O/KCl Y%	有機物			塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 %	磷酸吸収率 %	有効態磷酸 me/100g
						水 分%	腐 植 砂 %	粗 砂 %	細 砂 %	砂 合 計 %	シ ル ト 計 %	粘 土 %		容 積 重 g	固 相 容 積 cc	水 分 容 積 cc	空 氣 容 積 cc	孔 隙 率 %	H ₂ O	KCl	T-C	T-C	C/N	CaO	MgO	K ₂ O					
上士別	大英	167	12	0~13 13~30 30~		4.0 3.8 3.9	5.2 3.9 2.6	5.6 14.2 -	28.9 38.3 -	34.5 52.5 -	45.5 34.9 -	19.7 12.9 -	SicL L -	- 14.3 -	- 42.9 -	- 17.0 -	- 57.1 -	6.4 6.6 6.4	4.6 4.4 4.6	1.15 3.92 7.17	3.00 2.29 1.50	0.32 0.21 0.13	9 11 11	25.9 19.9 16.6	13.3 6.9 2.7	0.4 1.0 0.6	0.2 0.1 0.1	5.2 3.5 1.7	85.6 1,130 1.195	3.5	
		44	2	0~12 12~26		3.3 4.2	5.6 4.3	6.0 7.1	19.0 16.7	25.0 23.8	46.9 49.1	28.0 27.1	Sic Sic cL	13.1 13.5 -	34.4 34.1 -	17.5 13.0 -	48.1 52.9 -	65.6 65.9 -	6.3 6.6 6.2	5.0 4.8 4.6	1.87 1.30 8.58	3.28 2.50 2.63	0.43 0.31 0.25	8 8 11	23.7 21.3 21.1	16.1 18.0 3.2	0.8 0.5 0.5	0.2 0.2 0.2	5.9 7.2 8	1,014 1,182 1,492	2.4
		33	3	26~52		4.5	4.5	14.0	30.0	43.9	38.4	17.7	Lic	-	-	-	-	-	6.2	4.6	8.58	2.63	0.25	11	21.1	3.2	0.5	0.2	8	1,492	-
	川南	1634	12	0~15 15~33		4.2 3.0	5.2 4.2	1.1 1.0	23.2 19.5	24.3 20.5	38.2 42.4	37.5 37.2	Lic	9.6 9.5 10.8	40.0 39.4 44.8	35.0 41.1 41.2	25.0 19.5 14.0	60.0 60.6 55.2	5.6 5.1 5.7	3.7 3.5 3.5	17.5 26.4 -	3.00 2.43 0.20	0.34 0.35 0.20	9 7 7	31.5 31.5 38.1	10.0 8.9 4.3	2.0 1.2 1.2	0.9 0.8 <br;>0.7</br;>	3.2 2.8 1.2	1,500 1,627 1,970	2.7
		61	2	33~56		4.5	2.5	0.8	33.2	34.0	33.6	32.4	Lic	-	-	-	-	-	5.7	3.5	1.47	0.20	0.20	7	38.1	4.3	1.2	0.7	1.2	1,970	-
		62	3	37~		2.8 3.3 4.4	3.2 1.7 0.7	11.9 14.2 5.7	17.6 12.5 9.8	28.5 26.7 24.6	38.9 38.6 59.9	31.7 34.6 59.9	Lic Lic Hc	10.2 12.9 -	39.9 49.0 -	20.1 29.0 -	40.0 51.0 -	60.1 5.1 -	5.6 5.1 4.5	5.2 4.5 4.2	0.3 2.8 22.5	1.81 1.01 0.45	0.19 0.11 0.06	10 9 7	16.3 12.9 16.3	11.2 8.1 1.4	0.4 0.4 0.5	- - -	6.9 6.2 9	730 830 1,060	-
兼内南	兼内南	1628	12	0~23 23~65		2.1 3.1	3.1 2.5	14.0 19.9	46.8 52.6	60.8 72.5	20.6 13.3	18.6 14.3	CL SL	13.1 13.9	54.4 58.0	18.1 16.0	27.5 26.0	45.6 42.0	6.6 6.8	4.8 5.4	0.7 0.6	1.82 1.43	0.12 0.20	15 7	16.3 14.9	11.8 11.3	0.8 1.2	0.6 0.4	7.1 7.4	54.9 69.7	14.8 13.2
川西北東	川西南	1623	12	0~15 15~40		3.1 3.3 3.9	4.7 3.8 2.5	2.7 6.9 19.2	27.9 22.4 22.3	30.6 29.4 41.5	34.4 38.3 35.2	35.1 32.4 23.3	Lic Lic CL	9.9 12.8 8.6	38.2 53.2 36.0	19.7 23.1 33.5	42.1 23.7 30.5	61.8 46.8 54.0	6.3 6.2 6.0	4.3 4.0 3.8	0.8 5.1 20.2	2.73 2.18 1.47	0.26 0.29 0.16	11 8 10	24.7 25.3 24.6	- - -	- - -	- - -	5.2 3.9 2.2	1,617 1,598 1,617	2.6
		202	2	0~18 18~50		4.1 5.2 5.8	4.2 2.6 2.6	13.5 14.0 5.6	18.4 15.2 22.9	31.9 29.2 28.5	35.1 32.1 40.7	33.1 30.8 30.8	Lic	10.2 10.5 -	39.6 37.2 -	37.4 44.3 -	23.0 18.5 -	60.4 62.8 -	4.8 4.7 4.2	4.3 4.2 4.2	1.02 2.82 5.25	2.44 1.52 1.50	0.26 0.17 0.18	9 9 8	22.3 21.6 25.5	7.2 3.3 2.7	0.8 0.3 0.1	- - -	3.4 1.5 1.0	1,018 1,538 1,482	-
		352	2	0~23 23~55		3.9 4.3 3.8	3.8 2.8 0.6	2.7 6.8 3.45	19.0 19.0 33.2	21.7 25.8 67.7	41.4 35.3 15.5	36.9 39.0 16.8	Lic Lic ScL	10.3 13.1 -	40.6 50.9 -	21.9 32.6 -	37.5 16.5 -	59.4 49.1 -	4.9 4.6 4.8	4.3 4.1 4.1	1.13 4.07 4.22	2.19 1.63 0.36	0.23 0.23 0.06	10 7 6	22.6 21.7 16.3	7.3 3.2 1.6	1.3 0.8 0.4	- - -	3.2 1.5 1.0	791 1,103 835	-
	東山	1630	23	0~15 15~27		3.0 4.5 5.5	3.4 1.5 0.6	15.3 16.5 17.1	19.3 22.5 23.0	34.5 39.0 40.5	38.7 29.8 25.1	26.7 31.3 34.9	Lic Lic Lic	10.3 10.5 -	38.6 39.3 -	14.4 20.7 -	47.0 40.0 -	61.4 60.7 -	4.8 4.6 4.5	4.2 4.1 4.0	1.31 3.74 6.61	1.94 0.89 0.35	0.15 0.10 0.07	13 9 5	17.2 18.2 14.2	5.3 2.8 2.0	0.3 0.1 0.3	- - -	3.1 1.6 1.4	637 1,016 1,346	-
川西中央	川西中央	1617	23	0~15 15~30		4.3 5.3 5.4	4.3 1.5 0.6	15.1 13.7 10.5	17.6 18.4 23.7	32.7 32.1 34.2	36.7 38.3 40.1	30.6 29.7 25.7	Lic Lic Lic	10.6 12.6 -	40.0 47.5 -	39.5 39.5 -	20.5 13.0 -	60.0 52.5 -	7.0 4.7 -	6.5 4.3 4.2	0.1 3.30 5.09	2.51 0.86 0.34	0.19 0.11 0.07	13 8 5	24.2 21.6 19.9	18.4 5.0 3.4	0.4 0.4 0.4	- - -	7.6 2.3 1.7	1,000 1,154 1,044	-
中士別	中士別	1632	23	0~20 20~50		3.7 3.4 2.2	5.5 3.6 0.9	9.3 6.7 9.9	20.2 22.8 26.9	29.5 29.5 36.8	34.8 35.3 30.7	35.8 35.3 32.4	Lic Lic Lic	10.3 11.1 -	39.8 43.2 -	38.2 31.3 -	22.0 25.5 -	60.2 56.8 -	5.3 5.1 5.3	4.6 4.3 4.5	1.8 1.0 8.2	3.18 0.89 0.53	0.36 0.10 0.11	9 8 5	24.1 19.1 9.3	10.5 7.0 0.9	0.9 0.4 0.3	- - -	4.4 3.7 1.0	795 1,010 847	-

土壤分析成績(畳)

保 全 対 策 区	土 壤 番 号	地 点 位	層 深 さ cm	理 学 性										化 学 性																
				礫 (風 乾 物 中)	風乾細土中		細土無機物中					土 性	現地における理学性 100cc 容中					PH		置 換 酸 度 Y ₁	有機物			塩 基 置 換 容 量 m ³ /100g	置換性塩基 me/100g			石 灰 飽 和 度 %	磷 酸 吸 收 率 %	有 效 態 磷 酸 mg/100g
					水 分 %	腐 殖 %	粗 砂 %	細 砂 %	砂 合 計 %	シ ル ト %	粘 土 %		容 積 重 g	固 相 容 積 cc	水 分 容 積 cc	空 氣 容 積 cc	孔 隙 率 %	H ₂ O	KCl		T-C	T-N	C/N		CaO	MgO	K ₂ O			
東	北 武 徳	16 31	1 2	0~14 14~32	5.1 8.9	5.1 2.4	3.6 3.4	16.6 25.5	20.2 28.9	38.7 21.3	41.1 49.7	Lic Hc Hc	110 94 104	39.5 34.5 36.0	37.5 42.5 52.1	23.0 23.0 11.9	60.5 65.5 64.0	4.9 4.3 4.7	3.7 3.6 3.6	20.8 69.7 69.2	2.96 1.38 1.07	0.32 0.21 0.15	9 7 7	17.9 22.6 22.6	5.9 2.8 1.7	1.2 1.5 1.4	0.6 0.6 1.1	32.9 12.4 7.4	940 1488 1595	10.0 tr tr
		29	3	32~	9.6	1.9	3.7	27.4	31.1	13.6	55.2	Sic	124	45.5	39.8	14.7	54.5	4.5	4.1	9.9	1.23	0.20	6	11.6	4.5	0.5	0.2	39.0 821	tr	
		11	1	0~20	4.0	3.8	4.4	16.8	21.2	33.9	44.8	Lic	94	35.0	28.3	36.7	65.0	6.7	6.5	0.5	2.20	0.30	7	19.3	14.4	1.7	0.4	74.6 1293	1.0	
陽	東 陽 1 2	29	2	20~31	4.1	2.1	3.4	12.6	16.0	48.0	36.0	Hc	143	49.5	39.0	11.5	50.5	5.0	3.9	31.8	0.83	0.14	6	12.0	1.7	0.5	0.2	13.8 804	tr	
		1	3	31~50	4.4	1.4	5.6	17.8	23.4	30.1	46.6	Lic	142	51.5	33.6	14.9	48.5	4.8	3.7	35.6	0.67	0.10	7	11.5	—	—	—	16.3 598	tr	
		5	2	0~23	3.8	3.4	11.8	20.6	32.4	33.2	34.3	Lic	110	41.5	27.3	31.2	58.5	5.6	4.1	4.7	2.04	0.30	7	13.8	—	—	—	56.5 470	1.0	
南	南 武 徳	16 44	1	0~11	5.2	5.0	16.2	22.8	39.0	30.2	30.7	Lic	108	41.5	28.5	30.0	58.5	5.4	4.1	2.2	2.88	0.28	10	26.5	21.8	4.1	0.3	82.2 1254	10.0	
		2	2	11~24	5.1	3.2	3.0	10.6	13.6	41.1	45.3	Hc	105	39.0	40.5	20.5	61.0	5.2	3.9	21.3	1.83	0.24	8	26.6	16.6	5.1	0.3	62.4 1234	tr	
		3	3	24~35	6.3	2.2	3.5	10.5	14.0	47.1	38.8	Sic	103	39.0	39.9	21.1	61.0	5.3	3.8	24.7	1.27	0.25	5	28.7	17.7	6.1	0.3	61.6 1399	tr	
東	東 多 寄 1	16 25	1	0~20	5.7	5.6	1.2	6.7	7.9	58.5	33.6	Sic	81	30.0	33.1	36.9	70.0	4.5	3.7	24.3	3.23	0.36	9	22.2	7.2	1.8	0.9	32.4 537	10.0	
		2	2	20~37	5.3	2.0	0.9	3.5	4.4	38.2	57.4	Hc	113	40.5	45.4	14.1	59.5	4.6	3.6	68.1	1.14	0.22	5	16.9	2.2	0.5	0.4	12.9 877	tr	
		3	3	37~	7.0	1.0	0.1	1.6	1.7	22.3	77.1	Hc	119	43.7	51.3	5.0	56.3	4.3	3.4	80.1	0.59	—	—	26.6	2.1	0.6	0.5	8.0 1109	tr	
多	裏 寄 2	16 12	1	0~18	3.1	3.8	2.5	15.4	17.9	27.8	54.3	Hc	101	40.0	34.5	23.0	60.0	5.2	4.0	5.0	2.20	0.31	7	12.7	—	—	—	39.4 953	1.0	
		2	2	18~40	3.7	2.5	3.4	13.0	16.4	49.9	33.8	Sic	124	49.1	37.9	13.0	50.9	5.1	3.9	17.8	1.47	0.22	7	13.5	—	—	—	11.3 671	tr	
		3	3	40~	2.7	3.8	5.0	14.6	19.6	29.7	50.8	Hc	134	51.0	34.5	14.5	49.0	5.0	3.8	22.3	2.21	0.34	7	8.4	—	—	—	14.8 438	tr	
寄	中 武 徳	16 38	1	0~18	5.9	3.8	3.5	25.1	28.6	36.0	35.4	Lic	79	31.5	27.4	41.1	68.5	5.6	4.7	1.8	2.23	0.32	7	24.4	19.2	2.4	0.4	78.7 1152	5.0	
		2	2	18~40	3.2	2.0	1.6	32.9	34.5	20.4	45.1	Hc	99	36.5	39.6	23.9	63.5	4.8	3.7	49.2	1.15	0.19	6	27.6	5.4	2.3	0.3	19.5 1318	tr	
		3	3	40~	7.3	1.0	3.5	34.1	37.6	32.7	29.6	Lic	115	42.5	44.5	13.0	57.5	4.7	3.6	70.1	0.58	—	—	30.3	3.3	2.7	0.3	10.8 1132	tr	